荒野の番犬

ジャック伍長

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

『イジツ』一面に荒野が広がる世界。

かつて『穴』からこの世界を訪れた『ユーハング』が持ち込んだ戦闘機はこの世界で生活するのには欠かせない物になっていた。

そんな誰もが空を飛ぶ世界に一人の男が迷い込んだ。

彼の名は『サイファー』、世界を巻き込んだ戦争に軌跡を描いた一人の傭兵。これは彼が再び戦いの空を駆け抜ける物語。

目次

第一章　CONTACT ―― 1
第二章　Escort ―― 22
第三章　Tail Man ―― 51
第四章　Rendezvous ―― 76
第五章　GALM 2 ―― 102
第六章　Mask ―― 135
第七章　Blind Spot ―― 162
第八章　Deep Strike ―― 196
第九章　Chain Reaction ―― 225

第一章　ＣＯＮＴＡＣＴ

よく晴れた日に空を飛ぶ。このイジツではそれが当たり前の事になっている。晴れた空を独り占めできるのは、俺がイジツに来て一番得をしたと思っているものの一つだ。

穴の向こうで飛んでいた時には何にも縛られず飛ぶなんてことはできなかった。俺が今まで飛んできた空は殺意や憎しみが混じってこちらを殺そうと飛んでくるような張り詰めた空だった。

いつまでもこの平和な空を飛んで過ごしたい。そう思いながら飛んでいたが水を刺された。右前方低高度に曳光弾の軌跡が見えた。近くで空戦が起きているようだった。目を凝らしてみると一〇〇式輸送機を護衛してる九六式艦戦が輸送機を狙ってきた零戦と交戦状態に入ったのが見えた。

こちらとの距離は１．５マイルほど離れていた。無視してそのまま目的地に向かっても良かったが、目の前で悪人がのさばるのを見るのは気分が良くない。それに乗り始めたばかりのこの機体の性能確認もしたいと思っていた。自分の中で『戦う理由』を作

り目の前の空戦に飛び込むことにした。

巡航時の位置にしていたスロットルを奥まで押し込む。愛機、紫電改の誉エンジンが唸りを上げて機体を加速させていく。現在空戦しているエリアから大体５００ｆｔほど上にいたがもう少し高度を上げることにした。迂回しつつピッチアップして１０００ｆｔほど上昇する。戦闘空域から１５００ｆｔ上空で水平旋回に入る。

降下した時に太陽が背に来るように調整しながら下方に見える空中戦を覗く。機数は零戦二一型が４機、翼と胴体中程に卵を加えた烏のマークをつけている。途中で寄ったロータの駅で聞いたこの辺りを根城にしてる空賊『シロカラス団』のマークだ。輸送機を護衛してる九六式艦戦も同じく４機、白い胴体に赤く染めた翼、最近結成された新進気鋭の飛行隊『アカツバメ飛行隊』だ。うち１機が被弾の影響で白煙を吹いている。そして一〇〇式輸送機が１機、胴体上面とエンジンカウル上面をピンクに塗った塗装でラダーに踊り子姿の女性のシルエットがある。名前はわからないが出張酒場をしている一座だろう。幸い九六式がうまく零戦を牽制しているおかげで目立つ損傷はない。

零戦の何機かはばら撒くように機銃を撃っていたせいか既に２０ｍｍが弾切れを起こしているようだった。おそらくこの空賊４機のうち３機は素人だ。お互いの連携などは考えず自分の狙った敵機をひたすら追いかけている。唯一周囲を見て動いている指揮を執っているリーダーも上下の敵機への警戒は薄いようだった。

確認した情報を整理して攻撃優先順序を決める。奇襲一撃目の攻撃でリーダーを墜とし、二撃目で２０ｍｍを残している敵機を墜とす。この２機を墜とせば輸送機への脅威は減る。

機体を１８０度ロールさせてスティックを手前に引き降下を開始する。敵機は水平旋回戦に入ってるのでこちらとの相対速度は遅い。最初に狙うリーダー機はまだこちらに気づいていなかった。変わらず白煙を吹いた九六式を追いかけている。近づいて敵機の未来位置を狙うように旋回し２２０ｙｄの距離でスロットルに付いたトリガーを引く、翼の２０ｍｍ４丁が火を噴く弾丸の嵐が敵機を襲う。主翼が折れ燃料の少なくなったタンクに火がつき炎を上げながらリーダー機が墜落していく。

命中を確認した後に再び上昇する。指揮を執っていたリーダーが撃墜されたのを見たことで混乱したのか、次に狙う予定だった敵機が高度を取ろうと上昇を始める。だが格闘戦を行って速度が低下していたせいで思うように上らないようだった。こちらは降下の速度が乗っているため上昇した後に旋回するだけの余裕があった。７５０ｆｔほど上がったところでなるべく速度を落とさないように１８０度旋回して機首をふらふらと上昇中の零戦に向けて緩降下を始める。

攻撃前に他の敵機に目を向けてみると、リーダー機と戦闘していた九六式が別な九六式を追っていた零戦に一撃を加えていた。乗っている機体は旧式だが腕はいいパイ

ロットのようだ。被弾した零戦からパイロットがベイルアウトする。これで残りは2機になった。

　再び目の前の敵機に目を向けると上昇を中止して水平に戻ろうとしていた。水平に戻るとようやくこちらに気がついたようでパイロットと目が合った。右から接近する俺の機体を見て焦ったのか左にロールして水平旋回、こちらに背を向ける形になった。判断ミスで背を向けた敵機に緩降下を続けて一気に食らいつき１６０ｙｄほどでトリガーを引く。発射された弾が機体の中央に吸い込まれていった。着弾の火花が散り、機体が黒煙をあげる。そのまま敵機を追い越して機体を眺めると、血に塗れたキャノピーが見えた。いつ見てもあまり気分のいいものではない。そのまま敵機は姿勢を崩して墜落し荒野に黒い狼煙を上げた。

　再度上昇して高度を稼ごうとしたが、最後の零戦は格闘戦をやめ逃げようとしていたところだった。背中を心配することのなくなった九六式３機がもう1機と合流して逃げる零戦を追っている。俺も追撃をするために上昇はやめて降下しつつ左に９０度旋回、敵機より高度は低いが死角になる後下方から接近できるようにした。少し距離はあるがこの機体ならあの2機種には余裕で追いつける。零戦にじわじわ引き離されている九六式を追い越して零戦の後下方から接近する。敵は真後ろで離れていく九六式に意識が向いていてこちらに気づいていないようだ。こちらが十分に接近したところで

エンジン音から敵がこちらに気づいた。だがもう手遅れだった。トリガーを引き機銃が弾を吐き出す。ブレイクしようとロールした機体に弾が当たり風穴を開けていく。機体の破片が飛び散り燃料タンクから火が噴き出す。コントロールを失った機体はそのまま急降下していき空中で爆散した。

敵の結末を見届けた後に反転して輸送機の方に進路をとる。前方に輸送機の方に向かっていたアカツバメ隊がいたので追いついて隊長機の横に着く。隊長機に向けて手を振ると向こうも手を振ってきた、そのままハンドサインで無線のチャンネルを伝えてきた。指示されたチャンネルにダイヤルを回して合わせる。声が聞こえてきた。

<<横にいる０３２の機体　こちらはアカツバメ隊　隊長のデトだ　救援に感謝する>>

<<ガルム隊のサイファーだ　助けた訳じゃない　機体の性能確認がしたかっただけだ>>

<<あんた１人なのに隊なのか？なんにせよ助かった　おかげで無事に全員生き残れたよ　一度近くの空の駅に降りるんだ　何か奢らせてくれないか？>>

<<行くところがあるんだ　気持ちだけもらっておく　じゃあな>>

<<そうか　じゃあ次に会った時に奢らせてもらうよ>>

<<ああ　生きてたらな>>

そう言って交信を終えた。目的地の方向に旋回する前にふと輸送機を見ると、窓から出張酒場の踊り子らしき女性たちが手を振っていた。一杯付き合えばよかったかもしれないと少し後悔しつつ旋回して彼らと別れた。

彼らと別れてからまたしばらく飛んだ。こうして街を飛び渡り空戦する生活もだいぶ慣れてきていた。この世界に来てから元の世界に戻るための情報を得るためにずっと各地を飛び回っている。今回の目的は穴に関する資料を探すことと資金を得るために輸送船の護衛パイロットの契約を結ぶことだった。契約しようとしているオウニ商会は以前聞いた穴を巡って争ったイケスカ動乱の際に反イケスカ派の中核になっていた。もしかしたら何か手がかりがあるかもしれなかった。

数十分ほど飛んだ後目的地上空に着いた。空戦後の高揚感に浸りながら目的の街「ラハマ」の地上管制にコンタクトを取る。コンタクトを取ると言ってもまともな管制塔のない街なので見張り台の上に立ってる自警団員にバンクで合図を送って進入の許可を受けるだけの簡単なものだ。

管制係がこちらに気づいたらしく双眼鏡で様子を伺い始めたのでバンクして合図を送る。それに応えるように進入許可の合図をこちらに送ってくる。『了解』の為のバンクをし着陸態勢に移っていく。

滑走路に正対する為にスロットルを少しずつ絞りながら左旋回していくと地上に飛

行船と6機の一式戦闘機『隼』が見えた。駐機されてる隼は迷彩パターンはバラバラだったがシルバーの下地に緑色の迷彩塗装という点は共通していた。その上からそれぞれ胴体や翼端に固有の塗装が施されており尾翼にはパーソナルマークが描かれていた。唯一完全に全機で揃っていたのは翼と胴体の飛行隊のマークだった。

オレンジと黄色の下地に紅色のプロペラのマーク。

ラハマに来る前に立ち寄った街でも噂を聞いたことのある、女性だけで構成された凄腕の用心棒『コトブキ飛行隊』のマークだ。

飛行船の方に目を移してみると側面に『羽衣丸弐』の文字が見えた。俺がこれから仕事を受けに行くオウニ商会の飛行船だ。

隼と飛行船を見ながら旋回しているうちに滑走路と正対する位置まで来た。キャノピーを開けてフラップを着陸位置まで展開して脚を下ろす。

今乗っている紫電改は前に乗っていた紫電より着陸がしやすい。高かったが有り金をつぎ込んで買っただけの価値はあるいい機体だ。

ゆっくりと機速を落としていき機首上げ状態で滑走路に降りていく。前の紫電では前が見づらく大変だったが胴体が絞られたこいつだと前が見やすかった。機体が地面に接地して体に振動が伝わってくる。フラップを格納位置にしてブレーキを踏んで減速していきながら駐機スポットを探す。

特に指示がなかったので羽衣丸が繋留されてる場所に近い駐機スポットに機体を置くことにした。コトブキの隼を横目に見ながら地上滑走していく。駐機スポットで機体を完全停止させてエンジンを止め、シートベルトを外して立ち上がる。座席の後ろに押し込んでいたバッグを肩から下げて機体から降りる。

羽衣丸に向かって歩くとその大きさに圧倒された。もともといた世界ではこれほどの大きさの飛行船は見たことがなかった。これほどまでに大きな航空機が護衛機を連れて空を飛んでいるのを見ると『国境無き世界』が運用した『ＸＢ―０』を連想する。

歩みを進めて飛行船のタラップまで来た。飛行船を見上げながら上って最上段に行くと何か、いや誰かがぶつかってきた。ぶつかった衝撃で思わずバッグを落としてしまう。

「ごめんよおっさん!!」

そう言いながらライトブラウンのくせ毛をした少女がタラップを駆け下りていった。

落としてしまったバッグを拾い上げなぜあんな子が飛行船から降りてきたのだろうと思ってるうちに

「待て!このバカチ!!」

という声が聞こえて二度目の衝撃を食らいまたバッグを落とす。その声の主である赤いコートに飛行帽を被った少女はこちらに目もくれず先に行ったくせ毛の少女を追

いかけていった。
二度と落としたバッグを拾い軽く叩いて埃をはらっていると乗降口の奥から1人の女性が出てきた。奥にもう3人いる。
「申し訳ない、部下が失礼をした。怪我はないか？」
そのうちの一人、赤毛の髪を高い位置で一本で結んだ女性がそう言う。
「大丈夫、怪我はないよ。部下ってことは君が隊長さんか？」
軽く返答をした後聞いてみる。おおよそ予想はついていた。
「ああ。私はオウニ商会所属、コトブキ飛行隊隊長のレオナだ。部下の失礼を許してほしい」
予想が当たった。彼女があのコトブキ飛行隊をまとめている隊長だ。堂々とした振る舞いからはかなりの修羅場をくぐってきたように見える。
「気にしないでいい、怪我もしてないしな」
「本当に申し訳ない。二人にはあとできつく言っておく」
「いいよいいよ、ところで聞きたいんだけど…マダム・ルゥルゥはいるかい？」
申し訳なさそうにしてた隊長さんの顔が引き締まる。少し警戒されたようだ。
「ああすまない、俺は別に怪しいものじゃない」
グローブ外して右手を差し出す。

「俺はサイファー、次の仕事の臨時のパイロットの募集を見てきたんだ」
隊長さんがそれを聞いて警戒を解く。握手は返って来なかったが。
「そうだったのか。生憎だがマダムは今羽衣丸にはいない」
グローブを付け直して返事を返す。
「そうか…どこに行けば会える？」
「今はオウニ商会の事務所にいると思うが…副船長に聞いてみれば詳しく分かる筈だ」
「副船長なら今船橋にいるわよ」
隊長さんとは別な声が聞こえた。先ほど乗降口の奥にいた3人のうちの1人だ。へそを出した服装をした美女だった。先に2人走って出ていったことを考えるとこれから6人で飛行訓練だったのだろう。
「船橋にいるんだな、ありがとう。えっと…」
「ザラよ、船橋なら入って左に曲がってすぐよ」
「わかった、ありがとう。これから訓練みたいだな、邪魔して悪かった」
俺はそう言ってタラップの端に寄って道を開けた。
隊長さんと副隊長の後ろから金髪の高貴そうな少女と銀髪を2つに縛った無表情の少女が付いていく。
少しして4人が隼の方まで着くと隊長さんが先に行った二人を叱るのが見えた。あ

の二人も隊長さんにだけは頭が上がらないように見える。
それを眺めた後に羽衣丸の中に入る。副隊長さんの言ってた通り少し歩くだけで船橋に着いた。扉をノックして開ける。
「すまない、副船長はいるかい?」
「はいはい、私が副船長のサネアツですけど」
ブリッジにいる頼りなさそうな男性がそう答えた。
「次の仕事での臨時パイロット募集の件で来たサイファーって者なんだが、ここに来ればマダム・ルゥルゥにとりついで貰えるときいたんだ」
用件を伝える。
「ああフリーのパイロットの方ね。今連絡するからちょっと待っててもらえるかい?」
「ああ分かった」
思ったよりもあっさりコンタクトを取ってもらえた。副船長が赤い電話機で電話をかけて話し始めた。やたらとへこへこしながら話している。
副船長が電話している間にブリッジを見回すと大きな鳥の剥製が置いてあった。マダムの趣味かこの世界の慣習なんだろうか?考えてるうちになぜかその鳥の目がこちらを向いた気がした。
副船長が受話器を置いた。話が終わったようだ。

「直接説明するから今から事務所に来て欲しいって言ってたよ、」
門前払いされることだけは避けられたみたいだ。とりあえず完全な無駄足になることはなくなった。事務所で面接すると言われたが場所がわからないので副船長に聞く。
「事務所の場所を教えてもらってもいいか?ラハマは初めてでね」
そう聞くと副船長が地図を出して教えてくれた。空の上から見た時映像と合わせて場所を覚える。
副船長に礼を言って船橋から出る。結局あの鳥はなんだったのだろうか。この船に乗り込めるようになったら確かめよう。
羽衣丸から出て空を見上げると二機の隼が模擬戦をしていた。尾翼に赤い鳥のマークをつけた隼が矢印のマークをつけた隼を追いかけている。どちらもかなり正確な操縦だった。矢印マークの隼は機械的な正確さを持って飛んでいた。全ての挙動が正確で一動作一動作ごとに起きる余計な動きを見せなかった。鳥のマークの隼の方は少し違う正確さの飛び方だった。機体に無理をさせずに性能を引き出す自然な飛び方、そう例えるのが一番適切だと思える飛び方をしていた。旋回時の慣性のかかり方が緩やかで美しかった。
少し見てると矢印の隼がマイナスGをかけた旋回を行なってもう一機の死角に飛び込んだ。鳥のマークの隼がロールして追いかけようとするがロールが終わりピッチ

アップしようとしたときには、矢印の隼はマイナスGのかかる旋回をやめピッチアップしてプラスGの旋回に移っていた。再び死角に入られた鳥マークの隼は対応が遅れて再びロール、その隙に矢印の隼は鳥マークの隼の後ろに付くように旋回していった。ロールが終わった頃にはもう矢印の隼はほぼ背後に付く形になっていた。

だが背後を取られそうになってもまだ鳥のマークの隼は諦めていなかったようだった。左右に旋回を繰り返して射線に入らないように飛ぶ、そして何度か左右に旋回した後の右旋回から左旋回に入った直後にスナップロールで一気に１８０度ロール、左旋回から右旋回に急に切り返した。この機動に接近してた矢印の隼はついてはいけなかった。だがここで矢印の隼が上昇。垂直ターンを行いハイヨーヨーのような機動を取り水平ターン中の鳥のマークの隼の横を狙う形となった。

それが決着となった。二機の隼が空戦をやめ編隊を組み着陸してくる。

ひさびさに見る本格的な空中戦に心が踊った。イジツに来てから見ることのできなかったハイレベルな空戦だった。

二機が着陸した後、別の二機が上がっていく。本当はもう少し見ていたかったがそろそろ動き始めないと面接に遅れそうだった。

ラハマの飛行場を抜けて小道を何度か曲がると大通りに出た。そのまま少し歩いていくとオウニ商会と書いた看板がかかった建物があった。扉を開けて中に入ると受付

の社員がいたのである名前を伝えて取り次いでもらった。そのまますぐにマダムの元に案内された。
「あなたがサイファー？　」
　前髪を上げた赤いドレスに身を包んだ女性、以前に新聞で見たマダム・ルゥルゥその人だった。
「どうも、よろしくお願いします。マダム」
　軽く挨拶を済ませて2人でソファに腰掛けた。
「あなたの噂は聞いてるわ。さっきも空賊に襲われてた輸送機を助けてたみたいね」
　少し驚いた。たった1～2時間前のことがすでに知られていた。
「たまたま進路にかぶったので追い払っただけですよ」
「謙遜しなくてもいいわ、他にも翼を青く染めた機体が空賊を追い払ったって話は聞いてるのよ…最近突然にね」
　こちらを怪しむような口調になった。当たり障りのない返答を返す
「やっと最近飛び始めたばかりですので」
「最近飛び始めた人間がこれだけの空戦に首を突っ込んで生き残るとは思えないわ」
「もともと運がいい方なんです」
　マダムはまだ訝しむような目でこちらを見ている。

「まあいいわ。悪い噂は聞かないようだし。今回の輸送船の護衛パイロットとしてあなたを雇用します」

なんとか契約にこぎつけた。マダムから出された契約書にサインをしていく。

サインし終わった書類を整理し終わってマダムが立ち上がった

「出発は明日の11時、9時からミーティングを行うわ。羽衣丸に部屋を用意させておくから後は副船長に聞いてちょうだい」

「了解です。今回はよろしくお願いします」

オウニ商会の事務所を出て来た道をもどる。感の鋭そうな婦人だったと思い返す。今回の護衛任務で俺が穴の先から来たとバレてしまうかもしれないと思った。飛行場へ向かう最中に本屋を見つけたので立ち寄ってみる。一通り棚を探すが穴に関する文書はゴシップ雑誌以外は特になかった。穴にまつわる騒乱に関わったからと期待していたがこの街はハズレだったかもしれないと少し思い始めていた。今回の護衛任務が終わったらすぐに次の街へ行こう。そんなことを考えながら本屋を出た。

飛行場へ戻ってくるとコトブキの隼が再び駐機されていた。訓練は終わったようだ。先ほどコトブキ飛行隊と出会ったタラップから再び中に入り船橋に向かう。船橋に入ると副船長がこちらに気づいた。

「やあ、ルゥルゥから聞いたよ。今回はよろしく」

「こちらこそ、噂の羽衣丸での旅を楽しみにしてる」
「部屋まで案内するからついてきてくれるかい」
「ああ、頼む」
船橋から出て上に上がり船内の説明を受けながら部屋まで案内された。二段ベッドが二つある四人部屋だった、先客はいないがこれからくるかもしれない。とりあえず持っていた荷物をベッドの上に置いた。副船長に礼を言うと船橋に戻っていった。
時間を見てみると午後3時頃だった。船内散策を遅めの昼食を兼ねて食堂に行くことにした。部屋のある階から一階上に上がるとジョニーズサルーンと書かれた看板がドアの上にあった。なぜかタタミを扉にしている。タタミを開けて中に入るとカウンターにマスターらしき男性とウェイトレスの女性がいた。カウンターには椅子がなかったのでカウンター横の席に腰かけた。昼食を選ぶためにメニューを見ていると再び扉が開いて6人組が入ってきた。コトブキ飛行隊だ。
「あ〜あ、今日はケイトに勝てると思ったんだけどなー。あ、リリコさん私いつものパンケーキ！」
黒髪の少女がぼやきながら流れるように注文する。
「キリエの機動は正確、ゆえに予測しやすい」
銀髪の少女がその飛び方を評価している。この2人が俺が見た訓練で飛んでた2機

のパイロットだろう。
「キリエいっつもケイトに負けてるよね！ケイトみたいな空賊が来たらあっさり墜とされちゃうんじゃないの！」
　薄い茶髪の小柄な少女が黒髪の少女をからかっている。
「チカ、ケイトのような空賊はそうそう現れませんわよ。あら先客がおりますわね」
　金髪の少女がそういうとくせ毛の少女がこっちへ寄ってきてメニューを見ている俺の顔を覗き込んでくる。そのうち彼女が口を開いた。
「あれ？おっさんよく見たら今朝私とぶつかった人じゃん。どうしてここにいんの？」
　自己紹介を兼ねて挨拶する。
「ああ、挨拶が遅れた。次の輸送の護衛パイロットとして雇われたガルム隊のサイファーだ。しばらくの間世話になる。よろしく頼む」
「サイファー？へんな名前。私はチカ！コトブキ飛行隊の一番槍だ！おっさんも墜とされないように気をつけなよ！」
　そんなことをしてると黒髪の少女もこちらにきた。
「あ、朝ぶつかった人だ。おじさんも用心棒だったんだね、私はキリエ。よろしく」
　その後に隊長さんもこちらにきた。
「よお隊長さん、さっきは助かったよ」

「こちらこそ先程は二人がすまなかった。ザラに言われて思い出したよ。あなたがあのサイファーだったんだな」
　銀髪の少女が話に入ってくる。
「サイファーとは何者？」
　金髪の少女が答えた
「最近通りすがりに輸送機を襲ってる空賊を堕としていくと言われている用心棒ですわ」
　茶髪の女性が続ける
「しかも空賊には一切容赦しないって噂よ」
「いざ言われると恥ずかしいな…君たち6人があのコトブキ飛行隊か」
「そういえば私とザラ以外紹介してなかったな。左からキリエ、チカ、エンマ、ケイトだ。よろしく頼む」
「こちらこそよろしく。噂のコトブキ飛行隊の腕前を見させてもらうよ」
　そんな会話をしてるうちにキリエが頼んだパンケーキが来た。コトブキ達が俺の席の隣の角のテーブルに座ってそれぞれ注文しだす。俺の方もカレーと唐揚げ、それにオレンジジュースを注文した。しばらく待つとウェイトレス（キリエの言葉を聞く限りリリコさんと言うらしい）が注文した料理を持ってきた。コトブキと比べるとだいぶそっ

けない態度だった。料理を食べてみるとどちらも美味しかった。カレーライスは具が煮込まれており程よい辛さだった、唐揚げはでかく味付けもしっかりしていて食いごたえがあった。食い終わりジュースを飲み干してマスターのジョニーに礼をいいサルーンから出た。あの量のメニューだと輸送任務中は料理に飽きなさそうだった。

サルーンを出て今度は羽衣丸の格納庫を見てみることにした。格納庫に上ってみるとツナギを着た整備班が慌ただしく走り回っている。外に出ていたコトブキ飛行隊の隼を運び入れる準備をしていた。指示をしている女性の声が聞こえるが姿が見えなかった。ふと視線を下げてみるとチカと同じくらいの背丈の少女がイナーシャハンドルを持って檄を飛ばしていた。その少女に近づいて行き話しかける。

「よう、あんたがここの責任者か?」

怪訝そうな顔をしながら少女が振り向いた。

「ん?そうだがあんた誰だ?見ねえ顔だが…」

「次の輸送の護衛パイロットで雇われたサイファーって者だ」

「ああ、と言うことはお前が外の紫電改のパイロットか?」

「そうだ。頼みがあるんだがコトブキの機体の搬入が終わったら俺の機体の搬入頼めるか?」

「構わないぞ、隼の作業が終わったら入れておく」

特に苦労もなく了承してくれた。コトブキ飛行隊の活躍を見る限りこの整備班は優秀なのだろう。礼をいいついでに一つ懸念していたことを頼んでみる。
「ありがとう、ついでに機銃の弾も補充して欲しいんだがあるか？」
「二号銃の２０ｍｍか？前にナサリンの奴ら用に仕入れた奴があるはずだから大丈夫だぞ」
「そうか、よろしく頼むよ。ええと…」
「整備班長のナツオだ。ちゃんと機体の面倒は見てやるから安心しろ。」
「よろしく、邪魔して悪かったな」
俺がそう言った後班長は再び搬入作業に戻っていった。格納庫で見ていたかったが邪魔になりそうなので格納庫から出ることにした。
船内を散策し各箇所の乗組員への挨拶が終わって5時半頃に自室に戻った。着ていたフライトジャケットを脱ぎ奥にあるスペースに靴を脱いで上がった。カバンからクリーニングキットを取り出して机に広げる。そしてショルダーホルスターから携帯している銃を抜きフィールドストリッピングを始める。
『ＳＰＲＩＮＧＦＩＥＬＤ　ＡＲＭＯＲＹ　Ｍ１９１１―Ａ１　ＰＲＯＦＥＳＳＩＯＮＡＬ』傭兵になりたての頃から何度も命を助けてくれた相棒だった。空を飛ぶようになってからはほとんど使わなくなっていたが、この世界に来たことでまた握る事が多く

なった。１０年以上使ってるため各部のブルーイングが落ちて地のシルバーが見え始めていた。この全く見知らぬ土地に来てからはこいつの整備が心の安らぎだった。

銃の整備が終わった頃にはすでに7時近くになっていた。自分のベッドに戻り横になる。俺がこの世界に来てから7ヶ月ほど経っただろうか。何者にも縛られないこの世界の空を飛ぶのは楽しい。だがやはり自分の世界に帰りたかった。今はひたすらにヴァレー基地の雪が恋しかった。そんなことを考えているうちに眠りに落ちた。

第二章　Ｅｓｃｏｒｔ

<<戦う理由は見つかったか？相棒>>
　かつての仲間が前にいる。
<<不死身のエースってのは、戦場で長く生きた奴の過信だ>>
　光の剣を振りかざしながら
<<お前のことだよ、相棒>>
　ＩＦＦが敵だと示している。
<<皮肉だな、終止符打ちが番犬ガルム同士とはな>>
<<相棒、道は一つだ、信念に従い行動する。それが全てだ>>
　こちらを狙い撃ってくる。
<<時間だ>>
<<惜しかったなあ相棒、歪んだパズルは一度リセットするべきだ。このＶ２で全てをゼロに戻し、次の世代へ未来を託そう>>
　彼がお互いの退路を断った
<<もう一度正面からだ>>

世界を終わらせるわけにはいかない。

<<撃て！臆病者！>>

墜とすしかない。

<<撃て！>>

……

「…っ！」

思わず飛び起きた。１９９５年１２月３１日。かつての『相棒』と世界の命運を巡って争ったあの日の夢だ。目の前で二代目の僚機が焼かれ、俺が相棒を撃ち墜としたあの日の光景が目に焼き付いている。彼にトドメの一撃を与えた時。未だに奴のあの時の本心が分からなかった。本当に世界をリセットしようとしたのか、それとも俺に覚悟を決めさせるためだけに撃ったのか。いずれにしろ答えを確かめることはできない。彼は俺がこの手で堕としたのだから。もし生きていたとしても文字通り住んでいる世界が違う今の状況では会うことはできない。

この夢を見た後はつい悲観的になってしまう。そんなことを考えながら時計を見てみると朝の５時だった。眠りに落ちたのがおそらく夜７時半だったからかなり長い時間寝ていた。悪夢を見たせいか体がかなり汗ばんでいる。マダムから聞いた出航前の

ミーティングまではまだ数時間あった。ベッドから体を起こしてブーツを履いて一階層上のシャワー室に向かう。廊下に出てみると流石にまだ人はいなかった。人気のない静かな廊下を歩いてシャワー室にたどり着く。夢のことは忘れて切り替えよう、そう思いながら熱い湯を頭から浴びる。シャワーを浴び終わる頃にはだいぶ気分は良くなっていた。いつか必ず元の世界に帰る。改めてそう決意した。

シャワー室を出て自室に戻ってきた。ミーティングまでにはだいぶ時間が空いている上に酒場もまだ開いていなかった。二度寝することも考えたが眠たくはなかった。それにまたあの夢を見るかもしれないと思うと寝たくはなかった。

ただ待っているのも辛かったので再び部屋を出て格納庫へ向かうことにした。昨日は搬入作業を班長に依頼したまま寝てしまったのでちゃんと搬入されたかも確かめておきたかった。自室から出て先ほど通ったシャワー室前を抜けて上の階の格納庫まで出た。格納庫は昨日の搬入作業の忙しさが嘘のように静かだった。だが完全な無音ではなかった。誰かが作業をする音が聞こえる。向こう側の柱の陰から物音がしているようだった。少し横にずれてのぞいて見ると人影が見えた。昨日ここで会ったナツオ整備班長だった。隼用の１２．７ｍｍと思われる弾のチェックをしていた。彼女がこちらに気づき片手をあげた。こちらも片手を上げて近づいていく。

「よう、早いな。機体の様子でも見てきたのか？」

班長がチェック作業しながら話しかけてくる。
「少し早めに目が覚めてしまってね。サルーンにでも行こうかと思ってたんだがまだ開いてなくてな」
そう話している間も班長は手早く弾のチェックを進めていく。
「いつもそうやってチェックしてるのか？」
「ああ、出航前の時は毎回やってるよ。あいつらの隼は2丁しか機銃ついてねえからな。もし不良な弾なんかでジャムを起こしたら、それだけでも隙になっちまう。だからこうしてちゃんとチェックしてるのさ」
口は開きながらもチェックしている手は一切止まらなかった。この作業を見ただけでも彼女の整備への思いが伝わってくる気がした。
彼女になら安心して機体を任せられる。改めてそう思った。
作業している彼女と話してるうちに他の整備班の面々も格納庫に現れ始めた。ナツオ班長に聞いてみると出航前に羽衣丸の出発前総点検についての整備班のミーティングをするんだと言っていた。流石に邪魔になると思い、ナツオ班長に礼を言って格納庫から出た。
格納庫から降りてサルーンの前を通ると話し声が聞こえた。中に入るとコトブキたちが朝食をとっていた。机の上にある料理は相変わらず量が多かった。昨日と同じ席

に着きメニューを見て今日の朝食を選ぼうとする。豊富な数の料理は長い目で見れば飽きがこなくていいが、こういう時は面倒だった。重すぎる料理では胃がもたれてしまうし、軽すぎては胃に残らない。迷った結果ハンブルグサンドとオレンジジュースを頼むことにした。ハンブルグサンドはこちらの世界でのハンバーガーだった。程なくしてハンブルグサンドが出てくる。中のパテはだいぶ濃い味付けだった。ラハマは岩塩が名産なためか今までの町で出てきた料理に比べて味付けが濃い目だった。イジツに来てから薄味の食事ばかりで飽きていたので元の世界の味に近いラハマの料理は食べてて少し嬉しくなった。

　ハンブルグサンドに口をつけると以前ディレクタスに出店していたオーシアのハンバーガーショップにＰＪと行ったことを思い出した。ベルカ戦争の終結後にオーシア出身のＰＪが、基地の食事に飽きたから久しぶりに食べたいと言っていたので二人でディレクタスに繰り出したのだった。食べながらＰＪがオーシアの店舗ではうちのパン屋がバンズを卸してると自慢げに話していたことが思い出される。

　この食事ができるならラハマを生活拠点にしてもいいかもしれないと冗談混じりに少し思った。

「辛そうな顔をしてるけどお口に合わなかったかい？」

　気弱そうなマスター、ジョニーがこちらに問いかけてきた。

「いや俺好みの味付けだ、美味いよ。少し死んでしまった仲間のことを思い出しただけだ」
「おじさんってガルムって飛行隊の隊長なんだよね？飛行隊なのにどうして一人なの？」
パンケーキを頬張ってたキリエが横から入って聞いてきた。少し考えてから口を開く
「元は俺ともう一人でやってたんだ。最初のやつとは喧嘩別れ、二人目は墜とされちまった」
「一人で戦って怖くないの？」
「怖くないと言えば嘘になるな。でも背中を預けられる奴に出会えてないんだ。信用できない仲間の方が俺は怖い」
そう言ってからハンブルグサンドを再び口にすることで話を終わらせた。
食べながら六人で話しているコトブキを横目に見ていた。全員が楽しそうな顔で話している。誰かに会いに行くという話や自宅の庭木の話、昔の仲間に会いたいなど話題は尽きないようだった。この子達のようになんでも語り合える友人が今いたらどれほど幸せだろうか。キリエにああは言ったもののやはりこの世界でも誰かしら仲間を作るべきなのかもしれない。

この仕事が終わったら穴の事を調べる他に仲間を作ることも努力しようか。そんな事を考えながら俺は食事を終えた。

食事を終えてジョニーに礼を言った後にサルーンを出た。自室に戻ってミーティング前に地図帳を見る。今回は戦災復興の進むポロッカへのラハマ産の塩と医療品の輸送が目的だった。ポロッカは俺がこの世界に来る前に起きたイケスカ動乱の際にイサオ一派の手によって爆撃を受け焦土と化していた。同じような事態になったショウトと比べるとポロッカは受けた被害が甚大だったためか未だにうまく復興が進んでいなかった。

復興物資の中でも貴重な医療品は狙われやすいためイケスカ動乱で関わりがあり、評価も高いオウニ商会に依頼が来たのだと契約した時にマダムが言っていた。

ミーティング前に大雑把に航路を確認し終えて地図帳をしまう。時間より少し早かったが先にミーティングを行う娯楽室へ向かうことにした。娯楽室にはソファと机、そしてビリヤード台があった。ソファに腰掛けてしばらく待つとそのうちコトブキが入ってきた。

「早いな、もう来てたのか」

俺を見た隊長、レオナがそう言いながら持っていた丸めた地図を机の上に広げる。

「そちらのがいいのであれば始められるがどうする？」

「大丈夫だ。初めてもらっても構わない」
そう答えるとレオナが談笑していた他のメンバーを机の近くに呼んだ。
「出発前のミーティングを行う。マダムから聞いてると思うが、今回の輸送の目的地はポロッカだ」
レオナが地図上のポロッカを指差す。少し気になったことがあったのでレオナに質問した。
「そういえば医療品はラハマでは積んでないようだがどこか別の場所で積むのか?」
「ラハマからポロッカの間にあるルタオで医療品を積んでいく予定だとマダムからは聞いてる」
レオナがルタオの位置を指し示しながらそう言った。
「ラハマからルタオまでの航路では空賊は確認されていない。おそらく襲われることはないと思うが油断はしないように」
次にポロッカから少し外れた空域を指差してレオナが言う。
「ポロッカに近いこの辺りの空域では最近二つの空賊『ヤマアラシ団』と『フクロネズミ団』が目撃されている」
レオナが空賊を表す駒を地図の上に二つ置く。
「目撃情報によると使用機体はヤマアラシ団が鍾馗、フクロネズミ団は九六式艦戦、フク

ロネズミ団の方は型は不明だが少数の零戦を持っているそうだ。機数はどちらも7機程度だ」
　そこまで高性能な機体を使ってるわけではないようだ。レオナが続けて言った。
「この二つの空賊は縄張りにしている空域が近いため度々小競り合いをしているらしい」
「じゃあもうお互い潰しあって無くなってるかもしれないね！」
　楽しそうにチカが喋り出す。
「チカ、油断は禁物ですわ」
　エンマがチカを諌める。ザラがそれに続く。
「エンマの言うとおりよ。二つが纏まるかもしれないわ」
「こちらの所属を知っていた場合、二つの空賊が共同で襲ってくる可能性が高い」
　ケイトが可能性を提示する。十分考えられる話だった。医療品は空賊にとっても貴重な物資のはずだ。
「オウニ商会から情報が漏れた場合ってこと？」
　キリエがケイトに問いかける。
「こちら側から漏れることは考えにくい。漏れるとすればポロッカ側から漏れることが考えられる」

ポロッカの情勢を考えればありえなくはない話だ。空賊と結託して医療品を奪い売り捌けば金になる。
「基本的にはいつもどおりで行く。羽衣丸のレーダーが敵を探知した段階で発進、2機編隊で羽衣丸に近づけないように数を減らす」
「俺は好きにやらせてもらっていいのか？」
「ああ、発進してからはそちらの判断に任せる」
「了解だ」
一通りミーティングを終えてコトブキが自室に戻っていった。こちらも娯楽室を出て自室に戻る。羽衣丸の出航まであとわずかだった。
ミーティングから2時間ほどして羽衣丸のエンジンがかかり出航の準備が進んでいく。少ししてから船内アナウンスで出航の合図があった。船首の拘束が解かれ巨大な船体が浮き上がる。この世界に来てから初めての飛行船での旅が始まった。

出航から1日とちょっとが経った。すっかりラハマは遠くになり、街もない一面の荒野が広がっている。ミーティングでレオナが言っていたように空賊の情報もない平和な空域だ。昨日に続き俺はサルーンで時間を潰していた。何かトラブルがあった場合のことを考えると流石に酒を入れることはできないのでメニューにあるノンアルコー

ルのドリンクの中から順に飲んでいた。
　ここが地上であれば射撃訓練などでもして時間を潰せていたかもしれないが火気厳禁の飛行船内でそんなことができるわけもなかった。
　かつての相棒のように本を読む趣味でもあれば暇つぶしにちょうど良かっただろうとほとんど無趣味な人生を送ってきた自分を恨めしく思いながら時間が過ぎるのを待っていたオーシア海軍の船乗りたちはこういう船旅でどうやって暇を潰しているのだろうかと考えてるうちにまた少し元の世界が恋しくなってきた。
　マスターのジョニーに何か本でも持ってないかと聞くとあいにく料理のレシピ本しかここには置いてないと言っていた。流石にレシピ本は読む気が起きなかったので礼だけ言ってやめておいた。
　コップの中に入ってる飲み物を飲み干して次の飲み物を注文する。この数時間でもう何度もやった動きだ。いっそ空賊でも襲ってきてくれたらと思いながら出てきた飲み物に口をつける。
　羽衣丸の速度と経った時間からいってそろそろルタオについてもいい頃かと思っていると羽衣丸が高度を下げ始めた。コップを空にしてサルーンを出て窓のある娯楽室へ向かった。娯楽室の窓から外を見ると街がよく見えた。小さな街ではあったが倉庫の様な建物が多く見えた。倉庫の近くでは輸送用のトラックは多く走っている。車の

多くないイジツでは珍しい光景だった。

降下からしばらくして羽衣丸が地上と繋がれる。羽衣丸の船内が慌ただしくなり始める。船橋近くの出入り口近くまで行ってみると副船長が外へと降りていった。目で追っていくと副船長が地上にいる倉庫の責任者らしき人物と話しているのが見えた。責任者が合図をすると羽衣丸の周囲に荷物を積んだトラックが集まり始め、荷物を羽衣丸に乗せていく。乗せ始めている荷物が今回の重要な物資である医療品の様だ。しばらくして全ての積み込みが終わりトラックが羽衣丸の周囲を離れていった。トラックが離れて行った後に倉庫の責任者との話が終わった副船長の方も羽衣丸に戻ってきた。貨物の積み込みを終えた羽衣丸のエンジンがかかり出航の準備が進んでいく。ルタオで停泊していた時間はごく短時間だった。この短時間で積み込みを終えられたのはさすがだと感心する。

新たに医療品を積んだ羽衣丸の繋留索が外され再び空へと浮き上がった。ルタオの街がどんどん小さくなっていく。ここから先は今までの比較的安全な旅とは違う。空賊の存在が確認されていていつ襲われてもおかしくないエリアだった。襲ってくるかはわからないがどんな敵が来ても叩き墜として絶対に生き残る。改めてそう決意した。

ルタオを出発してから数時間が経った。日が落ち始めて夕陽が輝いていた。地域にもよるが雲が少ないことの多いイジツでは綺麗な夕陽がよく見えた。綺麗な夕陽を多

く見られるのはこちらの世界に来て得したと思っていることの1つだった。空賊が確認されているエリアには入っていたが今のところまだ空賊は見つかってはいなかった。片道3日のこの旅でもうすぐ2日目が終わろうとしていた。俺が今まで援護して助けた輸送機などは夕方から夜間に襲われていることもあったので、日が落ちようとしている今の段階でもまだ油断はできなかった。

サルーンで時間を潰していたのは変わっていなかったがもし空賊を探知して発進するように指示が出てもいつでも飛べる様に準備だけはしっかりした状態で過ごしていた。サルーンでは俺以外にコトブキ飛行隊が少し早いが夕食をとっていた。俺もメニューから軽食を注文して軽く腹に入れておくことにした。

「いつものパンケーキでございます」

ウェイトレスのリリコの声が聞こえる。当然ながらパンケーキを置いた席にはキリエがいた。コトブキと会ってから2日程度になるが食事のたびにパンケーキを見ている気がした。

「あなたは本当にパンケーキがお好きね」

エンマがキリエに言う。全くだと思っているとパンケーキを届けたリリコがその足で俺の方に来る。

「ハンブルグサンドでございます」

俺の前にハンブルグサンドが置かれる。
「ほら、あっちのおじさんだってまたハンブルグサンド注文してるし」
置かれたパンケーキを切りながらキリエがこちらを向いて言う。いつでも出られる様に軽食にしただけなんだがなと思っているとエンマが返した。
「あの人はまだ多くても数回ほどですわ。あなたは何回食べたかわからないほどでしょう？」
それに続けてケイトが言った。
「キリエが第弐羽衣丸で食べたパンケーキは３２枚、初代羽衣丸の時から比べると１日あたりの枚数は増加傾向にある」
ハンブルグサンドを食べながら聞いていたがどれほどのパンケーキが好きなのだろうか。
「キリエ最近食べすぎじゃない？このままだとパンケーキになっちゃうかもよ！」
いつも通りにチカがキリエをからかう。
「チカだってカレーばっかり食べてるじゃん！」
キリエが食ってかかる。それを年長のレオナとザラが微笑んで見ているというのがここ２日でよく見る状況だった。これを見るたびにかつてピクシーやＰＪと食事を取ったことが思い出される。

チカがキリエの腹を摘もうとして二人が戯れているのを眺めていると船内にサイレンの音が鳴り響き始めた。コトブキ飛行隊の顔つきが変わる。先ほどまで戯れあっていた少女の顔がパイロットの顔に変わり、格納庫へと駆け出していく。俺もそれに続いて格納庫へと向かう。ジョニーやリリコも慣れたもので手早くサルーンの片付けを行っていた。羽衣丸の警報はレーダー照射を受けた場合に作動する自動警報のためこの時点では空賊ではなくまだ他の飛行船からのレーダー照射の可能性もあった。だがその可能性はすぐに無くなった。副船長の声が響き渡る。

「戦闘機隊の発進許可する！あとええっと…総員戦闘配置！」

少し頼りなさそうな声ではあったが現状はよくわかった。空賊はこの船を狙っているということだ。

格納庫に着くと機体の始動準備が進み始めていた。コトブキの隼と反対の駐機スペースに置かれた愛機の紫電改に駆け寄る。隊長のレオナの機体を筆頭にコトブキの隼はエンジンがかかっていく。俺の紫電改は一人でも動かせる様にセルモーターを追加してあったため始動の手間がかなり省かれていた。始動スイッチを押してエンジンをかける。エンジンカウルの横の排気管から煙が出てエンジンが回り始める。カウルフラップを全開にして各部のチェックを始める。エレベーター、エルロン、ラダー、フラップ、スロットル、プロペラピッチ。各部のチェックはF―15に比べればレシプロ

は断然楽だった。最後にサイトのスイッチを入れる、オレンジ色のレティクルが浮かび上がる。

無線のメインスイッチを入れて羽衣丸とコトブキの使用しているチャンネルに合わせる。

<<レーダー照射包囲は１２５度、本船より５時の方向　不明機　高速で接近中　高度１０００クーリル>>

<<風向き２４０度　風速３．５クーリル>>

<<不明機の速度は１４５キロ>>

敵は羽衣丸の後ろを追う形で飛んできている様だ。

<<コトブキ飛行隊　滑走路へ移動を許可>>

レオナの機体を先頭にコトブキが滑走路へと進んでいく。

<<ガルム隊はコトブキ隊発進後に滑走路へ移動>>

コトブキの後を追う様に指示をされる。誰かに無線で指示をされると言うのは久しぶりだった。ウスティオのイーグルアイのことを思い出す。

<<総員注意　制動開始　コトブキ飛行隊発進！>>

コトブキ飛行隊が順に離陸していく。カウンタートルクを制御してふらつかずに発進していくのはさすがだった。コトブキが離陸して滑走路が空く。

<<ガルム隊　滑走路への移動を許可する>>
<<了解>>
　整備員にチョークを外す様に指示を出して滑走路へとタキシングする。尾輪式の航空機はタキシングが面倒だ、ジンギングして前を確認しながら進まなければいけない。滑走路に出てから旋回して停止する。最後にもう一度だけ操縦翼面のチェックを行ってからフラップを離陸位置に合わせる
<<ガルム隊　発進！>>
　スロットルを徐々に開きラダーペダルを踏んでカウンタートルクで横に流れない様に注意しながら加速する。ある程度加速したところでスティックを前に倒してケツをあげる。機体が水平になり間もなくして羽衣丸の船首から飛びでる。機体が少し沈み込みながら空に躍り出る。速度が乗ったところでフラップを格納し、未確認機が接近してきている羽衣丸の5時方向に旋回する。カウルフラップはまだ全開にしたままにして交戦前までなるべくエンジンを冷却しておく。こちらの方がスピードは出るためすぐにコトブキに追いついた。綺麗に感覚をとって編隊を組みながら飛んでいる。
<<では例のごとく二人一組でいくぞ>>
　レオナが指示を出すと編隊が形を変えていきレオナとザラ、チカとエンマ、ケイトとキリエという風に2機編隊に変わった。

<<サイファー　そちらはどうする？私とザラの編隊に入るか？>>
　レオナがこちらに問いかけてきた。
<<いや　俺は一人で好きにやらせてもらう　そっちも好きにやってくれ>>
　そう言って俺は高度をあげるために上昇を始める。後ろを見ると夕陽が地平線に沈みかけていた。こちらが太陽を背負っている形ではあるが太陽に隠れて敵に切り込むというのは難しそうだ。
<<おっさん　もしやられそうになったら私が助けてやるよ！>>
　チカが茶化してくる。
<<ははは　その時は頼む>>
　返答を返しながら上昇を続ける。
<<私とザラ　チカとエンマで敵を抑える　ケイトとキリエはすり抜けて羽衣丸に向かう敵を頼む>>
<<了解>>
<<では　コトブキ飛行隊！一機入魂！>>
　コトブキの方も作戦が固まった様だった。
　俺ほどは取ってないが高度を上げて高度の優位を取ろうととしていた。
　敵機の高度はおよそ１００００ｆｔと聞いていたのでこちらは１２０００ｆｔまで

上昇して待機することにした。１２０００ｆｔに到達した段階で水平飛行に戻り、速度を取り戻す。交戦状態に入るだろうと思いカウルフラップも閉じて空気抵抗を減らす。２〜３分した頃に前方で何かが光ったのを見つけた。編隊を組まずにバラバラに飛んでいる鍾馗だった。コトブキに伝えようと思ったのとほぼ同時にザラが報告を始めた。

<<敵機発見よ　７機　機体はおそらく鍾馗ね>>

ベテランのパイロットだけあっていい眼をしていた。

<<こちらでも確認した　ヤマアラシ団のようだな　ザラ　他には見えるか？>>

レオナがザラに報告を求める。

<<馬力の割にすばしっこくて苦手ですわ>>

エンマが愚痴をこぼした。

<<抜けてきたのはこっちで引き受けるからそっちは任せたよエンマ！>>

キリエがエンマに声をかける。

<<私とザラで牽制する　チカとエンマは崩れたところで格闘戦に持ち込め>>

コトブキの話を聴きながら１２０００ｆｔで旋回しているうちに鍾馗が接近してきた。まだコトブキにもこちらにも気づいていない。先に動いたのはコトブキの方だったレオナとザラの２機が緩降下しながら先頭の鍾馗に機銃を撃つ。先頭の鍾馗に機銃が当たり煙を噴いて地上に墜ちていった。残りの６機がバラバラに散開する。

俺も上空から１８０度ロールして降下を開始。スロットルを押し込み加速しながら崩れ始めた敵の編隊に飛び込んでいく。一機の鍾馗が散開した際にこちらに後上方を晒していた。後上方から見ると塗装と翼の動物らしきマークがよく見える。こいつは墜とせると判断してその鍾馗に機首を向くように調整する。降下で加速の乗った機体は敵に一気に近づいていく。２２０ｙｄで少々のリードアングルをつけてスロットルのトリガーを引いた。２０ｍｍ弾が敵機を襲い、翼が折れて墜ちていく。これで残りは５機だ。

降下で失った高度を取り戻すべく再び高度を上げていく。上昇中に警戒のために周囲を見ると先ほどレオナが指示したとおり、崩れて好き勝手に旋回を始めた敵機にチカとエンマが襲いかかる。エンマの隼が少し離れた位置で旋回していた鍾馗の後ろにピタリとついた。エンマ機の背後には援護出来るようにチカが付いている。２機に追われて焦った鍾馗は旋回を始めるが隼に旋回戦を挑めば結果は明らかだ。旋回半径を小さくしようと急旋回したせいで鍾馗の速度が下がっていく。隼が速度を落とさず旋回しながら鍾馗に追いついていく。十分近づいたところでエンマが発砲。弾が主翼の燃料タンクにあたり煙を噴いて墜ちていった。

<<やるじゃんエンマ！>>

チカがエンマに称賛の言葉を送る。

それを横目に見つつこちらは上昇を完了して次に攻撃する敵を選ぼうとしていたが何か違和感を感じた。

<<ねえレオナ　何か違和感を感じない？>>

ザラも同じような違和感を感じていたようだ。

<<ああ　羽衣丸が狙いなら速度を活かして我々を振り切って抜けてもいいはずだ>>

レオナも同意見だった。何か裏がある。そう思った。

<<そっちもそう思うか　何か引っかかるな…>>

考えてるうちにエンマの援護位置についていたチカの後ろに鍾馗が一機着く。この敵は速度を乗せてチカ機に接近してきた。エンマが先に気づいてチカに警告をする。

<<チカ！後ろですわ！>>

<<私とやろうっての！>>

チカが後ろの敵機を確認した途端に操縦桿を引き急激なピッチアップをする。かなりのGがかかる旋回だがチカの体はそれに耐える。急旋回についていけなかった敵機はチカ機の追撃を諦めて一度態勢を立て直そうとした。俺がそこに降下して攻撃をしかける。この敵も無理な追撃はしなかったのは上手かったが上への警戒は怠っていた。降下中にレオナが少しだけ後方にいるキリエとケイトに連絡する。

<<キリエ　ケイト　そちらで何か妙な動きはないか？>>
<<何も見当たらないよ！敵も抜けてきてないし>>
<<こちらでも確認できない>>
無線を聞きながら敵に近づいていく。十分に近づいたところで機銃を放って食らわせる。コクピットが赤く染まって錐揉みしながら敵が墜ちていく。
<<オッサン　割といい腕してるね！>>
チカが俺にも褒め言葉を投げる。
残った３機はまだ撤退する素ぶりも見せずに交戦を続けようとしている。やはりなにかが変だ。普通の空賊の戦い方じゃない。まるで何かのために囮をやってるかのようだ…
ふとその時にミーティングでケイトが言っていた二つの空賊が手を組んで襲ってくるという可能性を思い出した。その時だった。
<<レオナ！見つけた！低いとこから来てる！>>
キリエの声が無線で届きレオナが応答する。
<<別働隊か！>>
<<そうだと思う！４０クーリルくらいに地面と同じような色に塗った零戦２機と九六式が４機いる！>>

<<多分　フクロネズミ団ね>>

低空を侵攻することで羽衣丸のレーダーを逃れたようだった。俺もアヴァロンダムでやったことがあった対レーダー戦の基本の一つだ。

予想とは違う形で連携を取ってきた。もし敵が協力するなら全機が一斉にくると考えていたが、こんな手を使ってくるとは少し予想外だった。

<<キリエとケイトはその6機を追ってくれ！こちらも片付け次第向かう！>>

<<わかった！>>

少し遠くでキリエとケイトが反転して降下していったのが見えた。

あの二人でもやれると思ったが保険があった方がいいかもしれない。

<<隊長さん　俺もあっちへ回る　この中では俺が一番足が速い！>>

<<了解した　任せる>>

そう言ったレオナがザラと共に残った3機の鍾馗を墜としにかかった。ザラ機の後ろに鍾馗が張り付く。レオナ機が右に旋回して射線から外れる。鍾馗はザラ機との距離を詰めていくがザラがバレルロールをして後ろを取り返す。

<<しつこい男は嫌われるわよ>>

後ろを取り返された鍾馗は右旋回して逃げようとしたが、ザラと別れて旋回していたレオナがその後ろに着いて発砲タンクに引火しながら墜落していった。

<<このクソ虫ども　さっきからしつこいですわ！>>

エンマが空賊を罵りながらチカと共に残りの2機を追い詰めていく。

その光景を後ろに見ながら俺は羽衣丸に向かって全速で飛んで行った。高度を速度に変換しながら敵に追いつこうとする。キリエとケイトがもう少しで敵の6機に追いつこうとしたところで4機の九六式が上昇反転、キリエとケイトに発砲した。当たるような距離ではないが接近してきて格闘戦を挑んでこようとしている。2機の零戦は羽衣丸の方向に進路を向け続けている。

キリエと九六式が格闘戦に突入したのを横目に見ながら九六式の相手を任せて零戦を追うことにした。

何度かのシザーズを行なった後にキリエがスナップロールで切り返して相手の旋回に合わせる。相手も射線に入るまいと左右への旋回をするがタイミングを見計らってキリエが撃った弾が当たり煙を上げて下降していった。

九六式を追っていたケイト機の背後に別の九六式が着いたがケイトが逆G旋回を行うと慌ててロールして追撃しようとするが初動が遅れたせいで旋回についていけない。逆G旋回を終えたケイトがロールして姿勢を戻した時には九六式は旋回から置いていかれていた。その直後に上から被ってきたキリエが放った機銃が命中し炎上して墜ちた。

二人が格闘戦をする中俺は前をいく零戦に追いつくべく飛んでいた。距離は３００ｙｄほどでまだ当てられる距離ではなかったが牽制のために少し多めに２機に向かって機銃を撃つ。

２機が左右に別れてブレイクする。どうやら追ってくるのが俺一機と見て２機でかかってくるようだった。左右に感覚を広げながら２機がこちらに接近してくる。こいつらはおそらく他の奴らとは違いプロだと思った。斜め左右から攻撃してくるのをバレルロールで回避してしてそのまま交差する。砂漠風の迷彩が施された機体の主翼には変わった帯状の標識が描かれていた。見たことのないデザインだ。そして無線が聞こえてきた。コトブキのものではなかった。

<<俺たちを追ってきたのがこんな無名の雇われ用心棒だとはな　拍子抜けだ>>

<<さっさと墜として飛行船を狙うぞ　コトブキの相手はその後だ>>

こちらではあまり名前が知られていないとはいえ随分といってくれると思った。

スロットルを全開にして上昇する。そのままループに入る。キャノピー越しにこちらを攻撃し終わった２機が編隊を組み直してこちらへの攻撃を準備している。敵をよく観察しなおす。機体は零戦五二型、うち１機は翼から出ている機銃の形が違った。おそらく飛行船攻撃用に大口径の３０ｍｍを積んだ現地改造型だった。観察を終えてまずは３０ｍｍを搭載した方から潰すことに決めた。ループを終えて再度敵と正対する。

また2機が左右の感覚を開けて攻撃の準備をする。狙う機体はこちらから見て左の機体だ。こちらに接近してきた2機が機銃を発射する。今度はバレルロールはせずにラダーを吹き込んで機体を横滑りさせることで回避する。回避後すぐに敵と交差する。空戦フラップを作動させて鋭く左に旋回する。旋回が完了するとちょうど敵機が態勢を立て直して2機編隊を組み始めたところだった。少し遠かったがそこに向けて機銃をばら撒いて牽制する。そのまま加速して、敵との距離を詰める。敵は回避を優先して編隊を組むのを諦めた。僅かながらの隙ができる。狙っていた敵は右に急旋回しつつ上昇をしていた。それを追いかけて俺が後ろに着くと射線に入るのを嫌がって機体を激しく左右に旋回する。だが今のこの速度域は零戦が苦手とする速度域だ。いくらもがこうがこちらの機体でついていけるだけの旋回でしか無かった。そのまま敵を追い詰めて接近していく。この距離なら当てられる。もう1機は牽制射撃した際に１８０度ロールして真下に逃げたためまだこちらを攻撃できる位置にはつけていなかった。照準器を覗き込み狙いを定める。この距離ならリードはほぼいらなかった。左手でトリガーを引き機銃が発射される。飛んで行った２０ｍｍが敵の機体を穴だらけに変える。火が噴き出して再び声が聞こえた。

＜＜くそ！どうしてこんな奴ｇ……＞＞

全てを言い終わる前に爆発を起こして空に破片が散った。これで羽衣丸への最大の

脅威はなくなった。

<<よくもやりやがったな！>>

残った零戦が上昇しながらこちらを狙ってくる。だが高度差がありすぎて下降で稼いだエネルギーでは足りず、こちらには追いつけなかった。こちらが降下して仕掛けようと思っているとあることに気がついた。だが零戦のパイロットはそれに気づいていなかった。敵は俺一人ではなくなっていたのだ。すでに鍾馗や九六式は全滅し自分一人になっている事に俺しか見えていない彼には気づけなかった。レオナの隼が加速しながら彼の背後から攻撃を仕掛ける。機体から黒煙が出て荒野へと墜ちていく。

<<くそ…これで終わりだと思うなよ…きっと同志たちが>>

最後にそう言い残して彼の零戦は地に墜ちた。

<<全員無事か>>

レオナが安否確認をする。全員が無事だと返事をする。

<<サイファー　そちらも無事のようだな>>

<<マダムの言ってた通りの腕みたいね>>

<<こちらこそ噂のコトブキの腕前を見せてもらったよ　さすがと言ったとこだな>>

コトブキ飛行隊、まさしく噂通りの腕だった。個人のスキルも連携も一級品だ。

<<あー　空戦したらお腹減っちゃった　早く羽衣丸に戻ろ>>
<<またパンケーキを食べる気ですの？>>
<<いいじゃん　いくら食べても>>
<<やっぱりキリエそのうちパンケーキになっちゃうんじゃないの！>>
<<うっさいバカチ！>>
<<みんな静かにしろ　まだ帰還した訳じゃないんだからな>>
<<聞いてたら私もビール飲みたくなってきちゃったわ>>
<<ザラ…>>
<<空腹時に入れるアルコールは危険>>
　みんな口々に好き勝手喋っている。つい先ほどまでのピリついた空気からガラリと変わっていた。
<<…俺まで腹減ってきたな>>
<<おっさんもまたハンブルグサンド食べる？>>
<<…それもいいかもな！>>
<<よしみんな帰るぞ　もうじき太陽が沈みきる>>
<<早く帰ってパンケーキ♪>>
　日が沈んだ空を７機が飛んでいく。酒場で一緒にいた時よりもコトブキと距離が近

くなってる気がした。

第三章　Ｔａｉｌ　Ｍａｎ

空戦から1日が経った。あの空戦以降襲撃はなく、無事に羽衣丸は今ポロッカへ着陸しようとしている。昨日のコトブキの戦いっぷりは見事だった。今まで聞いてきた噂通りの腕前だ。戦いの状況を見極める目、操縦の腕、そしてパイロットとしてのプライドをあの空で見ることができた。サルーンで女子会をしているあの時とは違うプロの姿だった。パイロットは地上で会話するより空で出会った時の方が相手をよく知ることができるのではないかとそう思った。

娯楽室でそんなことを考えているうちに窓から見えるポロッカの街並みがどんどん近くなってくる。以前に写真で見たことのあるポロッカの街並みとは違っていた。かつてはこの世界でも屈指の大都市だったその姿は見る影もなく今では建築が進む建物とイケスカ動乱で焼けた家の残骸が混じる都市になっていた。唯一昔の面影を残しているのは都市中央に見える巨大な腕のオブジェだけだった。

地面に近づいたところで羽衣丸が繋留されるた。これから羽衣丸の積んでいた貨物の搬出作業が開始される。俺やコトブキのメンバー、そして搬出作業に関わらないクルーには事前に自由行動が許可されていた。この復興中の街にあるかどうかは分から

ないが、『穴』に関する資料を探しに出ることにした。娯楽室を出て自室に戻ろうと廊下を歩いているとレオナと鉢合わせた。いつもは纏めている髪が肩にかかり少し濡れている。シャワー室から来たようだった。その姿に目を奪われ鼓動が早くなった気がした。

「おはよう、サイファーは今日どこか行くのか？」

そんなこちらの気も知らずレオナが聞いてくる。

「あ、ああ…少し街を見てくるよ、そっちは？」

「私も少し出かけるよ。ザラとホームの子たちに何か土産を買ってくる」

「ホーム？」

聞いてみるとラハマにある孤児院のことらしい。レオナはそこの出身でそのホームのために飛んでいる。そして定期的に子供達にプレゼントを買って行ってるのだという。

「孤児院か…懐かしいな」

「サイファーも孤児院で？」

「まあ色々あってな…　すまないそろそろ行くよ」

あまり深く話したくない事だったので話を打ち切って行こうとする。それにこれ以上今のレオナを見ていられなかった。

「ああ、すまない…だが部屋に戻るなら同じ方向だろう?」

その通りだった。完全に冷静さを失っていた。結局部屋の近くまで一緒に歩いて行って別れた。自室に入り一度ベッドに腰掛ける。柄にもなくドキドキしてしまった。前を歩く彼女の石鹸の香りが鼻に残っている。今まで多少なりとも女性に対して綺麗だとか思ったことはあるがこんな気分になったのは初めてだった。戦闘機に乗っている時とは違う彼女の姿を見たからだろうか。こういう時に彼女がいたＰＪに話を聞くことができれば参考にできたかもしれない。あの時ＰＪの恋愛話を流しながら聞いていた自分を少し恨めしく思った。

とりあえず街へ行って穴に関する資料を集めよう。俺は帰らなくちゃいけない。いつか去るこの世界に大切なものを作るのは得策じゃない。そう言い聞かせて気を落ち着かせて街に出るための準備を始めた。とは言っても財布と拳銃を持って腰にポーチを着けるぐらいのものだが。最低限の荷物をポケットに入れて自室を出る。出入り口のある船橋まで下りると副船長がいた。集合時間に遅れないようにとだけ念押しされてからタラップを降りた。

飛行場から出てポロッカの市街に入った。流石に戦乱から時間が経ってるだけあって前情報で聞いていたほど今でも荒れ果てている訳ではなかった。それでも飛行場から伸びる大通りでは観光客の姿などはあまりなく通りを歩く人の多くが建設作業に当

たっている作業員のようだった。通りを見ていると建築用の足場が立てられているものや建設予定の札がたっている更地、そして未だに焼けた家の残骸が残っている区画など様々だった。これだけの状態になってしまったのなら穴の資料があるかどうかはあまり望めないかもしれない。そう思いながら通りを歩いて書店を探すがやはりなかなか見つからない。しばらく通りを進むとやっと一軒見つけた。中に入って探してみるがラハマの書店で見たようなイケスカ動乱に絡めて穴について書いた雑誌のようなものばかりで、資料と呼べるようなものはなかった。立ち読みだけして帰るのも悪いと思ったのでラハマまでの帰りに時間を潰せるように3冊ほど本を買った。昔ヴァレー空軍基地で相棒がよく読んでいたような旅行記だ。店主に代金を払った時にほかに書店があるかと聞いてみると、今はやってるかどうかわからないが西の飲食店街の方にあると教えられた。ポーチに買った本を入れ、礼を行って外に出る。まだ時間の余裕はあるので店主の言っていた西の本屋に行ってみることにした。

　少し西の方に歩くと通りに飲食店が多く見えるようになってきた。窓の中を見ると復興に携わっている大工や職人が食事をしている。この辺りは先ほどの書店があったエリアより復興が進んでいるようだった。先ほどよりも並んでいる建物が多いせいかこの辺にあると思われる書店が見当たらなかった。やはり戦災の影響で店を畳んでしまったのだろうか。そんなことを考えていると一人の青年が声をかけてきた。

「あの、何かお探しですか？」
「この辺に書店があると聞いて探しているんだが知ってるか？」
「ええ、知ってますよ。この辺は地元ですからね。案内するのでついてきてください。」
そう言って青年が前を歩き出した。ほかに当てもないので好意に甘えついていくことにした。青年について行くと大通りから中道の方に入って行った。どれぐらいで着くかと聞くともうすぐだと言った。そのうち青年は裏路地の方に入って行った。もうこの辺りには店の入り口のようなものは見えず飲食店のゴミ箱が置かれ、周囲は建物に囲まれていた。表通りからは完全に隠れている。嫌な予感がしてくると青年が足を止めた。そして周囲の建物の陰から5人ほどの男がこちらの退路を塞ぐように現れた。何人かは角材や鉄パイプを持っている。嫌な予感が当たったようだ。道案内をしていた青年がニヤつきながらこちらを振り向いた。
「すみませんね、おじさん。どうやら書店は無くなってしまってたようです」
わざとらしく青年が言う。彼がナイフを抜きながら言った。
「道案内はしましたので…おっさんの有り金全部いただこうか」
当然ながらこんな奴らに金を渡す気も殴られる気もなかった。
「…怪我しないうちに帰った方が身のためだぞ？」
「おっさん分かってねえのか？こっちは6人、そっちは1人だ。怪我をするのはおっさ

んの方だぜ」

面倒になってきた。こいつらに付き合わされて限りある時間を浪費するのはごめんだ。

「ごちゃごちゃ言わずに金が欲しけりゃ奪ってみろボウズ」

「なめやがって！フクロにしちまえ！」

青年の掛け声で男達がこちらに向かってくる。一番最初に鉄パイプを持った男が鉄パイプを振り上げてこちらに殴りかかってきた。振り下ろされた鉄パイプを左手で受け止めて掴んだ状態で腹に蹴りをお見舞いする。蹴りが入って腹を押さえるように姿勢を崩したところで顔に1発パンチを食らわせる。まともに頭に食らった男はそのまま気絶した。その男が持っていた鉄パイプを拝借する。次の男がおそいかかってきた。彼の数発のパンチを躱した後に鉄パイプで横から腕を殴り、怯んだところをそのまま回し蹴りで飛ばして壁に叩きつける。3人目の男は一番大柄だった。こちらに猛烈な勢いでタックルしてきた。タックルしてくる相手の顔面めがけて右ストレートを叩き込む。勢いがつきすぎてた大柄の男は避けることもできずに食らって昏倒した。次は2人が同時にかかってきた。片方が角材を持っている。最初に右脚の蹴りで武器を持ってない男を蹴り飛ばした。角材を持った男がこちらの頭めがけて振り下ろしてくる。その腕を片手で逸らしつつ男の顎に掌底を入れる。男が膝をついて崩れ落ちると先ほ

ど蹴り飛ばした男が立ち上がり殴りかかってくる。
何発か拳を躱して相手の懐に入り腹に数発のパンチを入れる。そのまま胸ぐらを掴んで金属製のゴミ箱に投げつけた。頭を打ち付けた男が気絶する。これで残りは道案内をしていた青年だけになった。
「怪我をするのは俺の方だと言ってたか。どうする?あとはお前1人だぞ?」
青年が震える手でナイフを握りしめてこちらに向けている。震えた声で彼が言った。
「舐めやがって…死ねよオラァ!」
がむしゃらにナイフを振りながらこちらにかかってくる。なんとかそのナイフを躱していたが切っ先がわずかに左頬をかすめた。かすめた場所から血が垂れてくる。後退して一度距離を取る。
「へへへ…どうだおっさん、次はもっと深く刺してやる」
青年がナイフ持って再び突進してくる。ナイフを持つ腕を左手で掴み取り、ナイフをはたき落とす。そのまま腕を引き姿勢を崩して相手の足にこちらの足をかけて押し倒して背中から地面に叩きつける。軽く服に付いた埃をはらいながら倒した奴らを見る。全員地面に延びているが息はあった。彼らを残したまま裏路地を出て表通りに戻った。ひさびさに徒手格闘したせいか少し疲れた。近くの壁に寄りかかって一息ついた。そうしているとこちらを呼びかける声が聞こえた。レオナだった。朝会った時とは違う

髪をまとめたいつもの姿だ。
「疲れてるみたいだが何かあったのか？」
「少し歩き疲れただけだよ」
「顔から血を垂らしながら歩き疲れたはないだろう」
　そう言いながらレオナがポケットから薄緑のハンカチを取り出して俺の左頬を拭う。痛みで少し声が出た。
「我慢しろ。すぐに終わる」
　頬を拭うレオナの顔がすぐ目の前に見える。朝と同じように鼓動が早くなる。拭いながらレオナがこうなった理由を聞いてきたので顛末を話した。聞き終えたレオナが言った。
「お前は今オウニ商会の関係者なんだ。軽挙妄動は慎むように」
「…すまん」
　レオナが拭っていた手を退けると再び血が傷口から少し垂れた。
「まだ止まらないか」
「大丈夫だ。これぐらいなら…」
「まだ垂れてるだろう。少し自分で押さえててくれ」
　そう言ってレオナが俺にハンカチを渡して自分のポーチから何かを探しはじめた。

受け取ったレオナのハンカチは俺の血で赤く染まっていた。
「すまない…ハンカチを汚してしまって」
「気にするな。…これを使え」
レオナがポーチから大きめの絆創膏をくれた。手で押さえてたハンカチを外して傷口にそれを貼った。少し痛みが和らいだ。落ち着いたところでふと思いレオナに質問した。
「そういえばザラは?」
「ん?ザラならあそこにいるぞ」
レオナが指差した通りを挟んだ向かいの店の中に彼女の姿が見えた。こちらに向かって木のジョッキを持ちながら手を振っている。
「あそこでお前が血を流してるのを見かけたから私が様子を見に来たんだ」
「そうだったのか…心配かけてすまない」
「気にしないでいい。それじゃあ私はそろそろ戻る」
そう言ってレオナはザラの元に戻っていった。貼った絆創膏を触ると顔がすごく熱くなっていた。先ほどのレオナとのやりとりも全てザラに見られていたのだろうか。彼女は他のコトブキと違ってそういうことには鋭いはずだ。そう考えると恥ずかしさで余計に顔が熱くなる気がした。

血の付いたレオナのハンカチをポケットにしまって再び本屋を探す。先ほどまでいた大通りから外れたところに他の建物より古そうな書店を見つけた。外観を見る限りこの店は爆撃の被害を受けずに昔のままでいるらしい。中に入ると雑に本が並んでいた。見てみると本に埃が多く付いていた。カウンターには老女が座っている。並んでいる本を見てみるとどれも古そうなものばかりだった。

棚を眺めていると不思議な本を見つけた。この世界の言葉ではない別の言葉で書かれている本だった。表紙の埃を払いタイトルを見るが読むことができない。だが文字自体は見た経験があった。ノースポイントで使用されている言語と同じような字だった。Ｆ―２やＦ―１５Ｊのコーションマークがこれと似たような字で書かれているのを以前に見たことがある。この世界で伝わっている穴から来た存在『ユーハング』はノースポイントを指す言葉なのだろうか？そんなことを考えながらページをめくっていく。中に写真が載っているページがあった。零戦の翼と胴体に赤い丸のラウンデルが描かれている。俺のいた世界では見たことのないラウンデルだった。ノースポイントとは関係がないようだがこの赤丸ラウンデルがユーハングを表しているようだ。ページを捲ると同じマークをつけた実験機のような飛行機の写真もあった。どうやらこの世界で穴が開いた当時のことを書いているらしい。この本は当たりかもしれない。そう思いながら本を閉じた。続きは羽衣丸に戻ってからゆっくり見ることにした。ほ

かに本棚を見て回ったが穴についての本やこれと同じ言語の本は見つけることができなかった。カウンターに行き老女に代金を支払おうとすると彼女が問いかけてきた。
「あんた…その本を買うのかい？」
「そうだが…非売品とかか？」
「いいや……うちは見ての通りの古い本屋でね…基本的に昔から来てる年寄り連中しか来ないのさ」
　老女が語り始める。
「だからあんたみたいな若い客は珍しくてね。しかもユーハング語で書かれたこの本を買おうとしてる。そんな客は多くないから嫌でも覚えちまうのさ」
「覚えちまうってことは過去にも何人かいるのか？もしよければそいつらのことを教えてくれないか？」
　もしかしたら穴について何か調べている誰かに繋がるかもしれないと思って聞いてみる。
「あんたを除けば２人だね…１人は銀髪の男、５年くらい前かね？なかなかいい男でねぇラハマからやってきたと言っとったよ」
「ラハマから？」
　意外なところで接点が出てきた。もしかしたら今もラハマにいるのかもしれない。

帰ってやるべきことがまた一つ増えた。

「もう1人の男は黒髪の掴み所のない男じゃったな。１０年くらい前にやってきてユーハング語の本を買いあさって行きおったよ。去り際にわざわざ手品まで見せていっての。ありゃ忘れんわ」

「そうか…聞かせてくれてありがとう、婆さん」

「なに、たまに若い男を見んとこっちもくたばっちまいそうだからのう。本のおまけじゃ」

会話を終えて買った本をポーチに詰め込んで書店を後にした。もし店主の言っていた銀髪の男がまだラハマにいるのならコトブキの誰かが知っているかもしれない。戻ったらハンカチを返すついでにレオナに聞いてみよう。

書店から出た後に飲食街に戻り食事をすませるといい時間になっていた。そろそろ羽衣丸に戻る時間だ。歩いてきた道のりを戻って羽衣丸に向かう。今回は絡まれることもなく無事に帰りつくことができた。副船長に戻ってきた報告をして自室に戻る。腰のポーチを外して上着を脱いでベッドに腰掛ける。途端に眠気を感じた。流石に久しぶりの格闘で疲れが溜まったようだ。一度眠りにつくことにした。ベッドの上で瞼を閉じると不意にレオナの姿が瞼の裏に浮かんできた。なぜこうも気になり始めたのだろう。そう思いながら眠りに落ちた。

数時間ほどして目が覚めた。時計をみると17時を回っていた。頬の傷に少しだけ痛みを感じたが疲れはとれていたエンジン音が聞こえるので羽衣丸はポロッカを出発しているようだ。自室を出てサルーンに向かうことにした。サルーンに入るとコトブキがいつもの席で団欒しながら夕食をとっていた。もうだいぶ見慣れた光景だ。腹は特に減っていなかったので席についてグレープジュースを注文した。リリコは慣れた手つきでタンブラーに注いでこちらに持ってくる。態度はいつも通り素っ気ない。ジュースに口をつけるとジョニーがぼやいた。

「帰りは空賊に会わずに済むと思ったのに砂嵐が近くにあるなんて」

「砂嵐？」

聞いてみると、どうやら羽衣丸の航路の近くで砂嵐が起き始めたらしい。回避するルートをとるものの巻き込まれる可能性もあるそうだ。砂嵐は前の世界でも経験したことはなかったなと思い返しながら話を聞いた。そんな話をしているとサイレンが鳴り始めた。再びジョニーがぼやく。

「あれ？空賊は来ないはずじゃ…」

「バカ甘いですね」

サルーンにいるコトブキが動き出した。それに続いて俺も格納庫へ走り出す。

格納庫では発進準備が着実に進んでいた。俺の紫電改はすでにエンジンがかかって

いた。翼の上を駆け上がりコクピットに飛び込み、無線のスイッチを入れる。
<<敵は６機　本船の４時方向　方位３６０より接近中>>
<<高度８００クーリル　不明機の速度は１２５キロクーリル>>
<<砂嵐は現在本船の８時方向より接近中　速度２５キロクーリル>>
<<コトブキ　ガルムの順で発進>>
　前回と同じ出撃順だ。船橋からの報告を聞いているとコトブキの声が聞こえてきた。
<<事前情報じゃ空賊のことは言われてなかったわよね？>>
<<ほんと忌々しい>>
<<砂嵐が迫ってきてる　全員位置の確認を怠るな>>
<<砂嵐の中って大丈夫なの？>>
　キリエの質問が聞こえてきた。ナツオ班長がそれに答える。
<<ごく短時間なら大丈夫だが長く入るとエンジンが壊れちまうぞ！壊したら承知しねえからな！>>
　ナツオ班長に続けてチカが言った。
<<じゃあパパッと片付けて戻って来ればいいんだね！>>
<<チカ　油断は禁物ですわ>>
<<不測の事態が発生する可能性がある>>

<<いつも通りに飛べば大丈夫よ>>

砂嵐を前にしてもコトブキの闘志は変わらない。いつも通りに飛ぶ。それをただ実行しようとしていた。滑走路にコトブキの隼が並んだ。

<<総員注意　制動開始>>

<<コトブキ飛行隊　発進！>>

レオナを先頭に船首から隼が飛び出していく。

<<ガルム隊　滑走路への進入を許可>>

指示に返事をして機体を滑走路へと進める。やはり2番機がいないというのは寂しく感じた。

<<ガルム隊　発進！>>

スロットルを押し込んで行きカウンタートルクに振られないようにラダーを使いながら滑走していく。あっという間に船首まで来て機体が空に飛び出る。脚とフラップを格納して展開してたカウルフラップを2割程度のところまで閉めていく。そのまま右にターンして羽衣丸の4時方向に機首を向ける。事前情報では敵は6機と聞いている。数はこちらとほぼ同数だった。高度を上げていってコトブキの位置と同じぐらいの高度で敵を探す。太陽は沈みかけているがこちらの背にあるのでこちらは見つかりづらいはずだ。敵を探していると下に滑走路のようなものが見えた。どうやら空の駅

のようだが飛行機が止まってる気配はない。
<<下のあれは…空の駅か？>>
　無線で聞いてみるとザラが答えた。
<<そうよ　今はもう使われなくなった空の駅のローソね>>
　その言葉を聞いて改めて見てみると建物の屋根には穴が空き、駐機場には箱が転がっていた。だが滑走路はそこそこ綺麗な状態だ。少し気を抜いてしまったが改めて敵機を探すと1時下方でキャノピーの反射らしきものが見えた。
<<こちらサイファー　1時下方に敵機発見>>
<<了解　こちらでも見つけた>>
　レオナから応答があった。続けてレオナが指示を出した。
<<キリエとエンマが突入して撹乱　敵機が編隊を崩したところで残りのメンバーで各個撃破する>>
<<了解！>>
　コトブキが１８０度バンクして降下していく
　こちらはもう少しこの高度にとどまることにした。
　コトブキが降下し始めたところで敵もコトブキに気づいた。慣れているようで６機の密集編隊を２機ずつの編隊に組み直して散開する。敵機はどうやら隼の二型のよう

だ。機体にはマークなどは見えなかった。機体性能だけならコトブキに勝っていた。キリエとエンマがリーダー機の編隊に機銃を撃ち込む。敵も編隊を崩さずに旋回して回避する。だが旋回を終えたところにケイトとチカが降下して機銃を放った。2機が揃って右にブレイクして攻撃を躱す。

<<当たんなかった！>>

そう言って体勢を立て直そうと上昇しているチカの背後に別の2機編隊が食らいついて機銃を放つ

<<チカ！後ろ！>>

<<うわっ！>>

チカが左にブレイクする。それを追いきれない2機編隊にキリエが食らいついて機銃を食らわせる。命中したのが見えたが飛行に支障はないようだ。

<<チカ！油断するな！>>

レオナがチカに檄を飛ばした。残っていた編隊がキリエとエンマの後ろを取ろうと旋回をし始める。レオナとザラがその背後に着こうとすると敵はキリエ達を追うのを諦めて上昇を始めた。

<<ねえレオナ>>

<<ああ　統率が取れている　普通の空賊とは思えないな>>

レオナが言うとおりこいつらは編隊空戦の心得があるようだ。ろくに編隊も組めない普通の空賊とは違う。

コトブキと戦う敵の機動を観察してそろそろこちらも動くことを決めた。上空からダイブして上昇し始めた敵機に突撃する。２２０ｙｄ程まで近づきレティクルに捉えた敵機に機銃を放つが敵がロールしてこちらの下側にブレイクしたことで外れてしまった。なかなか楽しませてくれる敵機だ。再度上昇して次の攻撃に備える。隼相手にドッグファイトするのは危険だ。別の敵機に狙いを変える。チカとケイトの後ろを取ろうとした敵機がいたのでそちらに向かってダイブする。２機編隊のうち片方はこちらに気づいたがもう片方は気づくのが遅れた。躱されないように１７０ｙｄまで近づいてトリガーを引いた。弾が敵機に吸い込まれ胴体がへし折れて墜ちていく。

＜＜サイファー　後ろだ！＞＞

上昇しようとした途端にレオナの声が聞こえ、後ろに隼が張り付いてきた。先ほどこちらの攻撃を躱した２機編隊だ。スナップロールで１８０度ロールしてダイブして振り切ろうとする。降下速度ではこちらが有利だ。降下に入った時に後ろから何発か飛んできたが距離があるので当たらない。少し降下して引き離すと敵機はこちらを諦めて離脱していった。降下をやめて距離を取り緩く旋回しながら上昇を開始する。上昇を終えて再び観察してみると敵の攻撃に積極性が見られなくなっていた。すでに逃げ

の態勢に入ろうとしている。
<<みんな　深追いするな！敵は離脱する気だ！>>
レオナの指示でコトブキが攻撃をやめる。残った敵機が再び編隊を組んで撤退していく。それに合わせてコトブキも編隊を組み直す。
<<妙な空賊でしたわね>>
<<所属を表す記章がない　以前ナンコーを襲撃した自由博愛連合の疾風に類似している>>
<<残党かもしれないな>>
彼女達が以前戦った連中との類似点があるようだった。
<<もういいじゃん！追い払ったんだし！>>
<<早く戻ってパンケーキ食べよー>>
キリエの気の抜けた声が聞こえる。コトブキが進路を羽衣丸に向けて戻っていく。妙な胸騒ぎを感じながら俺もそれに続いた。
少し飛んだところで羽衣丸を目視した。その後方より砂嵐が接近していた。そこまで着艦に時間はかけられないがコトブキはスムーズに着艦していった。残ったのはレオナ、ザラ、俺の3機になった。ザラが着艦のコースに乗る。ザラが羽衣丸の滑走路に着こうとした時に曳光弾が羽衣丸に命中した。

ザラの短い悲鳴とともに後部のハッチが破損して落ちかけるのが見えた。
<<ザラ！>>
レオナが大きな声でザラに呼びかける。その間に攻撃してきたやつを探す。砂嵐の中から機銃弾は飛んできたようだった。
<<…大丈夫よレオナ　尾翼に弾が当たったけど私は無事よ>>
レオナが安堵のため息をつく。とはいえ羽衣丸の後部ハッチが破損して俺たちは着艦はできなくなった。おまけに見えない敵から攻撃を受けているまずい状況だった。ハッチが閉まらない以上砂嵐の中に不時着することだけは避けなければいけない。
<<私たちもう一回出る！>>
キリエが言うがレオナが止める
<<ダメだ！敵の位置が分からない以上発艦時を狙われる可能性がある！>>
<<でも二人だけじゃ！>>
<<任せろ！なんとかする>>
キリエにそう言い放った。とはいえ敵の機数がわからない現状では対策の打ちようもなかった。まずは見つけ出さなくては。羽衣丸が砂嵐から逃げるように速度を上げていく。その時再び砂嵐の中から曳光弾が飛んできたのが見えた。その辺りを目を凝らして見る。……見つけた。三式戦４機が砂嵐に紛れながら飛んでいた。敵も砂嵐の

視界の悪さで空中衝突しないように密集編隊で攻撃しているようだ。これ以上羽衣丸のエンジンを潰されれば砂嵐から逃れられなくなる。

<<レオナ　敵機を見つけた！11時方向>>

<<了解　サイファー　後ろについてくれ　私とお前で羽衣丸を離脱させるぞ！>>

<<了解！任せろ！>>

レオナの後ろについて砂嵐の中の敵に向かう。エンジンに負担をかけることになるがこの状況ではやるしかなかった。敵はこちらに気づいているようだが羽衣丸への攻撃を優先しようとしていた。敵の主翼には前の襲撃で零戦がつけていたのと同じ帯状のマークが描かれていた。何者かがオウニ商会を狙っているのかと想像したが一度頭の隅に追いやって墜とす事だけを考えることにした。

<<サイファー　私よりお前の機体の方が攻撃力は上だ　牽制するからお前が墜とせ>>

<<了解だ　さっさと墜とすぞ>>

レオナが機銃を撃ちながら敵機に近いていく。敵機が2機ずつに別れてブレイクする。片方の隊で羽衣丸への攻撃を継続させるつもりのようだ。こちらを狙う2機編隊が機首をこちらに向けて機銃を撃ってくる。前方でレオナが回避するのに合わせて俺も同じ機動で回避する。敵機が離れる前にレオナが鋭く旋回して敵の背後に着く。俺

は速度を殺さないように少し大回りで旋回して速度を維持しながらレオナの背後に再びついた。レオナが機銃の短連射で相手を揺さぶる。敵機が左右への旋回を始めてその弾をかわそうとする小刻みに左右に切り返しているが規則的で予測しやすい動きだ。この隙を狙わない手はない。少し距離があったが２６０ｙｄほどの距離で敵機の進行方向に向けて機銃を放つ。曳光弾を確認した片方が急旋回するがもう一機が間に合わずに被弾する。左主翼が中程から折れて機体が砂嵐の中に墜ちていく。しばらく後に砂嵐の中で爆発の光が見えた。急旋回して速度を失った敵機にレオナが食らいついて機銃を放つ。三式戦独特の長いノーズに機銃弾が命中して火を噴きながらゆっくりと降下していった。墜ちていく機体をよくみると空気取り入れ口にサンドフィルターが取り付けてあった。砂嵐から奇襲してきた理由がわかった。少し上昇しながら羽衣丸に絡んでいる２機を狙う。砂嵐の中を飛んだせいかエンジンの回転が不安定になり始めていた。急がないと不利になる。

＜＜レオナ　こっちはエンジンの回転が不安定になってきた　そっちはどうだ＞＞

＜＜こちらもだ　早めにケリをつけよう＞＞

２機の敵機が羽衣丸に襲いかかっていた。大体のエンジンは無事のようだが旋回機銃が少し壊されていた。レオナが降下して三式戦の後ろにつく。すぐさま敵機がロールしてダイブを開始して逃げようとする。それに合わせて俺も降下を開始。フルス

ロットルでダイブして降下を開始した三式戦の背後を狙う。機銃を短連射して揺さぶりをかける。曳光弾を見た敵機が砂嵐に軽く飛び込みながら旋回を開始する。空戦フラップを作動させ一気に機首を敵機の進行方向に向け機銃をばらまいた。機銃が敵機のコクピットの命中しコントロールを失ってきりもみしながら墜ちていった。撃墜を確認していると上から敵機が降下してきて後ろに付いた。先ほど出したフラップをそのままにして９０度ロールした後操縦桿を引いて右に急旋回する。敵機の射線から逃れたところで敵機に弾が命中した。だが撃墜には至らずすぐさま敵機が俺の後ろから離れる。レオナがその機体を追いかけようとしたが敵機は加速しながら羽衣丸から離れる進路を取って撤退していった。なんとか２機で敵を退けることができた。だが砂嵐の中を飛んで無茶したエンジンがすでに限界を迎えていた。羽衣丸も後部ハッチを損傷しているため戻ることもできない。

＜＜こっちはもう長く飛べそうにないな…レオナ　そっちはどうだ＞＞

＜＜こちらも出力が上がらない　上昇して羽衣丸に合流するのは無理そうだ＞＞

なんとか現在は砂嵐の中からは抜けているがこのまま飛び続けることができない以上不時着を考えなければいけなかった。だが砂嵐が迫ってきてるため現在位置に不時着するのは得策とは言えなかった。どこか砂嵐をしのげるような場所がないか探しているとザラの声が無線から聞こえた。

＜＜レオナ　聞こえる？＞＞
＜＜ああ　聞こえてる＞＞
＜＜そこから北に１０キロクーリルの位置にある空の駅の跡なら砂嵐をしのげそうよ＞＞
＜＜さっき俺が見たあれか＞＞
＜＜ええそうよ　二人でそこに退避してくれって副船長が　砂嵐が収まった後に回収に行くそうよ＞＞
＜＜了解　空の駅に退避する　サイファーもそれでいいか？＞＞
＜＜ああ　問題ない　それしかないだろうしな＞＞

なんとか退避場所の確保はできた。後は機体がそこまで持つかどうかの勝負だった。レオナとともに旋回して羽衣丸から離れる。旋回するだけでもエンジンの調子が悪いと一苦労だ。少し飛んでなんとか空の駅の跡まで来ることができた。砂嵐はまだ空の駅の近くまでは来ていなかったが到達するまでの時間はあまり残っていなかった。旋回しながら空の駅の跡を観察する。滑走路は砂こそ被っていたが目立った損傷は無いように見えた。

＜＜レオナ　先に降りてくれ＞＞

レオナに着陸を譲ろうとする。だがレオナから別の提案をされた。

<<いや　ここは編隊着陸で行こう　これ以上機体に無理をさせることはできなさそうだ>>

レオナに言うとおりだった。できることなら余裕を持って早めに着陸したかったのでその提案を飲むことにした。編隊を組んで旋回して滑走路に正対する。近づいてくる砂嵐がすぐそこに見える。風も強さを増して吹き流しがたなびいていた。脚とフラップを展開して着陸準備をする。キャノピーを開けたかったが外の風のことを考えて閉めたまま降りることにした。スロットルを絞って速度を落としていき、三点着陸の姿勢をとった。ゆっくりと降下していき地面に車輪が接地する。フットペダルを踏み込んで減速していったところで突然左前方にいるレオナの機体からこちらになにかが飛んできた。一瞬すぎて分からなかったが左の主翼が地面に擦り付けられて火花を出しながらスピンを始める。こちらの機体とぶつからないように右にラダーペダルを蹴り機首を右に降って回避して再びブレーキを踏み込む。レオナの隼が滑走路から外れて舗装されてない地面に出たところでなにかにぶつかってようやく止まった。

「レオナ!!」

停止した紫電改から駆け降り声を上げながら俺はレオナの機体に走っていった。

第四章　Ｒｅｎｄｅｚｖｏｕｓ

全力で走りながら滑走路から飛び出て擱座したレオナの隼に駆け寄る。風で砂が舞い上がり視界が悪くなっていた。すでに砂嵐が近くまで迫っている。無事であることを祈りながら隼に取り付く。幸い燃料漏れは無いようだった。キャノピーの中を見るとレオナが前屈みになった状態でぐったりしていた。キャノピーを叩きながらレオナに呼びかける。

「おいレオナ！無事か！返事をしろ！」

呼びかけながら何度かキャノピーを叩いたところでレオナが意識を取り戻した。

「ん……サイファー…？」

「大丈夫か！早くキャノピーを開けろ！」

俺の声に反応してレオナがキャノピーに手をかけた。よく見ると着陸の際にぶつけたのか額から血が少し出ていた。風が強くなる中レオナがキャノピーを開けた。シートベルトを外し立ち上がって機外へ出ようとしたところでよろけて転びそうになったので受け止めた。

「…すまない」
「気にするな」
レオナが俺から離れて歩こうとするが頭を打った影響かフラフラしてて今にも倒れそうだった。
「建物まで歩くのは難しそうだな」
砂嵐がすぐそこまで近づいている以上時間はかけていられない。今のレオナを歩かせるのは得策とは言えなかった。
「すまないレオナ」
一言レオナに声をかけてから彼女を後ろから抱え上げた。驚いたレオナが声を上げる。
「何を！歩けるから降ろしてくれ！」
「悪いな、傷を押さえてじっとしててくれ」
風で砂が舞う中、体の前でレオナを抱えながら空の駅の建物まで歩いた。廃業したときに封鎖したのか正面の扉があった場所には木の板が打ち付けられていて開きそうになかったので裏側に回ってみると裏口があった。鍵がかかっていたので何度か蹴ってこじ開けた。
中に入ると従業員の控え室と思われる部屋に長めのソファがあったのでそこにレオ

ナを下ろした。部屋を見るためにライターに着火した。控え室の中を見ると棚にマッチ箱と灰皿を見つけた。マッチに火をつけて火をつけてないマッチと一緒に灰皿に置いた。これでとりあえず明かりは確保できた。ソファに腰掛けているレオナに目をやると先ほどより流れる血の量は減ったが、まだ止まってはいなかった。

「とりあえず止血しないとな」

そう言いながらフライトスーツのポケットから応急処置用のガーゼと包帯を取り出したところでレオナ言った。

「すまない…あとは自分でできる」

彼女が俺の持つ包帯を受け取ろうと手を差し出してきたが俺はやんわりと断った。

「怪我した時くらい頼ってもいいんだぜ。隊長さん」

そう言っても彼女は聞かなかった。

「いやしかしこれ以上借りを作るわけには…」

彼女が俺の手から包帯を取ろうと手を伸ばしてきた。包帯を巻こうと彼女が座るソファの横で屈んでいた俺は動きが遅れた。レオナが包帯を持つ俺の右手を掴んで包帯を取ろうとしたが、腕を掴んだ途端姿勢を崩して引っ張りこまれるように二人でソファに倒れこんでしまいレオナに覆いかぶさるような形になった。目の前に彼女の顔がある。今朝羽衣丸で会った時と同じように鼓動が速くなって顔が熱くなる。強くなり始

めていた風の音も今は耳に届かず自分の鼓動の音だけが頭に響いていた。そんなことをしてる場合ではないのは頭では分かっていたが目の前にいる彼女にただ心奪われていた。

レオナの顔を見つめていると彼女の口が動いた。それに合わせて耳に彼女の声が聞こえてくる。

「サイファー?」

名前を呼ぶ声でようやく我に返る。見惚れている場合ではない。彼女は怪我をしているのだ。彼女の上から起き上がり一言詫びた。

「悪い、痛かったか?」

ソファの上でレオナが困惑した様子で返事をした。

「い、いや大丈夫だ…わたしの方こそすまない」

レオナがソファから体を起こす。二人の間にぎこちない空気が流れる。あまりいい雰囲気ではないが治療はしなければいけない。

「包帯、するからな」

「あ、ああ…」

初めて会ったのかと思うようなぎこちなさの残る受け答えをして彼女の頭の傷にガーゼを当て包帯を巻く。先ほどとは打って変わってレオナは大人しく処置を受けた。

さっきのような事があったからか俺もレオナの顔をあまり見ずに処置をしていった。
「これで大丈夫だろう」
　そう言って包帯を巻き終えた。レオナが包帯を触りながら聞いてきた。
「すまない、助かった…随分と手慣れてるんだな」
「ん？ああ、昔ちょっとな」
「ザラみたいな事を言うんだな」
　レオナが少し笑いながら応えた。だいぶ調子が戻ってきたようだ。身体の調子をレオナに聞く。
「どうだ？まだフラフラするか？」
「いや、傷は少し痛むが目眩はもう大丈夫だ」
　その言葉を聞いて安堵した。彼女に関してはもう大丈夫だろう。落ち着いたところで次にすべき事を考える。一度建物内を見て回ることにした。正面扉は封鎖されていたが他の部分で何か損傷があれば砂嵐が吹き込んできてしまうかもしれない。
「少し中を見てくる。レオナは休んでいてくれ」
「それなら私も手伝おう」
「怪我人は安静にしてろ、な」
　レオナを控え室に残してライターの明かりを頼りにラウンジの方に出た。椅子や

テーブルなどが積まれていて、空戦前に上から見たとおりラウンジ部分は屋根に穴が開いていて風で舞った砂が吹き込んできていた。砂嵐がここに来れば間違いなくもっとひどいことになるだろう。前に砂嵐が起きた時に吹き込んだと思われる砂が溜まっていた。こちら側では砂嵐をやり過ごすのは難しそうだ。工具も材料もない状態では天井の穴は塞ぎようがなかった。

ラウンジの端の方のバーカウンターがあったのでそちらも調べてみることにした。カウンター後ろの棚には見たところほとんど何もなかった。ここを引き払った時に持っていったようだ。カウンターの内側に入ってカウンターの下を探ると指に冷たい感触があった。ライターに火をつけてカウンター下を覗き込んでみると1丁のショットガンを見つけた。「ウィンチェスターM１８９７」年代物のショットガンだ。この空の駅で護身用に使われてたものだろう。ライターの火で照らしてみるとレシーバー表面はそこまで汚くはなかった。フォアエンドを掴んで引いてみると多少の渋さはあったものの問題なく動いた。何度かフォアエンドを引いてチューブ内の弾を排出する。チューブ内には装填可能な5発が入っていた。カウンター下を漁ってみたがここにはほかに弾はなさそうだ。

一通りラウンジ内を見終わったのでレオナのいる控え室に戻ることにした。万が一の時に備えて再び弾を込め直したショットガンを持っていく。再び屋根の穴を見てみ

ると先ほどより砂が吹き込んできていた。念のために控え室側に砂がなだれ込んでくることを考えてラウンジと控え室をつなぐ廊下の扉に椅子とテーブルを置いてバリケードを作った。気休め程度かもしれないが何もしないよりはましだ。バリケードを作っている間不思議とパイロットになる前のことを考えていた。まだ戦闘機に乗る前、孤児院を飛び出して傭兵になりたての頃のことだ。あの時から随分と遠くまで来てしまった。手に握りしめていたものがライフルからＦ―１５のスティックに変わり、そして今は古いレシプロ機のスティックになっているのだ。３０間近にしてなかなか激動の人生を送っているなと改めて思った。

バリケードを組み終わって控え室に戻るとレオナがマッチの明かりで棚を物色していた。

「おい、無茶するなってば」

「これぐらいは大丈夫だ。少しくらいは手伝わせてくれ」

そう言った彼女を見てラウンジに行く前、ソファに引き倒されたことが頭に浮かんだ。思わず顔が熱くなる。どうも今朝から彼女を見ると妙に鼓動が早くなる。彼女が無茶をしようとするのを見ると放って置けなくなる。そういう感情が湧いてきた。そんなこちらの気も知らず彼女は棚を探っている。

「せめて毛布くらいあればいいんだが…」

「あったら助かるな。夜は冷える」
　話しているとレオナが棚の下からダンボール箱を見つけた。取り出して開けて見たが入っていたのはこの空の駅の帳簿のようなものだけだった。
「空振りか…」
「この部屋の棚は全部見たがこれだけだな」
　レオナが箱の蓋を閉じながら言った。
「そういえば表の方はどうだった？」
「ああ、大したものはなかった。〝これ〟を見つけたくらいだ」
　そう言って先ほど見つけたショットガンを掲げてから置いてあった椅子に腰を下ろして一息ついた。砂嵐がすぐ間近まで来たようで吹く風と建物を叩く砂の音がよく聞こえる。
「とりあえず建物内を見回った感じではここにいれば無事にしのげそうだ」
「砂嵐さえ通り過ぎればすぐに羽衣丸が来てくれる。それまでの辛抱だな」
　レオナが俺の向かいにあるソファに腰を下ろした。隙間風があるせいか少し肌寒そうに腕を摩っている。普段なら大丈夫だろうが砂嵐が吹く夜に半袖の彼女の格好は寒そうだった。毛布が見つかれば良かったのだろうが生憎見つかったのはただの紙束だ。俺は彼女に自分の着ているジャケットを差し出した。

「寒いんだろ？これ着てろ」
　少し言い方がぶっきらぼうだったかもしれない。
「気にしないでいい、大丈夫だから」
「目の前で寒そうにされるとこっちも寒く感じるんだ。いいから着てろ」
「それじゃあそっちが…」
「俺は下も長袖だから大丈夫だ、ほら」
　断ろうとするレオナに無理矢理ジャケットを渡した。彼女が戸惑いながらありがとうと言ってジャケットを着る。降りてから思ったが彼女はなかなか他人に甘えることができないタイプの人間みたいだ。
　二人の間に沈黙が続いていた。そんな時不意に明かりが消え、周囲が暗闇に包まれた。照明として使っていた灰皿の火が消えたようだ。多少は見えたので再び火をつけようとテーブルに置いてあったマッチ箱を取ったが中身はもう空になっていた。何処にしまったかと思いながらフライトスーツのポケットからライターを探したが見つからなかった。ふとライターはジャケットの方に入れていたことを思い出して向かいのソファに座るレオナに声をかける。
「レオナ、ジャケットのポケットにライターが入ってるから取ってくれないか？」
　そういうとレオナが短く返事をしてポケットを探ってくれた。ライターがすぐに見

つかり受け取って火をつけてテーブルに置いた。先程見つけた帳簿の紙を燃料がわりにしようと立ち上がって棚にあるダンボールの方に向かうとレオナが呼びかけてきた。
「サイファー…」
「ん?どうした?」
振り返ってみると彼女の手になにかが握られていた。ライターの薄ぼんやりとした明かりだがそれが何かはわかった。俺のワッペンだ。
「これは…どこの文字なんだ?イジツの物とは思えないんだが…」
鼓動が速くなる。俺の秘密が彼女の…この世界の人間の手の中にあった。迂闊だったと後悔した。彼女に惹かれて油断していたのかもしれない。彼女に対して返事も出来ず頭の中で必死にどう対処するか、どう誤魔化すかを考えていた。再びレオナが口を開き彼女と目が合う。
「サイファー?」
彼女のその真っ直ぐな瞳を見てこいつになら打ち明けても大丈夫かもしれない。そういう思いが湧いてくる。それに…彼女に嘘をつくのは嫌だと思った。箱から取り出した紙を着火して灰皿に置いて再び椅子に座る。燃え上がった火で俺の顔が照らし出される。大きく息を吐き出して口を開いた。
「どこから話したもんかな…」

　真向かいに座るレオナに対して俺は語り始めた。
「そのワッペンを見てのとおり、俺はこの世界の人間じゃない」
「…ユーハングなのか？」
「いや、ユーハングでもない。ここでもユーハングでもない別な世界から来た…いや迷い込んだって言った方がいいかな」
「迷い込んだ…」
　彼女が下を向いてボソリと呟いた。
「もしかして…『穴』に？」
「ああそうだ。迎撃任務に出て飛んでたら目の前に穴が開いてな。躱しきれずに突っ込んだら…この世界に出てた」
「迎撃任務…サイファーはどこかの組織のパイロットだったのか？」
「そうだ。そのワッペンは俺のいた部隊のものだ」
　レオナが手に持ってるワッペンに目を落とす。
「『ウスティオ空軍　第６航空師団　第６６飛行隊　ガルム隊』それが俺のいた部隊だ」
「ウスティオ空軍……」
「まあ俺は正規兵じゃなくて傭兵だったんだけどな」
「傭兵…か…」

レオナが眉を潜めながら俺の方を見た。この世界では傭兵はあまりいいように思われてはいないからだろう。警戒を解くために言葉を付け加える。
「傭兵と言ってもどちらかといえばレオナたちみたいな存在さ。雇う側が会社か国かの違いだよ」
「そう…なのか」
一応彼女の警戒は解けたと思うが、まだ少し腑に落ちていないようだった。
「俺の目的は元の世界に帰る方法を探すことだ。別にこの世界をどうこうしようって考えはないから安心してくれ」
そう言うとレオナが口を開いた。
「事情は分かった」
ある程度の理解は得られたようだった。胸が落ち着いてくる。
「それでこれからどうするつもりだ？何かアテでもあるのか」
「あー…それで少しレオナに聞きたいことがあるんだ」
「私に？」
レオナが驚いたように俺を見る。そのまま続けて本題に入った。
「ラハマにいる『銀髪の男』って心当たりあるか？」
「『銀髪の男』か…随分大雑把だな。その男が何か知ってるのか？」

レオナが渋い顔をして聞いてきた。自分でも流石にヒントが少なすぎるかと思った。
「今日ポロッカで俺が少し揉め事に巻き込まれたろ？あの後に見つけた本屋の婆さんが言ってたんだ。『ユーハング語の本をラハマから来た銀髪の男に売った』って」
それを聞いたレオナが手を口元にやって考えている。少しして彼女が口を開いた。
「…知り合いに思い当たるのが一人いる」
「本当か！」
彼女がそれに続けて言った。
「おそらくケイトの兄だと思うんだが…」
「なんだ？」
「今思ったんだが、彼に会う前にマダムルゥルゥにこの話をした方がいいと私は思う」
レオナの口から彼女と俺の今の雇い主の名前が出た。確かにそう言われればそうかもしれない。彼女ならラハマに顔も効く。だがこの仕事を受けようと彼女に会った時にこのことをこちらの事言わずに誤魔化した事を考えると少し気が引けた。しかしこのまま各地を放浪しながら穴について調べるより、ある程度知識のある人間がいるところに腰を落ち着けるのもいいかもしれないとも思った。
「分かった。ラハマに戻ったらマダムに相談してみる…少し楽になったよ」
「楽になった？」

レオナが少し首を傾げて聞いてきた。
「俺はイジツに来て今まで誰にもこんな事言えなかったからさ。レオナに打ち明けたら少し気が楽になったよ…ありがとう」
彼女に打ち明けたことでここに来て止まっていた歯車が動き出した感じがした。こんな感覚は初めて〝あいつ〟と組んだ時以来だ。
「改めて言われるとなんだかくすぐったいな。私の方こそ今日は助けられた。礼を言う。ありがとう」
彼女が右手を差し出してきた。初めて会った羽衣丸のタラップで交わさなかった握手を今交す。握ったその手に力強さと脆さを感じた。
その後、軽く自分のことを彼女に話した。一通り話して時計を見るとなかなかいい時間が経っていた。
「さて、あとはこの砂嵐が治まって羽衣丸が迎えに来るのを待つだけだな。俺が火の番してるからレオナは寝てくれ」
「いいのか?先に私で…」
「さっきも言ったろ?怪我人は安静にだ」
「…分かった。少し寝たら交代するから起こしてくれ」
そう言ってレオナが結んでいた髪を解きソファに横になった。思わずその仕草にま

たドキドキしてしまった。しばらくすると彼女の寝息が聞こえてくる。先ほどの仕草が目に焼き付いて離れない。速くなった鼓動が治らないまま夜は更けていった。

数時間が経ちすっかり風の音は止んでいた。結局レオナを起こさずに一晩を過ごした。怪我をした彼女に無理をさせるのが嫌だった。腕時計を見ると7時を指している。羽衣丸が救援にくるのはいつだろうか。そんなことを考えているとレオナがソファから起き上がった。

「おはようレオナ、よく眠れたか？」

「おはよう……すまない、ずっと番をしてくれたんだな」

「好きでやったんだ、気にするな」

そんな会話をしてると微かながら音が聞こえてきた。だんだん大きくなってくる。ある程度大きくなったところで戦闘機の音だと分かった。隼のエンジン音だ。ショットガンを片手に二人で控え室を出て裏口から外に出た。晴れ渡る空が暗闇になれた目にしみる。手をかざしながら空を見ると隼が旋回していた。こちらに気づいたようで高度を下げ始めた。目が慣れてきて機体の判別がつく。赤い鳥のエンブレム、キリエの隼だ。緩い左旋回をしながらコクピットからキリエが俺たちに向かって手を振っている。俺たちが手を振り返すとキリエが旋回して何回かバンクしながら飛び去って行った。どうやら先に無事かどうかを確かめに来たようだった。ふと飛び去った方向から

目を下に移して自分の機体を探した。幸いなことに俺の機体は砂を被ってはいたが、無事に砂嵐に耐えたようだ。しばらくするとまた別なエンジン音がきこえてきた。音のする方向を見てみると飛行船が見えた。半日ぶりに見る第弐羽衣丸の姿だ。ゆっくりと高度を下げて羽衣丸が地上に到着した。整備班が出てきて手早く繋留作業が進んでいく。作業を見ているとレオナの名前を呼ぶ声がした。ザラだ。

「レオナ!」

「ザラ…」

レオナにザラが駆け寄る。すぐにザラがレオナの頭の包帯に気づく。

「その包帯は?」

「着陸した時にぶつけてしまってね。心配しなくて大丈夫だよ」

その言葉を聞いてザラが胸をなでおろしてると、後ろからコトブキがやってきた。彼女たちがレオナと話している中でナツオ班長の姿が見えた。彼女の指示で俺とレオナの機体が羽衣丸に運び込む作業が進んでいく。その作業を見ていると後ろからレオナが俺の名を呼ぶ声が聞こえた。

「サイファー、これは返すよ。今回はありがとう」

彼女が着ていた俺のジャケットを脱いで差し出してきた。

「もっと着ててもいいんだぜ。似合ってたぞ」

つい口からそんな言葉が出てしまった。そんなことを言いながら彼女からジャケットを受け取って袖を通した。彼女がジャケットを着た俺を見て言った。

「持ち主が着るのが一番だよ。よく似合ってる」

そんな彼女の言葉にまた顔が熱くなる。ジャケットからうっすら彼女の香りがした。

空の駅、ローソから救出されて1日が経った。羽衣丸は現在順調にラハマまでの航路を進んでいる。もうあと数時間でラハマに到着するという段階だ。今回の輸送では2回も空賊に襲われた上に不時着先で野営までした。おまけにレオナに俺が違う世界から来たということまでバレてしまった。これだけのことがあると流石に疲れがたまる。こんなに立て続けに色々起きたのは円卓を通り抜けてアヴァロンダムを目指したあの時以来だろうか。そんなことを考えながらベッドで横になってるとふと機体の整備はどうなってるだろうかと頭に浮かんだ。ベッドから体を起こして格納庫へと向かった。

格納庫では俺の紫電改のエンジンの整備とレオナの隼の整備が行われていた。レオナの隼の近くに班長がいるのを見つけたので声をかけるとこちらに気づいて振り向いた。

「おう、砂嵐の中を飛ぶなんてだいぶ無茶なことをさせたんだな。エンジンが砂まみれだったぞ」

「面倒をかけてすまないな」

「レオナやお前が無茶したお陰で羽衣丸は無事なんだ。好き勝手に飛ばして壊したわけじゃねえんだから構わねえよ」
「ありがとう。どれぐらいで直りそうなんだ?」
「お前の機体はあと少しってところだな。1時間もしないうちに飛ばせるようになるぞ」
　その言葉を聞いて安心した。買ったばかりの機体がスクラップになるという展開は避けられた。
「助かる。1時間ぐらいしたらまた顔を出すよ」
　そう言って格納庫を後にしようとした時不意に腹が鳴った。考えてみれば空の駅から今まで何も食べずに過ごしていた。何を食べようかと考えながら格納庫から出た。向かう先はサルーンだ。
　扉を開けてサルーンに入るといつものようにコトブキがいた。みんないつもどおりの位置に座って談笑している。一番奥側に座ってるレオナが俺に気づいて軽く手をあげる。こちらも軽く手をあげて目を彼女に向けると頭には新しい包帯が巻かれていた。だいぶ座り慣れたいつもの席に着いてメニューを睨む。もう1時間もしたら飛ぶことを考えると今回もハンブルグサンドでいいかと思っているとリリコがコップを持ってきた。まだ俺は注文なんてしてはいない。持ってきたリリコにハンブルグサンドを注

文するついでに聞いてみた。
「これは?」
「こちらのお客様からよ」
　あちらではなくこちらという言葉で察した。目の前のテーブルに座ってるザラがこちらを見て言った。
「昨日レオナを助けてくれたお礼よ」
　そう言った彼女に礼を言って言って一口いただいた。中身はオレンジジュースだ。いつもと変わらないはずなのに美味しく感じた。そう感じた理由は1日ぶりに飲んだからだったのかそれともレオナを助けられた喜びからなのかはわからなかった。それから程なくしてリリコがハンブルグサンドを運んできた。それを見ていたチカがこちらを向いて言った。
「おっさん前もそれ食べてなかった?たまにはカレー食べようよ!カレー!」
　それに続いてキリエが口を開く
「チカ人のこと言える?チカだって一人の時いっつもカレー食べてるじゃん!」
「それならキリエなんか毎日のようにパンケーキ食べてるじゃんか!キリエはパンケーキオバケだね!」
　初めてあったラハマの飛行場でぶつかった時もこんな感じで飛び出してきたんだろ

うかと考えつつハンブルグサンドに口をつけた。二人がじゃれ合っているのをレオナが制止する。

「二人とも食事の時くらい静かにしろ」

レオナの一喝で二人が大人しくなる。彼女の体調もすっかり元どおりになったようだ。昨日の怪我してふらついていた姿がすでに懐かしく思えるくらいだった。エンマが紅茶を飲みながら呆れた声で言った。

「キリエもチカも毎回のように喧嘩してよく飽きませんわね」

「キリエとチカが食事中に口論になるのはこれで１２６回目。レオナが静止したのも同じ回数」

ケイトがスラスラと今までの回数を羅列する。あのやりとりを１２６回も止めてると考えると流石にレオナの苦労がわかる気がする。ハンブルグサンドを食べ終わりコップに残ったオレンジジュースを流し込んだ。まだ格納庫に行くには少し早いかと思い、少しコトブキの会話に耳を傾ける。キリエ達が俺とレオナが空の駅に退避してる間に羽衣丸が砂嵐をどうやり過ごしたか話している。そういえばレオナから彼女達に俺のことは伝わってるんだろうか。キリエとチカが俺にそのことを聞いてこないところを見るとまだ伝わってないとは思うのだが。少しの時間が経ち時計を見ると先ほどナツオ班長に戻ってくると言った時間まであと少しという時間だった。席を立って格

納庫へ向かおうとサルーンから廊下に出るとレオナが俺を呼んだ。
「すまないサイファー、一つ聞きたいことがある」
「なんだ？」
「ザラ達にお前の正体を伝えても大丈夫か…？」
「…構わない、どのみちマダムルゥルゥに教えることになるんだしな」
「そうか…わかったよ」
　彼女がサルーンへと戻っていく。扉の向こうに消えていくわずかな時間だがずっと見ていた。彼女が気にかかるのに彼女と面と向かって話すのが上手くできない。後ろ姿だけを目で追いかけてしまう。思わず自分自身にため息が出る。気持ちを切り替えて格納庫へ足を進める。今はとりあえず空に上がろう。あの広い空で一度頭をスッキリさせよう。そう考えながら格納庫へ向かった。後ろから視線を向けているザラにはこの時は気づかなかった。
　格納庫へ到着するとすでに俺の機体はすっかり元通りになってエンジンがかけられて暖機運転まで行われていた。レオナの隼の方に目をやるとこちらもほとんど整備は終わっていた。整備班の手で操縦翼面のチェックが行われている。その作業をしていた班長にこちらから近づいて声をかけた。エンジンが回っているからかなり大声になった。

「すっかり元通りだな！もう飛べるのか！」
「来たか！もう準備は済んでる！副船長に話は通してあるし弾も装填済みだ！いつでも出ていいぞ！」
「了解！整備ありがとよ！」
　班長から離れて紫電改に近寄る。鼻に付く排気の臭いが心地いい。機体のステップを踏んでコクピットに体を収める。１日と少しぶりなのに随分と心が踊った。シートベルトを締めて機体の動作チェックを行う。エルロン、エレベーター、ラダー、フラップ、プロペラピッチ、ミクスチャ、カウルフラップ、全てＯＫだ。タキシングして滑走路に出て船橋に連絡して発進の許可を取る。
＜＜船首ハッチ開放します＞＞
＜＜風向きは２００度　風速２．５クーリルです＞＞
＜＜総員注意　制動開始　サイファー発進を許可します＞＞
　その言葉を聞いてスロットルを徐々に押し込んでいく。右にラダーペダルを踏み込んでカウンタートルクに負けないようにしながら滑走していく。ハッチの端まで来たところで機体が下に沈み込みながら空におどり出る。キャノピーから太陽の光が差し込み青い空が見える。カウルフラップを閉じてスロットルを押し込んで加速していく。機体が羽衣丸から離れていく。ある程度離れたところでスティックを引いてピッチ

アップ、一気に上昇を始める。エンジンは快調そのものだ。２０００ｐｓを誇るホマレエンジンが機体を引っ張り上げる。ある程度上昇したところで水平飛行に戻して再度加速する。次にロールして降下を開始。重力に引かれた機体が一気に加速する。５００００ｆｔほど降下したところで再び水平飛行へ移行。その後にバレルロールやスナップロール、スプリットＳやインメルマンターンを試した。ある程度試したところでサネアツ副船長から無線が入った。

＜＜サイファー　聞こえるかい？＞＞

＜＜副船長？どうしたんだ＞＞

＜＜君のいる位置から　北西に１０キロクーリル行ったところでレーダーに戦闘機の反応が７つあるんだ＞＞

＜＜空賊か？＞＞

＜＜レーダーを見る限り近づいては来てないんだけど一応そっちには行かないように気をつけてね　空戦してるみたいだから＞＞

その言葉を聞いてすぐに機体を高度を上げつつ北西方向に向ける。副船長には悪いがもし誰かが空賊に襲われてるのならば放っておくことはできなかった。

＜＜ねえちょっと!?そっち行っちゃダメだってば!・＞＞

無線のスイッチを切り副船長との通信を切る。１５ｎｍほど進んだところで曳光弾

の航跡が見えた。見たところ1機の飛燕と5機の隼二型が交戦しているようだ。事前の機数と違うのは一機墜ちたからだろう。機動的に飛燕の方が隼を1機墜としたようだ。鋭い機動で隼を翻弄している。その機動を見ているうちに奇妙な感覚を覚えた。俺はこの機動を見たことがある。記憶にある機動と照らし合わせていく。コトブキの や今まで出会ったイジツのパイロット達の機動を思い出すがそれとは一致しない。この機動を見て頭の中に浮かぶのは元いた世界のパイロットだ。それもただ一人。そんなはずはない、奴がここにいるはずはない。そう思いながら機体を目の前の空戦へと進めたが、機体の塗装を見てフラッシュバックが起きる。

白い塗装に黒いアンチグレア、そして右の主翼を中程から赤く染め上げた機体。

『片羽の妖精』かつて俺の相棒だった男。

混乱する頭に対して体は勝手に動く。空戦の真上に到着した時に体はもう戦闘態勢に入っていた。機体をロールさせて降下を開始。高度がぐんぐんと下がり敵機との距離が近づいていく。狙うは飛燕の後ろを狙おうと注意が疎かになっている隼だ。２２０ｙｄまで近づいて隼の進路に機銃を放つ。向こうがこちらに気づいたようだがもう手遅れだ。機銃弾が隼を貫きタンクから炎を上げて墜ちていく。降下から機体を引き

起こしつつ左旋回を開始して飛燕の後ろに着く。降下で速度が乗ってる分飛燕よりこっちの方が速い。そのまま飛燕を追い抜いて奴の左前方に出た。その状態でバンクを振る。撃たれる可能性もある無謀な行為だったかもしれないが今はこれしか思いつかなかった。何度かバンクを振ってみたが撃ってくる兆候はなかった。あいつが分かったものと想定して再び隼への攻撃を続行することを決める。俺が飛び込んできたことで隼の連中は混乱していた。改めて隼の翼を見ると明るいグリーンと茶色のツートンカラーに中にハイエナのマークが確認できた。こいつらは単独行動してる機体を狙うことで知られてる空賊『ブチハイエナ団』だった。混乱から解けないうちに墜としきることにした。スロットルを再び押し込み加速する。それに合わせてあいつも俺に追従する。目の前にいる隼を左旋回で左旋回追いかけていると隼が急旋回した。旋回半径では隼に紫電改も飛燕も勝てないのは分かりきっていた。その誘いに乗らずに上昇してハイヨーヨーに持ち込む。上昇して上から見ると旋回の終わりで速度が墜ちきるのが見えた。ループの頂点から降下して攻撃を開始しようとした時にあいつが俺の後ろから外れた。おそらくこちらの後ろに着こうとしている隼を見つけたんだろう。後ろはあいつに任せて目の前のフラフラの敵に照準を合わせた。速度が落ちているためにリードアングルはほとんど取らずに済んだ。左手でトリガーを1秒程度引く。機銃が唸りを上げて隼に風穴を開けていった。翼がへし折れて敵が脱出するのが見えた。

撃墜後に後ろに敵が付いていないか見ると俺の後ろに着こうとしていた敵を追い詰めて墜としていた。相変わらず無駄のない正確な狙いだ。これで残りは2機だ。周囲を探すと1機が降下して逃げの姿勢をとった。それを上から降下してあいつの飛燕が追う。降下速度では重い飛燕が有利だ。あっという間に追い詰めて機銃を逃げようと旋回した先に叩き込んでいた。隼が胴体をへし折られて錐揉みしながら墜ちていく。残りの1機を探していると俺の後方に着こうと旋回しているのが見えた。今回は隼の方が上にいて速度も乗っている。乗った速度を活かして俺に攻撃しようと距離を詰めてきたところでスティックを左手前に引いてバレルロールを繰り出す。速度の乗った隼はそのまま俺の前にオーバーシュートした。敵が急旋回でやり過ごそうとするが俺が機体を立て直してトリガーを引く方が早かった。ガンサイトの中で隼が切り刻まれる。燃料タンクに被弾したのか爆発を起こして目の前で四散していった。

空域がクリアになる。水平飛行をする俺の横に片羽の赤い飛燕が着いた。それを見て俺はかつてウスティオで俺たちが使っていた周波数にチャンネルを合わせて無線機のスイッチを入れた。少しの沈黙の後、かすかな雑音以外聞こえなかったチャンネルからクリアな声が聞こえた。

＜＜よう相棒　まだ生きてるか＞＞

第五章　ＧＡＬＭ　２

空戦を終えたのち俺は羽衣丸へ向かっていた。正確に言えば『俺たち』だが。振り向いて左後方に目をやると赤い主翼が見える。相変わらず正確な操縦で俺との距離を保ちながら着いてきている。違うのは機体がイーグルではなく飛燕だというくらいだった。

＜＜ピクシー　チャンネルを変えるぞ＞＞

そう言ってピクシーに羽衣丸との交信に使用している周波数を教えてチャンネルを変えた。すぐにサネアツ副船長の声が聞こえた。

＜＜あぁやっと繋がった…急に通じなくなったから墜ちたんじゃないかと心配してたんだよ＞＞

＜＜すまないな副船長　昔馴染みが空賊に襲われてたもんでな　一緒に降りても大丈夫か？＞＞

＜＜大丈夫だけど…悪い人じゃないよね？＞＞

＜＜大丈夫だ…　多分な＞＞

交信を終了して羽衣丸の船尾に接近する。後部ドアが開いて飛行甲板が見えてくる。

前の空戦では空の駅に不時着したので久しぶりの着艦だ。機速を下げていきフラップとギアを展開する。

羽衣丸のトンネル型の飛行甲板に飛び込むたびにアヴァロンダムのトンネルに潜ったことを思い出す。穴のサイズ自体はアヴァロンよりも小さかったがこちらの方は攻撃もしてこないし燃料ある限りやり直しがきく分簡単に思えた。

だんだんと飛行甲板の後端に近づいていく。少し飛び出た後部ランプに向かって機体を操作していく。羽衣丸の後部で一瞬視界が暗くなった瞬間にキュッとタイヤが甲板を擦る音がする。スロットルを絞りフットペダルを踏み込んでゆっくりとブレーキをかけていく。

甲板の中程の駐機スペースに差し掛かるあたりで機体を完全に停止させ燃料を遮断してエンジンを切ると整備班が近寄って来て駐機スポットに移動する準備を始めた。いつ見ても素早く訓練されたいい動きだと思った。ヴァレー基地の整備班と同等かそれ以上の統率された動きだった。

シートベルトを外して機体から降りようとしたところでナツオ班長が機体に登ってきて頭を叩かれた。

「このばかたれ！組んだばかりの機体でいきなり全開の空戦する奴がいるか！」

「悪い班長…でも班長だって『弾も装填済みだ』って言ってたろ」

「あれは万が一絡まれたときにためだ！慣らし飛行であそこまでやる奴がどこにいるってんだ！」
「…悪い」
怒鳴りつける班長に言い返す事も出来なかった。ふと目を別な方向に向けると自機の整備に来ていたであろうキリエとチカがこちらを見てニヤニヤと笑みを浮かべていた。まるで同類を見つけたかのような笑顔だった。
駐機スポットに着いた機体から降りると次の機体くるぞという整備班の声が聞こえた。その声を聞いて飛行甲板の後ろ側に目を向けると飛行甲板に近づいてくる機影が見えている。やがて機影が大きくなっていって甲板に脚をつけた。夢でも幻でもなく間違いなくそこにその機体は存在している。
俺の近くで右翼を赤く染めた機体が停止して男が飛行甲板に降りたった。
「サイファー、久しぶりだな」
そう声をかけてきた懐かしい声のその男を思わず俺は思い切り殴りつけていた。先程まで俺を見て笑っていたキリエとチカが驚きの声をあげるのが聞こえた。二人だけではなく整備作業をしていた整備班もこちらに視線を向けていた。俺に殴られた左頬を押さえながらピクシーが言った。
「ひさびさに会った相棒にずいぶん手荒い歓迎をするんだな相棒」

甲板に倒れているピクシーに手を差し伸べながら俺は言った。
「これはあの日俺に無断で隊を離脱した分だ、これで全部チャラにしてやる」
ピクシーが俺の伸ばした手を掴んで立ち上がる。その光景を見ていたキリエの声が耳に入ってくる。
「え、どういうこと?」
副船長にピクシーのことを話すと頭を抱えながらもピクシーのラハマへの同乗を許可してくれた。流石に副船長に色々迷惑をかけすぎたかもしれないと思ってきた。
ラハマまではもう目と鼻の先と言う距離まで来ている。副船長のところへ行った後ピクシーと二人で俺の船室にやってきた。ここなら落ち着いて話ができる。
「で、どうしてお前がこの世界にいるんだ?ピクシー」
前置きもせず本題に入る。ピクシーが口を開いた。
「アヴァロンダムでお前と交差した直後に目の前に突然『穴』みたいなのが現れてな、躱すことも出来ずに突っ込んで気がついたらこの世界の空を飛んでたんだ」
こいつも俺と同じだった。続けてピクシーが口を開く。
「とはいえお前が与えたダメージでそれ以上飛ぶのは無理だった。相変わらず正確な攻撃だったな。俺の完敗だ」
ピクシーが苦笑しながらそう言った。

「そりゃどうも。で？その後はどうしたんだ？」
　続きを早く言うようにピクシーに催促する。
「そのまま墜ちようかとも思ったんだが…生存本能ってやつかな、気がつけばレバーを引いて機体から脱出していた。痛む身体を引きずって彷徨ってたところを近くの街の奴らに助けられたんだ」
　ピクシーが今まで見たことのない優しい目でこちらを見た。
「相棒、俺はお前に感謝してるんだ。あの時止めてくれてありがとう」
　そう言ったこいつの顔つきはとても穏やかだった。昔のこいつとはどこか違ってた。
「らしくないじゃないかピクシー、あの皮肉屋のお前はどこへ行ったんだ？」
「まあ…俺も少しは歳をとって落ち着いたとでも思ってくれ。お前の方はどうしてたんだ？」
　さっき俺に殴られた左頬をさすりながらピクシーが聞いてきた。
「あの戦いから1年くらいはヴァレーに居たよ。それでお前と同じように穴に飛び込んでこっちに来たって訳だ」
「なるほど、奇妙な縁だな。かつて袂を分かった者が同じ世界に飛ばされるなんてな」
　こうして別世界で顔を合わせるのはピクシーが言うとおり奇妙ではあった。何者かが作為的に俺たちをこの世界に飛ばしたとも考えられなくはないがそんな事ができる

ものなのだろうか。そんな事を考えていると再びピクシーが口を開いた
「にしてもお前がオウニ商会なんてでかいところで飛んでるとは思わなかったな」
「今回だけの雇われだよ。色々なとこで飛びながら帰る方法を調べてる。そういうお前は今何やってるんだ?」
そう俺が聞き返すと何も言わずピクシーが奥の座敷になってるところを指差した。どういう意味か分からなかった。座敷には机と棚くらいしか置いてない。
「あー…家具職人とかか?」
「違う、どうしてそうなる…その机の上に乗ってる方だ」
ピクシーに言われて机の上を見ると本が3冊置いてある。俺がポロッカの書店で買った本だ。余計に頭が混乱してきた。
「まさか作家か?…お前が?」
「そのまさかだよ。その机にあるうちの一つ、『グッドフェロー』って著者が俺だ」
思わず笑ってしまう。こいつが本を書いて売るようなことをするとは思っても見なかった。
「お前は書く側じゃなく読む側だろう」
「笑うなよ。あの戦いの後で色々思ったんだ。生き残ったからには実際に色々なところを訪れて境目の意味を探すのもいいかもしれないってな。…流石に笑いすぎだろ相棒」

未だに笑いが止まらない俺を見てピクシーが眉をしかめた。なんとか笑うのを抑える。

「は～…久々に笑わせてもらったよ。なんだかお前を墜とした事に悩んでたのがバカらしくなってきた。じゃあ再会を記念して一杯飲みに行くか。『グッドフェロー先生』？」

「茶化すなよ相棒。じゃあ久々に奢ってもらおうか。相変わらずお前は稼いでるみたいだしな」

そうして二人で船室を出てサルーンへ向かった。もうあの悪夢は見なくなりそうだ。

サルーンの扉を開けるいつもどおりコトブキがいた。その近くのテーブルにピクシーと一緒に着いてリリコにビールを注文した。すぐに彼女がジョッキを持ってきたが、俺たちのテーブルにビールが着いた途端にキリエとチカから質問攻めにあった。

「サイファー！穴の向こうから来たってほんと!?海ってどんな感じ!?サカナとか食べたことある!?」

「穴の向こうにアノマロカリスっている!?ていうかそのおっさん何者!?」

いきなりの二人からの質問攻めに答えを返すことが出来なかった。たじろいでいるとレオナが二人を制止した。

「二人ともやめないか。すまないなサイファー、一応コトブキのみんなには話したんだが」

「ありがとう。まあそりゃあこうなるよな」
「相棒、彼女達がコトブキか？」
　ピクシーが彼女たちを見て聞いてきた。
「そういえば自己紹介がまだだったな。こいつはピクシー、俺の仲間だ。前に話した喧嘩別れした奴がこいつだ」
「よろしく頼む。歴戦の用心棒って聞いてたからどんなアマゾネスかと思ったら案外若いんだな」
　ピクシーが手を差し出してレオナと握手する。その後レオナが他のメンバーを紹介した。一通り終わってから彼女達に自分達のことを話し始める。
「で、まあレオナにも言ったが穴の向こうから来たってのは本当だ」
　そうして俺は遭難した時にレオナに話したことをコトブキに語り始めた。ひととおり話し終えたがやはり少し困惑しているようだった。
「以前イケスカで穴を見たとはいえ実際に目の前に穴の向こうから来たという人物がいるのは奇妙なものですわね」
　エンマが紅茶に口をつけながら言った。
「アレンの研究にはなかった情報、興味深い」
「私たちが知ってるユーハングとはだいぶ違うみたいね」

　ケイトとザラがそう言った後にキリエが質問する。
「でもさ、変じゃない？同じ世界の二人が別々のタイミングでイジツにやってくるなんて」
「たまたまじゃないの？」
「えー、でもそんなたまたまある？」
　キリエが言った言葉が少し気になった。たしかに俺とピクシーが時間は違えど同じ世界に迷い込んだのは少し気になっていた。だが外部からあの穴を操作するなんてことが出来るだろうか。
「サイファーはラハマに着いたらどうする？」
　レオナが今後の動きを聞いてきた。
「とりあえずはマダムに事を話すのとケイトの兄さんに会ってみるかな。ピクシー、お前はどうする？」
「こうしてまた会ったのも何かの縁だろうしな。しばらく執筆は止めてお前に着いて行くよ」
　ピクシーがビールをを口に運ぶ。一人でも今までやってはこれたがこいつが２番機になってくれるならこれほど心強いことはなかった。
「というわけでまずはマダムに会う。今回の報酬も受け取らなきゃいけないし」

「そうか。マダムならきっと力になってくれると思う」
レオナが自分のコップに口をつける。少し不安な気もしたがなるようになると思うしか無かった。
船室で荷物をまとめていると羽衣丸が高度を下げ始めた。長く感じられた旅路がようやく終わる。往復合わせて1週間程度しか経っていないのにとてつもない長旅に思えた。
地上に着いた羽衣丸に係留作業が行われてタラップが装着される。降りるためにピクシーと共に船橋で待っているとそこにキリエとエンマもいた。キリエのボヤキが聞こえる。
「あーもう今回疲れたよ…いつも以上に空賊襲ってくるしさ～」
「招かれざる客こそ多く来るものですのよキリエ。私が今までの人生の中で思い知らされた教訓です」
そんな二人の会話を聞いているとタラップからマダムルゥルゥが上がってくるのが見えた。手には新聞のようなものを持っている。
「あらちょうどいいわねサイファー。ちょっと社長室まで来てちょうだい。キリエ、副船長とレオナに社長室に来るように伝えてもらえる？」
「はーい」

疲れのせいかいつもどおりかは分からないが間延びした返事をしてキリエがレオナを呼びに行く。俺はマダムの後に着いて社長室へとやってきた。マダムがデスクについて細長いパイプに火をつける。すぐあとに副船長が入室した。

「失礼します」

程なくしてノックが聞こえてレオナが入って来る。

「すみませんマダム。遅れました」

彼女が入室するとマダムがパイプを置いて先ほど見かけた新聞を机に置いた。

「三人を呼んだのは他でもないわ。今後のことについてよ」

「今後のことですか…？」

副船長が聞き返す。彼を呼ぶということは羽衣丸に関わる重要なことのようだ。

「その新聞の一面を見てちょうだい」

マダムに言われて副船長が新聞を取る。俺とレオナもその新聞に目をやる。一面にはサクラガオカ騎士団という組織が襲撃を受けたという記事がデカデカと載っていた。写真を見る限り拠点にしている街ごと手酷くやられたようだ。

都市が攻撃を受けるということはこの世界では珍しい、だがこの記事が俺たちの今後にどう関係しているのだろうか。

「見ての通りサクラガオカ騎士団が攻撃を受けたわ。そしてその前日に新聞社にに声明

文が送られてきてたそうよ。」

マダムが声明文の写しを副船長に渡して読み上げるよう言った。

「えーなになに、『我々は自由博愛連合の正統なる後継者である。現在イケスカで堕落している自由博愛連合を名乗る組織を我々は認めない。議長イサオの思いを継ぎ世界を正すべく我々は立ち上がった。先の戦いで自由博愛連合に反抗した都市、組織は世界の平和と安寧を求めるものにとっての敵である。我々はこれらの敵に対して宣戦を布告する』これって…」

「書いてある通りよ。つまりラハマも我々も狙われるということよ」

マダムが再びパイプに火をつけながら忌々しそうに言った。声明文だけならただの脅しだと思えたが、この写真を見る限り彼らは本気のようだ。

「等のイケスカの自由博愛連合はなんと?」

「知らぬ存ぜぬよ。イケスカも一切関係ないと言い張ってるわ」

マダムが口から紫煙を吐き出す。

「ここからが本題。一つ目は今後の輸送業務のこと。これは通常通り行うわ」

「しかしこの状況で通常通り輸送するのは危険すぎませんか…」

副船長が心配そうに言った。マダムが話を続ける。

「危険は承知よ、羽衣丸の乗組員には危険手当も出すわ。その上で二つ目。現状羽衣丸

の護衛はコトブキ一隊だけれど増やそうと思うの」
　そう言ったマダムにレオナが疑問を投げかける。
「また六人の隊を増やすという事ですか？」
　紫煙を吐きながらマダムが答える。
「流石にもう六人増やすのは手間がかかるし費用もかかるわ。できるなら二人ぐらいがベストね」
　そう言ってマダムが机から契約書を取り出して俺に向けて机の上に置く。
「今回の輸送で契約を打ち切ってもいいし、これからもしばらくオウニ商会にいてもいいし、自由に選びなさい。返事はすぐじゃなくていいわ」
　答えはもう決まっていた。だがマダムの机にあるペンを借りて書類にサインしようとするとマダムが呼び止めた。
「もしサインをするのであれば、私にあなたの事をちゃんと教えてちょうだい。全てね」
「全てですか」
「そう全て、これはあなた達を守る意味でも必要な事なの」
　そう言われて俺はレオナに話した事をマダムに語った。この人なら大丈夫だろうと思いながら。
「できれば最初の契約の時に素直に話してもらいたかったわね。まあいいわ」

書類にサインをして彼女に言った。
「またしばらく世話になることにします。今度は二人でね」
書類をマダムに返す。マダムが受け取って机の中にしまった。
「次の輸送は5日後、アレシマ行きよ。それまでは色々準備しててちょうだい」
そう言われて俺たちは社長室を後にした。
「さて…これからどうするかな」
俺がそうぼやくとレオナが言った。
「そういえば私はみんなにこのことを話したら頭の検査のために病院に一度行くんだが一緒に来るか?アレンに会ってみるんだろう?」
「そうだな…一度色々聞いてみたいと思ってたし…そっちがよければついて行くよ」
「わかった。みんなにさっきのことを話してくるまで船内で待っててくれ」
そう言ってレオナは船室の方へ向かった。船橋の入り口に向かうとピクシーが待っていた。
「よう、話ってのはなんだったんだ?」
そう聞いてきたピクシーに俺はさっきマダムから聞かされた話を聞かせた。
「って訳でまだしばらくラハマを拠点にオウニ商会で働くことになった。次は5日後だ。俺一人で決めて悪いな。」

「どのみち俺はお前について行く…とは言ったんだがサイファー、少しラハマを離れてもいいか？」
　よくよく考えればこいつとはさっき不意に会ったばかりで何も整理できていないのだった。
「大丈夫だ。次の出航に間に合うなら構わない」
「じゃあ一度離れさせてもらう。３日後には戻ってくる」
　そう言ってピクシーは船橋から降りて羽衣丸から降ろされた自分の飛燕に向かっていった。
　ピクシーと別れて船橋で待っているとレオナがザラとケイトを連れてやってきた。
「すまない、待たせた」
「来たか、案内頼むよ」
　彼女達をの後をついてラハマの病院へと向かう。ポロッカを見た後だとすごいこじんまりとした街に思える。ふと前を歩くケイトに目がいった。疑問に思ったことを彼女に聞いてみる。
「そういえばケイトの兄さんはなんで入院してるんだ？」
「アレンは以前、穴を研究するための飛行中にイサオから攻撃を受けた。その不時着時の怪我で現在下肢が不自由」

「治りそうにないのか？」
「完治の見込みは少ない」
感情が表に出ず淡々と俺質問に答える彼女だが心の中ではどう思っているのだろうか。
「そういえばイサオってのは名前はよく聞くけど実際はどんなやつだったんだ？」
その問い答えたのはザラだ。
「飄々としてて人の痛みが分からないような人だったわね。ただ戦闘機の腕前だけは飛び抜けてたわ」
そう言ったザラに続いてレオナが言った。
「私は彼に一度助けられて…そして一度墜とされた。…私を助けてくれた時の彼があんなことをする人だとは思えなかったが…」
彼に墜とされたことを話すレオナの顔はどこか悲しげだった。
「…彼に憧れてたのか？」
「憧れか…そうかもしれないな。あの背中に追いついてみたいと思ったのも確かだ」
「今はレオナが追いかけられる側だものね」
「追いかけられる側？」
「ああ、ユーカ達のことか」

聞いてみればレオナの孤児院の後輩がハルカゼという飛行隊を立ち上げたそうだ。そんなことを話しているうちに病院に着いた。
「それじゃあ私はここで。サイファーはケイトに着いてアレンのところへ行ってくれ」
「ああ、お大事に」
レオナとザラを受付に残してケイトに続いて入院棟の方に向かった。少し歩いて一階の部屋の前でケイトが扉を開ける。中には病院着を着た銀髪の男がベッドに腰掛けていた。
「おかえりケイト。そっちの男の人は誰だい？」
「サイファー、今オウニ商会に所属している戦闘機パイロット、穴の向こうから来た」
ケイトが俺のことを彼に紹介する。
「サイファーだ。よろしく」
右手を彼に差し出すと彼が握り返す。
「よろしくサイファー、穴の向こうから来たってのは本当なのかい？」
「本当だ、ただしユーハングから来たわけじゃないんだ」
そう言うと彼の目が輝いた。
「穴が別の世界に繋がったってことかい？それは興味深いね」
「そこでに率直に聞くが…穴はいつ開くかってのわかるか？」

結論が早く知りたかった。
「あいにくだけど以前イケスカ上空に開いてからは僕が知る限り開きそうな兆候は見られないね」
予想はしてたが残念な答えが帰ってきた。そこにアレンが付け加える。
「ただ、君が来たってことは開く可能性がゼロじゃないってことだ。もう少し気長にこっちでの生活を楽しんでもいいんじゃないかな」
「こっちの世界を楽しむか…」
それもいいかもしれない。いっそのことこの世界に骨を埋めるのも手だと少し思った。自由に空を飛んで気ままに仕事を受けながら生きていくのも悪くはない。そんな事を話している間にケイトが持っていたカバンから小さな瓶を取り出してアレンに渡した。
「それでもし良ければそっちの世界の話を聞いてみたいんだけどいいかな?」
「ああ、構わないよ」
そう答えるとアレンが酒瓶の蓋を開けてコップに注いで渡してくれた。
「病人が酒なんか飲んでいいのか?」
「僕は飲んだ方が治りが早いんだ。それじゃあ乾杯」
コップが心地いい音を立てて鳴った。それに口をつけて俺は何度目かの思い出話を

始めた。１時間程度話しているとレオナとザラがやってきた。
「アレン、元気そうだな」
「やあレオナ、ザラも久しぶり」
「レオナ、頭の傷は大丈夫だったか？」
「ああ検査の結果は異常なしだ。傷もほとんど塞がってる。あの時は助かったよ」
　レオナがそう言ってくれて安心した。彼女が傷つくと少し辛く感じた。それからしばらく彼女たちとアレンの話をして俺たちは病院を出た。あたりは暗くなっていた。それぞれが自分の家へと帰っていく。俺も一度ラハマで部屋でも借りるべきかもしれない。そう考えながら羽衣丸に戻った。
　ラハマに戻ってきてから３日が過ぎた。予定では今日ピクシーが帰ってくる予定だ。イサオの後継者を名乗る組織の襲撃はこの３日間無かった。俺は昼食後に娯楽室であいつが書いた旅行記を読んでいた。イヅルマ、カイチ、タネガシ、インノ、アレシマ、ドルハ。様々な土地をあいつが回っていたことが読んでるとわかる。
　今日はコトブキと訓練飛行をする予定だ。班長達がすでに機体を外へ搬出していた。そろそろ行くかと本を閉じて娯楽室を出ようとするとサイレンが鳴り響き始めた。何事かと思い窓から外を覗くと自警団が慌ただしく格納庫へ走っていく。
「こちらの呼びかけに応じない複数の大型機が接近！自警団は迎撃に上がれ！」

格納庫近くに止めてあった機体のエンジンがかけられる。

「これは訓練ではない！繰り返す！これは訓練ではない！」

サイレンが鳴っていたスピーカーから叫ぶ声が聞こえた。急いで船橋の出口に向けて走り出した。その辺の空賊がリスクを冒して街を襲うなんてことは滅多にない。まして普通の空賊が大型機を持つことはほとんどない。となるとおおよその想像はついた。数日前にサクラガオカ騎士団を攻撃した連中がこちらを狙いを定めたのだ。

地上に出ると自警団の九七式ががが空へと上がっていくのが見えた。それに続いて駐機位置から滑走路にラハマの切り札たる雷電が進入していく。俺よりも早く出たコトブキが既に機体に搭乗して始動準備を行なっていた。６機の隼のエンジンが次々始動していく。それを眺めながら自分の機体のエンジンを始動する。こういうスクランブル発進のために俺の機体は一人で始動できるようになっている。

ハンドルを回してカウルフラップを開く。時間があればマグネトーチェックなどもしたかったが省いた。今は空へ上がることが最優先だ。排気煙を見る限りエンジンは大丈夫そうだ。滑走路へコトブキの隼が進入していく。コトブキが上がっていく間に動翼のチェックをしておく。ステイックとラダーペダルを操作して三舵とも正常に動くことを確認する。

コトブキが全機滑走路から離れたのを見てスロットルを少し開いて前進する。尾輪

式はこういう時に前を見づらいの難点だ。滑走路へでる間にフラップを一度着陸位置まで出して正常稼働を確認する。滑走路の中央へ出た段階で停止せずに離陸位置にフラップをセットしてスロットルを押し込んでいく。機体が加速していき尾輪が地面から離れる。スティックを軽く引くと二本の主脚も地面から離れて空に機体が解き放たれる。脚をしまいフラップを格納して低空でフルスロットルで一気に加速させていく。２１５ｋｎまで加速したところでスティックを引いて３０度ほどの角度で上昇していく。Ｆ―１５のような推力はないから垂直上昇することは叶わない。だがイジツの機体の中で言えばこいつはよく登ってくれる機体だ。

１５０００ｆｔほどまで上昇してコトブキとラハマ自警団に追いついた。

＜＜すまない　遅くなった　ついに来ちまったみたいだな＞＞

コトブキの隼の左横に機体を進める。

＜＜どうやらそうみたいだ　何としてもラハマを守るぞ！＞＞

レオナがそう声を上げる。それに続いて聴き慣れてない声が聞こえた。

＜＜こちらラハマ自警団団長　敵の機数が確認できた　飛龍５機　機種は不明だが護衛戦闘機が１２機ほどだ＞＞

なかなかの大所帯だ。５機も爆撃機を飛ばすというのはこっちでは滅多に見ない。一方のこっちは隼が６機、九七式が７機、雷電と俺の紫電改が１機ずつの編成だ。

<<飛龍って前にアレシマを爆撃しようとしたやつだっけ?あれが5機かぁ…>>
<<なに　キリエビビってんの?>>
<<ビビってないし!!>>
<<二人とも集中して>>
　キリエに絡むチカをザラが止める。
<<富嶽ではないとはいえ5機…油断できませんわね>>
　こっちの火力を考えるとなかなかきつそうだった。それを踏まえてどう戦うかを言おうとした時ケイトが言った。
<<火力の高い雷電と紫電改は飛龍の攻撃に集中させるべき>>
　それを聞いて団長が言った。
<<よし　トキワギ!お前の雷電は彼の紫電改と爆撃機の攻撃に回ってくれ　それ以外の自警団は護衛機の気をそらす!>>
<<わかった!>>
　続いてレオナがコトブキに指示を出す。
<<私たちは隊を二つに分ける　私とエンマ　ケイトで飛龍を狙う　ザラとキリエとチカは戦闘機を頼む>>
<<了解!>>

戦法は決まった。だがやはり火力は心許ないと思った。せめてピクシーの飛燕がいてくれればまだマシだったかもしれない。そんなことを思いながらふと視線を動かすと左翼側に一機の機影が見えた。同時に無線から声が響く。

<<よう相棒　待たせたな>>

無線の発信元の機体が俺の機体に近づいてくる。だが飛燕ではなかった。俺と同じ２色の制空迷彩に塗った紫電改。右翼の中程から赤く塗装されている。前の飛燕よりも懐かしい彼のＦ―１５の塗装だった。

<<ピクシーお前…３日いなかったのはそれのためか>>

<<同じ機体の方が戦闘面でも整備面でも都合がいいだろう>>

そう言ってピクシーが俺の左後ろに着くのを見ると雪山の上で初めてこいつと編隊を組んだ日のことを思い出す。あの日も爆撃機の迎撃任務だった。

<<さて感傷に浸るのは終わった後にするか>>

<<そうだな　指示は頼んだぜサイファー　あんたがガルム１だ>>

懐かしいセリフを言いやがると思ってるとレオナが敵機発見を報じた。

<<１１時方向敵機！行くぞ！コトブキ飛行隊　一機入魂！>>

<<はい！>>

コトブキの隼が左へ旋回していって自警団がそれに続く。最後に俺たちが旋回を始

める。
<<お財布握りしめて待ってろよ>>
　左へ旋回しつつ俺とピクシーは上昇を始めた。コンバットボックスを組んだ爆撃機の編隊に突入するなら低速では狙い撃ちにされる。幸い今回の爆撃隊はそれほど高高度を飛んでるわけではないので上は簡単に取れる。
<<トキワギ　お前はあの二機の紫電改についていけ>>
<<わかった！>>
　雷電のパイロットがしわがれた声で返事をして俺たちの後ろに接近する。上昇ながら軽くロールして下を見ると敵機編隊がだんだんと大きく見えてきた。
<<向こうもこちらに気づいたみたいだ>>
　レオナがそう言うと同時に護衛戦闘機がこちらに向けて上昇を開始する。
<<そう見たいね　敵は五式と三式みたいね>>
　ザラが機種を報告する。どちらもなかなかいい機体だ。油断はできない。
<<よし　作戦通り行くよ　ザラたちは援護を頼む>>
　敵編隊より２０００ｆｔほど上でスティックを横に倒してロールする。機体が逆さになったところでスティックを引いて敵編隊へと飛び込んでいく。
　目の前から数機の飛燕がこちらに向けて上昇してきていたがザラの編隊が機銃をば

らまいて進路を妨害する。降下で速度が乗ってるこちらに比べて敵は上昇で速度が落ち込んでいた。飛んできた曳光弾を回避しようと旋回したがその影響で余計に速度が落ち込んだ。

この隙を見逃すコトブキではない。キリエが動きが鈍くなった敵の進行方向へ機銃を放つ。曳光弾がよろめいてる飛燕の主翼とラジエーターに綺麗に吸い込まれていった。タンクから火を吐いて飛燕が落ちていく。

よく見ればこいつらの機体には以前に羽衣丸を襲った零戦と同じ帯状のマーキングが主翼に施されていた。

＜＜星一つ！＞＞

キリエの声が無線に響く。本日１機目の撃墜は彼女に取られてしまった。それを横目に見ながら降下して敵爆撃機に肉薄していく。編隊を組んだ飛龍の対空機銃が曳光弾を吐いて弾幕を形成する。だがベルカ戦争時に飛んだグラティサント要塞の対空砲火に比べれば緩いものだ。臆せず弾幕に飛び込んで飛び込む。

＜＜レオナ　俺は編隊長機を狙う　編隊が崩れたら飛び込め＞＞

＜＜分かった＞＞

短くレオナと交信する。

いけるか…とそう呟きながら編隊の先頭を飛ぶ飛龍に狙いを定める。２００ｙｄま

で接近してスロットルについたトリガーレバーを引いた。主翼から四筋の光が放たれる。飛んで行った弾丸が飛龍の燃料タンクを貫いて炸裂する。主翼が根元から折れて機体が姿勢を崩して墜ちていく。

<<ガルム1が敵機撃墜!>>

飛龍編隊の下を過ぎたところでピクシーが声を上げた。編隊長機が墜ちたことで編隊が姿勢を乱した。弾幕が一時薄くなったところにレオナ達が飛び込んで攻撃を開始する。一機の飛龍の左翼エンジンに命中して火を噴く。俺たちより小口径の機銃でよくやるものだと感心した。

一機遅れていたトキワギの雷電がまた別の飛龍に機銃を撃ち込んだ。だがこちらは命中した場所と数が悪くわずかに敵機の速度が低下する程度だ。

次の攻撃に移るためにスティックを引いて機首を上げていく。ここで焦って急に引くと速度を失って不利になる。ジワリと操縦桿を動かして飛龍の下から攻撃するように体勢を整えた。攻撃を受けづらいベストポジションだ。あとは近づいて撃つだけと思ったその時だ。

<<サイファー!後ろに着いてるぞ!>>

ピクシーの声が聞こえて振り返るとラハマの九七式をやり過ごした五式戦が俺の後ろを取ろうと高速で近づいてきてた。

＜＜ピクシー！ケツは頼んだ！＞＞

この体勢まで来たからには飛龍に一撃加えたい。ピクシーにケツに着いた五式戦の相手を頼むことにした。

＜＜ウィルコ！任せておけ＞＞

左後方に着いてきてたピクシーが左へブレイクする。それを見届けてから眼前の飛龍へのサイティングに集中する。後ろはピクシーに任せて意識も向けなかった。狙うのは翼の付け根からエンジンの辺りだ。降下の時についた速度とエンジンのパワーで一気に駆け上っていく。２００ｙｄでトリガーを引いた。右翼エンジンに命中して一気に炎が立ち昇る。そのまま薄くなった弾幕の隙間を潜って飛龍編隊の上側から一度離脱する。

振り返ると左右の推力バランスが崩れた飛龍が緩やかに右に傾きつつ爆弾を投棄した。そのうちポロポロと搭乗員が飛び降りていった。

＜＜こちらサイファー　爆撃機を撃墜＞＞

コトブキの撃墜と合わせればこれで半分、ようやく折り返し地点だ。振り返ると俺を追いかけてきてた五式戦をピクシーが翼を折って撃墜したのが見えた。ピクシーが無線で報告する。

＜＜こちらピクシー　敵機撃墜＞＞

その直後にトキワギからの無線が聞こえた。
<<クソ！後ろに着かれちまった！>>
見回してみると雷電の後ろに五式戦と飛燕が張り付いて射撃の機会をうかがっていた。
<<待ってなおっさん！>>
援護を買って出たのはチカだ。機体を加速させてトキワギの後ろに着いてる飛燕に一気に近づく。気づいた飛燕が急旋回で躱そうとするがコトブキで一番ハイGターンが出来る彼女には敵わない。急旋回で速度を失った飛燕にチカの隼が急接近する。衝突寸前のところで飛燕のエンジンを撃ち抜いた。エンジンから出火した飛燕が錐揉みを起こして重力に引かれて地面に吸い寄せられる。
<<よし！>>
もう一機の五式戦の相手はザラだ。降下して雷電と五式戦の間に機体を滑り込ませた。五式戦のパイロットがそれに気を取られた隙にトキワギが機体を旋回させて五式戦の射線から抜け出した。
雷電を見失った五式戦はザラに狙いを変える。だが一瞬意識を雷電側に向けていた隙にザラはバレルロールで背後を取り返し始めていた。慌てた五式戦だがすでに遅かった。ザラの隼の機銃から放たれた弾丸が五式戦の翼に吸い込まれた。たちまち炎

が上がりコントロールを失い地面へと墜ちていく。

<<星ひとーつ>>

コトブキの援護で二機から逃れたトキワギが先ほど仕留め損なった飛龍へ向かう。

<<慌てるなトキワギ！訓練通りにやるんだ！>>

<<分かってる！>>

先ほどよりもしっかりとした機体姿勢でトキワギが射撃位置についた。絶好のポジションだ。機銃弾が速度の落ちていた飛龍を襲う。明らかに撃ちすぎで左右の燃料タンクに弾が当たり両翼から火を噴いて飛龍がコントロールを失った。これで残りは２機。

残りの飛龍を攻撃しようとした時また後ろに敵機が着こうとした。今度は飛燕だ。自動空戦フラップを作動させる位置にフラップレバーを操作して格闘戦に持ち込む。

何度か左右への旋回を行うと敵機が距離を詰めてきた。ある程度詰まったところの左への切り返しの時にラダーペダルを左に蹴りながら左手前にスティックを引いてスナップロールして２７０度ロールして右に切り返す。同じ機動を描いていた敵機と機動がずれてシザースに入る。操縦桿を強めに引き相手よりも相手を前に押し出すように内側へ入り込む。２度ほど交差したところで敵が絶好の位置に来た。交差する一瞬にトリガーを引くと敵機がバラバラに砕けて墜ちていった。

爆撃機の数が減るたびに残りの爆撃機を守ろうとする敵の攻撃が激しさを増した。ここからが難しいところだが俺たちなら出来る。いつ敵機に絡まれてもいいようにフラップは自動位置のままにした。飛龍へ機首を向けようとすると既にピクシーが一機を撃墜していた。

<<爆弾は大事に抱えたまま墜ちてくれ>>

そう敵を皮肉るピクシーの声が聞こえた。

<<ふう…これであと一機ですわね>>

エンマがため息をつきながら言った。

<<ようやくってところね　でも油断しちゃダメよ>>

流石に敵弾幕と戦闘機を相手取るのは疲れがたまる。

<<もう一息だ　油断しないで行くぞ！>>

レオナが隊員たちの気を引き締める。ラハマまではあと２０マイルほどだ。

<<サイファー　私たちはもう弾が残り少ない　最後の飛龍はそちらの隊に任せる>>

レオナから飛龍攻撃のバトンを渡される。

<<了解だ　ピクシー行くぞ！>>

<<ウィルコ！終わらせよう！>>

再びエンジンをフルスロットルにして上昇を開始する。その俺たちの後ろを追う戦闘機はコトブキが引き受けてくれた。

＜＜ピクシー　背中はあいつらに任せて俺たちは飛龍に集中するぞ＞＞

＜＜ピクシー了解　前方に火力を集中させる＞＞

飛龍の左上方２０００ｆｔ上空まで上がったところでロールしてダイブを開始。二機で一気に飛龍の懐へ一気に飛び込む。サイトから敵機がはみ出るほどの距離でトリガーを引いた。翼に弾が当たって弾けるのがすぐ近くに見える。そのまま飛龍の脇を二人で下に駆け抜けた。振り返ると飛龍の両翼とエンジンから出火してるのが見えた。すぐにパイロット達が機体から飛び降り始め、コントロールを失って機体が大地に引き寄せられていく。

＜＜こちらサイファー　最後の爆撃機を撃墜した！＞＞

＜＜こちらラハマ管制塔　こちらでも大型機の機影の消失を確認した＞＞

＜＜こちらレオナ　敵機離脱を確認　深追い無用＞＞

敵戦闘機隊が編隊を組む暇もなく離脱していく。こちらもコトブキ飛行隊を基点に編隊を組み直した。コトブキと俺たちは無事だったが自警団の九七式は４機ほど居なかった。そこに管制塔から連絡が入った。

＜＜撃墜された自警団員は全員無事だ　今残っていた自警団員で救助活動にあたって

る>>

その言葉を聞いた九七式の自警団員が歓声を上げた。

<<帰ったら墜ちた連中に俺の活躍をたっぷり聞かせてやる！>>

トキワギがそう言うとチカがからかった。

<<おっさん一機しか墜としてないじゃん！>>

<<それを言われるときついぜチカ姐さん>>

それを聞いて団長が言った。

<<だがいい活躍だったぞトキワギ　聞かせたら墜ちた連中も気が晴れるだろう>>

それを聞いてトキワギが大きく笑った。

<<流石に疲れましたわね　早く戻ってシャワーでも浴びたいですわ>>

エンマに続いてザラも口を開いた。

<<同感ね　冷たいビールをキューっといきたいわ>>

<<ザラが空戦後にビールを飲む確率は９７％　残りの３％は羽衣丸のビールサーバー故障のため>>

<<ザラってそんなに呑んでたんだね…>>

<<それでよくその体型維持できるよね　キリエのパンケーキ腹より締まってんじゃん！>>

＜＜私そんなに太ってないし!!＞＞

コトブキたちがいつものように会話に花を咲かせている。そんな中レオナだけが浮かなそうだった。ザラがレオナに呼びかける。

＜＜レオナ　どうしたの？＞＞

＜＜ん…いやなんでもない＞＞

＜＜前にも言ったでしょ　もっと相談してって　ビール片手に聞くわよ＞＞

＜＜別に悩んでる訳じゃない　少し疲れただけだよ＞＞

＜＜じゃあビールだけでも付き合って　ね？＞＞

＜＜ああ…＞＞

誘いには応じたレオナだったがやはり浮かない声をしていた。彼女の悩みを聞いてみたいとそんなことを考えながら俺たちはラハマへの帰路へ着いた。

第六章　Ｍａｓｋ

ラハマ防衛戦から1日が経った。俺は娯楽室で頭痛に悩まされている。あの戦いの晩、戦闘参加者がラハマ町長に呼ばれて小さな祝勝会のようなものが開かれた。それだけなら良かったのだが迂闊にザラとピクシーのペースに付き合ってしまったのがまずかった。付き合った結果が今のこの状態だ。特別酒に弱いわけではなかったがあの二人が飲む量はおかしかった。

動く気もせずソファに寝そべり天井を見上げていると誰かが入ってきた。首だけ動かして入口側に視線を移すとそこに深妙な顔をしたレオナがいた。昨日の空戦後からずっとあの感じだ。昨晩の祝勝会にも参加はしてたが一人浮かない顔をしていた。何か考え込んでるようでこちらにも気づいていないようだ。

「よう隊長さん…浮かない顔してるが大丈夫か?」

頭痛に耐えながら別なソファに座ろうとしていたレオナに声をかけた。

「いたのかサイファー。そっちの方がひどい顔だが大丈夫か?」

「あんまり大丈夫じゃない…あの副隊長たちに付き合ってたら肝臓がいくらあっても足りなさそうだ」

「ピクシーがどれだけ強いのかは知らないけどザラのペースに付き合うのは無謀だよ」
そう言ってレオナが水差しから水をコップに入れて差し出した。受け取ろうとして起き上がった時に酷い痛みが頭に走った。なんとか受け取ったところで彼女が言った。
「そんなに酷いなら部屋に戻って寝てたらどうだ？」
そう言う彼女に受け取った水を飲みながら俺はここにいる理由を説明した。
「そうしてたいのは山々なんだが相方のいびきがうるさくてかえって頭に響いてな。それにこっちの方が外の景色が見えて楽だ」
「それなら構わないが…明日からアレシマ行きの仕事に差し支えないようにな」
「ああ…なるべく頑張るよ。それで？そっちはどうして浮かない顔してたんだ？」
話を俺のことからレオナのことに切り替える。
「大したことではないんだ。気にしないでくれていい」
彼女がそう言って話を切り上げようとしたが俺が食い下がる。
「悩んだまま飛ぶとロクなことにならない。俺に話すのが嫌だったらザラに話してみたらどうだ？」
俺がそう言うと彼女はため息をついてから諦めたように口を開いた。
「少し不安なんだ。オウニ商会とコトブキだけでなくラハマも狙われてる以上私たちの不在時にまたラハマが襲われるかもしれない。もしもホームに被害が出たらと考える

と少しな…」

レオナが窓の外を眺めながらそう言った。空賊ですら普通は都市を狙わない。そんなこの世界では都市爆撃なんてことは普通起きない。

遠くを眺める彼女に気休めでもいいからと思い思いついたことを言った。

「でももうラハマは狙われないかもしれない。昨日の迎撃で結構な打撃は与えたしな」

それに続けてさらに言った。

「それにラハマを爆撃で焼け野原にするよりもコトブキと羽衣丸を仕留める方が向こうにとっても箔がついていいはずだ。いつも通り仕事してればきっとこっちを優先的に狙ってくるはずだ」

「たしかにそうかもしれないが…」

「あまり深く悩んでも仕方ないさ」

そう言ってコップの水を飲み干して再びソファに横になった。少し話題を変えて彼女に聞いてみた。

「それだけ深く悩むってことは相当ホームに思い入れがあるんだな。ポロッカでもお土産を買ってたよな」

厳しかった彼女の顔が少し和らいだ。

「私がこうして空を飛ぶようになったのはホームへの恩返しがしたかったからだ。最初

に院長先生にパイロットになると伝えた時は猛反対されたよ」
　そう語る彼女の顔はどことなく誇らしげに見えた。
「自分で何のために飛ぶか選べるってのは良いよな…」
　自由に飛べるこの世界のパイロット達が心底羨ましかった。その気になれば思いのままに空を飛ぶことができるのは上の命令を受けて飛んでいた俺からすれば天国のようだった。そんなことを思ってる時にレオナが俺に聞いてきた。
「そっちの空はこちらの空とは違うのか？」
「全然違うよ。国同士の戦争もあったし…空を飛ぶのにも制限は山ほどあった」
「まるでイジツと違うんだな」
「だからこっちにきた時は心底驚いたよ。当たり前のように戦闘機が自家用車みたいに扱われてるからな」
「イジツでは陸路での移動はほとんど無理だからね。元の世界に戻るまではこの生活を楽しむのもいいんじゃないか？…さて、そろそろ行くよ」
　レオナがそう言ってソファから立ち上がって言った。
「少し気が楽になったよ。ありがとう」
「いいってことさ。俺も話してたら少しは楽になってきた。こっちこそありがとう」
　その会話を最後にレオナが娯楽室から出ていった。彼女の悩みが少しでも減ってく

れればいい。心に悩みを抱えながら飛ぶとろくなことにならない。もし彼女が墜ちれば他のコトブキの子達にも悪影響だ。そうなれば俺たちガルム隊にも負担がかかることになる。

ただそう考える一方でレオナが悩んで暗い顔をしているのも見ていたくなかった。何故かは分からないが彼女と遭難したあの時から彼女を見るたびそういう思いが浮かぶようになっていた。

なんでこんな風なことを考えてるんだろうと思いソファに寝そべりながら天井を見上げているとまた誰かが部屋に入ってきた。誰かを確認する前にその誰かが俺に声をかけてきた。声で誰かがわかる。俺をこんな二日酔いにした妖精だ。

「よう、部屋にいないから探してみればこんなとこで寝てたのか」

悪びれもなくそう言ってくる相棒に悪態を吐く。

「うるせえ、お前のいびきがうるさくて頭に響いて寝られなかったんだよ」

「そいつは悪かったな。空では無敵の鬼神も相変わらず酒は苦手なんだな」

人のことを言えた義理じゃないが昔から変わらず皮肉っぽいやつだ。余計に頭が痛くなる。その上ニヤニヤとこいつらしくない笑みを浮かべてた。

「なにニヤついてんだよ片羽」

笑みを浮かべたままピクシーが言った。

「いやなに、天下の鬼神様も随分喋る様になったなと思ってな」
「余計なお世話だ。用事がないならさっさとどっか行け」
　昨日の晩のこともあってやたらこいつの態度にイライラしていた。少しだけアヴァロンでとどめを刺しておけばよかったかもしれないとも思っていた。そんな気持ちを落ち付けようと再びコップに水を注いで口をつけた。その時ピクシーが言った。
「ああ、じゃあ一ついいか相棒。お前あの子に惚れてるだろう」
　その言葉に含んでいた水を盛大に口から吹き出した。こいつに向かって。
「うおっ!?おい汚いぞ相棒!!」
　濡れた顔を拭いながらピクシーが文句を言ってきたがそれどころじゃない。咳き込みながらこいつが言ったことを頭の中でもう一度流した。余計に訳がわからない。
「今なんて言った…？」
　顔を拭い終わったピクシーが言った。
「お前、あいつに惚れてるだろと言ったんだ」
「俺が…？レオナに？」
　こいつの口からそんなことが飛び出てきたこともあってそれ以上の言葉が出ない。
「さっきの会話を聞く限りそうとしか思えないがな」
「聞いてやがったのか…」

「で？どうなんだ。あの子を気に入ってるのか？」
　言葉のない時間が続く。すぐには答えが出せなかった。ピクシーがニヤつきながらこちらを見ている。しばらくしてやっと答えを口に出した。
「多分…いやよく分からない…なんというか…ほっとけないというか…その…いい奴だなとは思う…」
　自分自身でも聞こえないような小さな声でそう口に出す。恥ずかしさが増していく。この野郎にそんなことを打ち明ける日が来るとは思ってなかった。できることならこういうこを打ち明ける相手はＰＪあたりにしておきたかった。
「それで？これからの方策はあるのか相棒」
　変わらずニヤニヤしたままのピクシーがさらに聞いてきた。
「なんでそんなに食いついてくるんだよ…別に策なんかないぞ…色恋沙汰なんて今まで生きてきてしたことないしな…」
「明日からアレシマだろう。せっかくなんだからあっちに着いたら食事にでも誘ってみたらどうだ？」
　そうピクシーが提案してきた。本当になぜこいつはこんなことを提案しているのだろう。
「いやいきなり誘うのもな…もう少しこう会話をしてから…」

「あの隊長は多分そういうアプローチは通用しないと思うぞ。のんびりしてると別な奴にあいつを落とされるぞ?」

俺を焦らせるようにピクシーが言った。そうは言われても突然のことで考えは全然まとまらない。このままこの話題を続けるのはきつかった。

「……アレシマに着くまでに少し考えておくよ。……また頭が痛くなってきた…」

そう言って無理矢理会話を切った。今度の頭痛は飲み過ぎのせいなのかこの会話のせいなのか分からなかった。娯楽室から出て自室に戻ろうとする前に気になったことをピクシーに聞いてみた。

「そういやなんでお前は俺の色恋沙汰に首突っ込もうとしてるんだ?」

帰ってきた答えは意外なものだった。

「今執筆中の本のネタになりそうだったからな。もし上手くいったら使わせてもらう」

悪びれもせずそう言い放ったピクシーの頭を引っ叩いてから娯楽室を後にする。やっぱりこいつはアヴァロンダムで仕留めておくべきだったかもしれない。

夕方になってやっと頭の痛みが取れてきたのでラハマの街をあてもなくぶらついていた。観光都市でもないこの街には見所と言える場所は特になかった。だがこの街を歩いていれば必ず見えるものがある。この街の経済の源、シオヤマだ。俺はちょうどその麓のあたりに今いた。

ふと見上げてみると誰かがシオヤマの上にいるのが見えた。目を凝らして見てみるとコトブキ飛行隊の一人、キリエだった。少女一人であんなところで何をしているのだろうか。そんなことが気になって俺もシオヤマの上へ歩を進めた。道を登って行き平らな頂上へと辿り着いた。夕陽が差す頂上には俺とキリエだけが立っていた。

彼女が足元にある石に向かって手を合わせている。誰かの墓なのだろうかと思いながら祈りを捧げる彼女に近づいていく。ある程度近づいたところでキリエが振り向いて俺に気づいた。

「あれ？サイファー？」

「よお」

軽く返事を返してキリエの横までやって来た。彼女が不思議そうな顔でこちらを見ている。

「どうしたの？こんなところに来て」

「散歩してたら下からキリエの姿が見えたから気になってな。知り合いか誰かのお墓か？」

夕陽が眩しいからかそれとも思い出に浸っているからか目を細めながら彼女が言った。

「うん。サブジーの」

「サブジー？」
「私が小さい頃にこの辺に住んでたおじいちゃん。私がよく遊びに押しかけてたんだ」
　石を眺めながらキリエがそう呟いた。
「無愛想で偏屈なおじいちゃんだったけど小さい私を零戦に乗せて飛んでくれて…でも最後は住んでた小屋を燃やしてどっか行っちゃったんだ」
　寂しそうにキリエが語る。
「何か事情があったのか？」
　彼女に思ったことを聞いてみた。わざわざ戦闘機に乗せてあげるほどの関係だったのに失踪した理由が気になった。
「サブジーはユーハングの人だったらしくてね、それに目をつけたイサオ達に追われてたみたい。それで別なところへ逃げたけどまた見つかっちゃったらしくて…結局最後はイサオに墜とされちゃったみたい」
「墜とされたって言うのは本当なのか？」
「本当だと思う。墜としたイサオ本人から聞いたんだもん」
　大切な人を自分が殺したと敵から伝えられるのは相当辛いことだと思うのだがさらりと彼女は言った。
「悪いな…話しづらいこと聞いちゃって」

「いいよ、もう昔の話だし」
「そうか…邪魔して悪かったな、それじゃ」
　別れの挨拶をしてその場を去ろうとしたところでキリエから呼び止められた。
「サイファーはどうして空を飛ぼうと思ったの？」
「空を飛ぶきっかけか？昔地上で戦ってた時に空の連中に助けられたからだよ。俺もあんな風に誰かを助けられるようになってみたかったんだ」
　口に出してみるととにかく懐かしく感じる。もう遥か前のように感じていた。
「誰かのためか～。レオナと似てるね」
　キリエの口からその名が出て不意にドキッとして鼓動が速くなる。昼前にピクシーとあんな話をしたせいか。そんな俺を見てキリエが言った。
「どうしたの？顔赤いよ？」
「夕陽のせいじゃないか？」
　正直苦しいと思う言い訳だったがキリエは大して気にもせずにその言葉を信じてくれた。レオナの話から逸らすために話を無理矢理元に戻した。
「どこまで話したっけ…そうだ、空の上から誰かを助けてみたかったんだ。それはこっちへ来てからも変わらない」
　正直なところこちらの世界へ来てからの方が誰かのために飛べてるような気がした。

この世界では都市爆撃を命じられることもない。略奪をするような悪人を相手にするだけでいいのは心が多少楽だった。そんなことを考えているとキリエが言った。

「もしどこかに穴が開いたらやっぱり帰るの？」

「……多分な」

曖昧な答えを彼女に返す。帰りたいと思っていたが改めて聞かれると少し迷いが生じた。この世界でずっと好きに飛んでいた方が幸せなんじゃないか。元の世界に戻ってもまた戦争の駒として扱われるだけなのではないだろうかとそう思い始めていた。

レオナに悩んだまま飛んだらロクなことにならないと言ったばかりなのにこうして自分が悩んでいるいるのは矛盾してるなと自分でも少し呆れていた。

「キリエ、邪魔して悪かったな。明日からまた宜しく頼む」

そう言い残してシオヤマを降りた。頭の中には先程キリエから聞かれた事がぐるぐると回っている。もし穴が開いた場合どうするべきなのだろうか。

大きく息を吐いて気持ちを切り替える。今はこれについて考えるのはやめよう。レオナに言ったように悩みはロクな自体を招かない。だがレオナのことを一瞬考えた時に昼のピクシーの提案が頭に浮かんできた。他人に指摘できないくらい悩みだらけだなと少し笑えてくる。

何はともあれ明日からアレシマ行きの仕事だ。今の自分にできることをやる。後の

ことは後で考えよう。そう思いながら羽衣丸への帰路へ着いた。

次の日の昼前に羽衣丸はアレシマへ向けて無事離陸した。今回はラハマで取れた岩塩が積荷だった。それと同時にアレシマで今回自由博愛連合の過激派の標的にされている都市、組織の対策会議が開かれることになっていた。聞かされた話では航行途中でガドールのユーリア議員が乗る船と合流するそうだ。その為今回はマダムルゥルゥも羽衣丸に乗っている。事前情報では今回使用する航路に最近空賊が現れたという報告はなかったが、いつまたラハマを襲った過激派が襲ってくるか分からなかった。そのせいか一見いつもと変わらないように見えるコトブキ達もいつも以上に気を張っているように見えた。

ラハマでの迎撃戦で損害はかなり与えたはずだが過激派連中の総戦力が分からない以上安心は出来なかった。もしも奴らが前回以上の数で来れば流石に羽衣丸を無傷で守りきるのは難しいだろう。

昼をすぎてピクシーを連れてサルーンに向かった。扉を開けるといつもの位置にコトブキが座って食事を取っている。もうだいぶ見慣れた光景だ。俺たちもいつものテーブルに着いてリリコに食事を注文する。

料理が来るまでの間にザラと談笑しているレオナに目が行った。昨日ピクシーが言っていたことがまた頭の中に浮かんでくる。そんな時にピクシーが俺の視線に気づ

いた。笑みを浮かべながら小声で俺に問いかける。
「おいサイファー、結局どうするんだ？」
　その問いに俺も小声で答える。
「アレシマに着いてから決めるって言っただろ…仕事に集中しろ」
　ボソボソと二人でそう話してると気になったのかチカが話しかけてきた。
「おっさんたち二人で何コソコソ話してんの？」
　そう聞かれたピクシーがさっきの事を喋るんじゃないかと少し心配になったがこいつは適当なことを言って返した。
「いやなに、今日はパンケーキの嬢ちゃんが何枚パンケーキを食べるかって賭けをしようとこいつに持ちかけてたところだ」
　チカの横に座ってそれを聞いていたキリエが立ち上がって大声を上げる。
「はぁ!?何勝手に人を賭けの対象にしてんのさ！」
　立ち上がったキリエを諌めるようにエンマが言った。
「落ち着きなさいキリエ。……私もその賭けに乗ってもよろしくて？」
「何言ってんのエンマ!?」
「なら私も参加しようかしら」
　ザラまでもがピクシーが冗談で言った賭けに参加しようとする。

「二人ともキリエをあまりからかうな、キリエも落ち着け」
そうレオナが軽くはにかみながら言った時に船内にサイレンが鳴り響いた。コトブキの目つきが仕事人のそれに変わり格納庫へ駆け出していく。俺とピクシーもそれに続いて走り出した。
格納庫へ着いて愛機のコクピットへと飛び込む。もうこのレシプロ機のコクピットにも慣れてきた。始動準備をこなしているとオペレーターのアディから無線が入ってくる。
<<不明機　高速で接近中　高度２０００クーリル　速度２００キロクーリル　機数５>>
それを聞いてチカが言った。
<<５機？　少ないね！楽勝じゃん！>>
<<チカ　油断するな！　以前の黒い疾風のような例もある>>
チカをレオナが諌める。それに続いてケイトが言った。
<<少数機で攻撃を仕掛けてくる以上　熟練のパイロットの可能性が高い>>
<<空賊なら叩き落とすだけですわ>>
そんな会話をしながらエンジンを始動してコトブキが滑走路へタキシングし始める。
<<コトブキ飛行隊　発進！>>

主操縦士のアンナの号令でコトブキ飛行隊が滑走路を駆けて空中に飛び出す。全機が発艦した後に離陸準備を終えた俺とピクシーの機体が滑走路に進入する。滑走路上で一時停止をして発進の号令を待つ。少しして号令がかかる。

＜＜ガルム隊　発進！＞＞

右にラダーペダルを踏みながらスロットルを徐々に開けていく。翼が風を切りテールが浮き上がる。滑走路端から飛び出た瞬間機体が下に落ち込む。落ちこんだところでランディングギアを格納してフラップレバーを空戦フラップの位置にセットする。

緩い右旋回をしながら後から離陸したピクシーと編隊を組みつつコトブキ飛行隊の後を追う。速度では彼女達の隼より俺たちの紫電改の方が速いのですぐに追いついた。２０ｎｍほど飛んだところでザラから無線が入ってくる。コトブキでは彼女が一番目がいい。

＜＜見えたわ　機体は多分…飛燕かしら＞＞

＜＜この間ラハマ襲った奴らの残りかな？＞＞

キリエが呟く。キリエが言う通り先日のラハマ爆撃隊の飛燕の可能性もあった。正面方向に目を凝らすと細身のシルエットが見えた。５機でシェブロン編隊を組んで正面から向かってきている。たしかに飛燕のようだった。

敵機との距離が１ｎｍに近づいたところで先に彼らが動いた。編隊でバレルロール

して高度を下げて加速して向かってくる。その動きに見覚えがあった。頭の中にある今までの敵味方の機動からその動きを思い出そうとする。だがその機動はイジツで見たものではなかった。この世界に来る前に見た機動だ。

<<コトブキ　こいつらは速い！用心しろ！行くぞピクシー！>>

<<ウィルコ>>

無線でコトブキにそう伝える。まだ有効射程の外だったが敵機がヘッドオンの状態で機銃を撃ってくる。

<<２機ずつに別れるぞ！私とザラで敵を引きつける！キリエとエンマは私たちに食らいついたのを狙え　チカとケイトはその援護だ！>>

レオナがコトブキに指示を出して散開する。

俺とピクシーはコトブキの散開を支援するためにヘッドオンの状態で機銃を放つ。当てることは考えずに敵を分散させられればよかった。だが敵はこちらの機銃に怯まずに高速で飛び込んできた。機体を６０度ほどロールさせて編隊の中央にいる敵機とすれ違う。すれ違う一瞬に敵機に目を向ける。敵機は飛燕ではなかった。イジツでは見たことがないがその機体には見覚えがあった。『Ｂｆ１０９Ｇ』歴史の教科書でかつてベルカ空軍が使っていたと記されていた。機体には灰色の単色塗装に尾翼にはスズメバチを模したエンブレム、主翼には自由博愛連合の過激派がつけている帯状のマーク

が施されていた。主翼のマーク以外はかつて見たことのある塗装だ。すれ違う瞬間に敵パイロットと目があった。

＜＜飛燕じゃない!?なんだこの機体！＞＞

無線からキリエの大声が聞こえる。

＜＜おそらくメッサーシュミットＢｆ１０９　かつてユーハングの同盟国が使用していた機体　だがあの型は資料でも見たことがない＞＞

ケイトがキリエの疑問に答える。その言葉からどうやら俺の世界の機体とユーハングのいた世界の機体は同じものはあるようだと分かったが今はそれどころではない。

＜＜また速いやつかよ！戦いづらいっての！＞＞

チカが文句を言った。コトブキの隼では速度性能はかなり劣っていた。なんとか俺たちがあいつらを牽制しないといけない。

＜＜ピクシー　後ろを頼む　２機でかかるぞ＞＞

＜＜分かった　任せておけ＞＞

スロットルを全開にし左に旋回してこちらの後方を通り過ぎた敵機を追う。ピクシーが同じようについてくる。敵機は先ほどの降下でついた速度活かして上昇を始める。コトブキはレオナとザラを残して一度敵機から離れて上昇をしている。俺たちは敵機を追いながら上昇を開始する。１７０００ｆｔまで上昇したところで敵機がロー

ルして降下を開始する。おそらくその下を飛ぶレオナ達が狙いだ。あと少し高度が欲しかったが一度水平飛行に移って速度を稼ぎながら敵機との距離を詰める。緩降下しながら敵機の編隊が下にいるレオナとザラに機銃を放つ。

＜＜ザラ　くるぞ！＞＞

＜＜分かってるわ！＞＞

二人がタイミングを合わせて同時に左にブレイクする。曳光弾が空を切る。二人の下に入らないように再び５機編隊で敵機が上昇を始める。若干だが３番機以下の３機は追従が遅れていた。その上昇の隙を狙って俺たちは降下を開始する。

この上下に動く機動はベルカ空軍の基本機動だ。ベルカ戦争で何度も目にしてきた。この降下での攻撃で彼らを仕留められるとは思っていなかった。俺たちの攻撃に対してどう対処するかを確かめたかった。

降下で距離を詰めて３００ｙｄほどで機銃を放つ。この距離では命中は期待しない。敵の近くを曳光弾が通り過ぎるタイミングで敵機が散開する。こちらに１番機と２番機の２機が機首を向けて機銃を放つ。残りの３機は緩く右旋回しながら上昇を継続する。バレルロールして弾を回避しながら敵機の動きを観察する。２機は再び硬貨を開始して下へ逃げようとしていた。それをピクシーと二人追いかける。

上へ逃げた３機を上空で待っていたキリエとエンマが攻撃する。敵はうまくエルロ

ンロール中にラダーを踏み込んで進行方向を惑わせて回避する。いつもの空賊ならキリエとエンマが撃った段階で編隊を解いてしまうだろうがこいつらはエルロンロール後にしっかりと編隊を組み直していた。１番機と２番機との相性は悪いようだがやはりこいつらは手練れだ。

降下した２機を追いかけると敵機がゆるい右旋回をし始めた。その予測進路を狙って距離はあるが再び機銃を放つ。俺の狙いは１番機だ。

＜＜ピクシーは２番機を狙ってくれ＞＞

＜＜了解だ＞＞

その呼びかけに応じてピクシーは２番機の進路に機銃を撃った。だがこいつらは多少ロールしたものの編隊は崩さずに左旋回に移行した。視線を外して上にいる３機を見ると敵機がこちらを狙って降下してきて射撃しようとしていた。この戦法も見覚えがある。だが射撃しようとしていた所に最後まで待機していたチカとケイトが飛び込んで機銃を放った。俺たちに気を取られていた敵機に機銃弾が命中するが急所には当たらなかったようで機体に穴を開けただけに留まったようだ。

＜＜あいつら燃えない！＞＞

＜＜Ｂｆ１０９の燃料タンクは胴体のみ　主翼への被弾では炎上しない＞＞

＜＜忌々しい相手ですわね＞＞

<<でもこいつら羽衣丸に向かおうとはしてないよね>>
　被弾した敵機が体勢を立て直すために降下でコトブキの隼を引き離す。上の3機をコトブキに任せて前方の2機を追う。旋回戦に持ち込めればこちらが有利だ。
　その時無線から聞きなれない声が聞こえた。オープンチャンネルで呼びかけてきているようだ。
<<その塗装　円卓の鬼神と片羽の妖精か？なぜ貴様らがここにいる>>
　ピクシーくらいしか呼ばないその二つ名を呼ぶということはこいつらは間違いなく俺たちの世界の人間だ。その声からは憎しみが感じ取られた。今度は俺があいつらの正体を聞こうとした。
<<灰色のスズメバチマークに囮になった第一編隊を餌に第二編隊が攻撃を仕掛ける戦法　あんたらグラオヴェスペ隊だろう？お前達こそなぜここにいるんだよ>>
　グラオヴェスペ隊はかつて円卓で俺たちが戦ったことのあるベルカ空軍の部隊だった。
<<貴様らに話す謂れはない　祖国の敵よ墜ちろ>>
　そう言って敵機からの無線が切られる。その後にキリエからの無線が来る。
<<今の誰!?サイファーの知り合い!?>>
<<キリエ！　今は戦闘に集中しろ！>>

キリエの質問をレオナが遮る。

<<グラオヴェスペ隊か　厄介だが勝てない相手じゃないな>>

ピクシーがそう呟いた。俺たちが追っていた２機が鋭い左のターンを描く。俺たちもそれに続いて旋回する。空戦フラップのお陰で旋回はスムーズだ。

上空にいる３機は先ほどの攻撃でダメージこそ受けているものの戦闘は継続していた。お互い機動性と速力の差が大きくて決着がつかないようだ。上のことは４人に任せて俺たちは前の２機を追う。その機動を観察していると彼らはまだレシプロ機の戦闘に慣れていないようなのが見えてきた。先ほどの会話でどうやら冷静さを少し欠いたようだ。彼らがかつて空軍で使っていた機体は旋回性に優れたＭｉＧ―２９だったが今の機体はこちらより旋回性が低い。徐々に隙が見えてきた。

再び１番機の進行方向に向けて機銃を放つ。曳光弾を確認した敵１番機が水平方向の旋回から右ロールして垂直方向の旋回に切り替える。どうやら上昇して３機と合流しようとしているようだ。その背後を上昇して追いかける。２０００ｆｔ上空から敵機がコトブキの追撃を振り切って降下してくる。どうやら１、２番機を追って上昇してくる俺たちを狙おうとしているようだ。だが降下してくる全機が俺とピクシーに集中しすぎていた。レオナとザラが降下する敵機と交差するように飛び込んで機銃を叩き込む。敵の５番機のエンジンに機銃が命中して出火する。機体が高度を失いながら降

下していく。

＜＜油断しすぎね　星ひと～つ＞＞

ザラが間延びした声で撃墜を告げる。

１番機と２番機を除く残りの２機が動揺して降下を中断して旋回を開始した。だがタイミングが悪すぎた。回避を優先して単調な機動を取った目の前の敵機に食らいつく。この位置ならば絶対に当たる。２００ｙｄを切った距離で照準器に敵機の姿を捉える。なんとか回避しようと敵機が急旋回をした。おそらく３番機以下のパイロットは過激派の中から選抜されてこの隊に加わったのだろう。このパイロットはもともとは旋回性の高い機体に乗っていてその癖で急旋回で回避という行動を取ってしまったようだ。だが今乗っている機体は旋回戦向きではなかった。

旋回でエネルギーを失って機体がふらつき出す。ほとんど見越し角を取る必要は無かった。運がなかったなと思いながらトリガーを引く。翼の機銃が炎を吐き出して敵機に吸い込まれていく。被弾痕が機体に空きエンジンから火が噴き出す。パイロットにも命中したのかザラが撃墜した機体とは違い煙を引き錐揉みしながら地面へと吸い込まれていった。

なんとか１番機に合流しようとしたもう一機にキリエが張り付く。普通ならば追いつくことはできないが旋回で速度が鈍ったＢｆ１０９と降下で速度の乗った隼では隼

に分があった。こうなるともはや機体の性能差よりのパイロットの資質の方が重要になってくる。距離を詰めたキリエが急所たるエンジンに向けて機銃を叩き込んだ。出火こそしなかったもののオイルが飛び散りプロペラが止まる。特徴的な横開きのキャノピーが開きパイロットが脱出した。主人を失った機体は流されるままに姿勢を崩して地面に叩きつけられてバラバラになった。キリエが撃墜を宣言する。

＜＜星ひとつ！＞＞

これで残りは奴らだけになったがどうやらもう交戦の意思はないようだ。こちらから距離を取るように上昇していく。その時再びオープンチャンネルで声が聞こえた。

＜＜これで勝ったとは思うなよ鬼神…決着はついていない…俺はバスティアン・シュナイダー　ベルカの誇りにかけていつか貴様を墜とす＞＞

怨みが篭った声で彼が言う。

＜＜戦争はもう終わったんだ　円卓で俺たちの決着はついていたはずだ＞＞

＜＜まだ終わってはいない…貴様を墜として部下の仇を討つまでは…＞＞

そう言ったのを最後にオープンチャンネルから声がしなくなった。撤退していく二機を見てレオナが号令を出す。

＜＜敵機離脱　深追い無用　帰還するぞ＞＞

コトブキ飛行隊が編隊を組み直して羽衣丸に進路を取る。その右後ろにピクシーと

ついた。
<<しかしベルカの連中が来てるとはな>>
ピクシーが呟いた。
<<グラオヴェスペ隊か…あいつらは確かラルド派の軍閥だったな>>
ベルカの戦争推進派であるラルド派がこの世界に来て自由博愛連合と組んでいる。
情報量が多すぎて頭が混乱していた。
<<ねえラルドとかベルカとか全然話が掴めないんだけど？>>
チカが言った。それに続いてキリエも口を開いた。
<<あの人たちって結局二人の知り合いなの？>>
キリエの問いに答える。
<<知り合いではないな　敵だった奴だな>>
<<あの口ぶりだと相当怨みを買ってるみたいですわね>>
エンマの発言にピクシーが反応する。
<<俺たちがあいつの部下を墜としたのは事実だからな>>
<<なんにせよ一度しっかり情報を整理する必要があるわね>>
<<ああ　帰還後にミーティングをしよう>>
ザラとレオナが次に向けての案を練り始めていた。

<<ユーハング製ではない機体を彼らが運用しているのは興味深い　穴が関連している可能性がある>>

ケイトの言うとおりあの機体があるということはベルカ、あるいはラルド派は穴に関係する技術を持っているのだろう。だとすれば自ずとやることは決まってくる。彼らを追うことが最優先目標だ。そんなことを考えてる時に若干疲れた声でレオナが言った。

<<とりあえず帰還しよう　ミーティングは昼食を取ったあとだ　サイファー達もそれでいいか？>>

<<ああ　大丈夫だ>>

俺がレオナに返事をしてすぐにピクシーが口を開いた。

<<キリエ　さっきの空戦で腹は減ったか？>>

その言葉にキリエが若干戸惑いながら答えた。

<<え？まあお腹は減ったけど…どうして？>>

<<俺はお前がいつも以上にパンケーキを食う方に賭ける気だったんでな>>

<<ちょっと！その話まだ続いてたの！人のことを賭け事の対象にしないでよ！>>

ピクシーの発言にキリエが声を荒げる。その言葉を聞いて空戦中に頭から抜け落ちていた言葉が頭の中にまた蘇ってくる。そのことについて考えてるうちに少し機体の

姿勢が乱れた。そこにレオナが声をかけてくる。

＜＜サイファー？大丈夫か？＞＞

＜＜ああ…なんでもない　少しぼーっとしてただけだ＞＞

お前のことで悩んでるとは流石に言えない。ふと思えばいろいろと考えることが多くなってきていた。やはりピクシーの言うように一度くらいはチャレンジしてみるべきなのだろうか。そんなことを悩みながら羽衣丸へ帰還していった。

帰還後行われたキリエが何枚パンケーキを食べるかという賭けに関しては今までのキリエのパンケーキの消費量のデータを記憶していたケイトが勝った。一番ひどく枚数を外したピクシーはしばらくキリエにからかわれていた。正直いい気味だった。

第七章　Ｂｌｉｎｄ　Ｓｐｏｔ

昼間のグラオヴェスペ隊の襲撃を無事切り抜けた羽衣丸は現在航行をやめて空戦が発生した地点に簡易係留されていた。昼食前にマダムルゥルゥに頼んでグラオヴェスペ隊のＢｆ１０９の残骸を回収するためだ。おそらく何かしらの情報が得られるだろうと思ったからだ。ミーティングはその後ということになった。

整備班の残骸回収を待つ間俺は自室で愛銃のメンテナンスをしていた。思えばこの相棒との付き合いも長くなったものだ。各部のブルーイングは擦れ落ち下地のシルバーが露出していた。一方で人間の方の相棒は自分のベッドの上でボヤいていた。

「なんであの娘はあんなにパンケーキ食えるんだよ…普通飽きるだろ…」

奴らの襲撃前に話題になっていたキリエがパンケーキを何枚食べるかの賭けの結果はピクシーが大きく予想を外しこいつの大負けだった。こいつにとっては賭けの結果云々より無尽蔵にパンケーキが入っていくキリエの胃袋の方が衝撃的だったようだ。

「散々俺をからかったバチが当たったんだろうぜ」

「あいにく神だの仏だのを信じる主義は持ってない。で、どうするんだ？結局どこにお誘いするか決めたのか相棒？」

言ってるそばからからかってきやがる。
「今すぐこの銃組み上げてお前で試射してもいいんだぞ？」
バラした銃のフレームを突きつけて言った。だがこいつの言う通り決めるなら早い方がいいのだろう。だが誘うにしてもどう誘えばいいのやらさっぱりだった。誘うのなら良い雰囲気の店がいいのだろうが、アレシマのそういう雰囲気の店を俺は知らない。
「なあピクシー、お前…」
ダメ元でピクシーにそういう店を聞こうとした時船内放送が流れた。ナツオ整備班長の声がスピーカーから響く。
＜＜サイファー　ピクシー　二人共格納庫まで来い＞＞
「ピクシー、お呼びのようだ。行くぞ」
「了解」
ズボンの後ろ腰に組み上がった拳銃を差して二人で格納庫に向かった。
格納庫では俺たちの機体が置いてあるスペースのすぐ近くにＢｆ１０９の残骸が置かれていた。ほぼバラバラの二機と多少原型を留めている一機という状況だ。こちらに気づいたナツオ班長がこっちだと手招きしている。彼女に近づいたとこで腕を組んで残骸を見ながら彼女が言った。

「どうせならちゃんと形を保った状態のこいつを見たかったもんだな」
「今度奴らが来たら不時着出来るように墜とした方がいいか？」
ピクシーが冗談めかして言うと班長が言った。
「キリエから聞いたが結構手強い奴らだったんだろ？へんな手心加えようとしてお前らの機体壊されたらその方が面倒だからな」
以前慣らしの時に思い切り機体に無茶をさせて班長を怒らせたことを考えるとへんな手加減をするべきではないなと理解できた。
そんなことを思ってると班長が作業台に避けて置いてあった残骸をこちらに持ってくる。被弾して炎上した影響か煤まみれになっていたが一部分だけ煤が落とされていた。綺麗になった部分に銘板が貼られているのが見えた。
「でだ。お前らを呼んだのは他でもない。この銘板の文字のことだ。私らにはさっぱり読めん、お前らなら読めるかと思ってな」
班長が見たことのないの文字の解読を俺たちに頼む。言い換えてみれば俺たちがこのイジツの住人ではないというアタリをつけているということだろう。思い切って聞いてみる。
「マダムから聞いたのか？俺たちが穴の向こうから来たってこと」
「お前の機体を初めて整備した時になんとなく気づいたよ。高度計がクーリル式じゃな

かったしな。正確に知ったのはこの間キリエとチカが話してるのをたまたま聞いたときだな」
　それを聞いて少しため息がでる。この調子じゃ主要なクルーだけじゃなくそのうちラハマ中に知れ渡ってそうだ。そんな俺の肩を叩きながらピクシーが言った。
「いずれマダムから伝えられてただろう。それで班長、銘板ってのはどれだ？」
　ピクシーの言葉を聞いて班長が残骸の銘板がついた部分を俺たちの方に向けた。
「『ノースオーシアグランダーＩＧ』…聞き覚えがないな」
　ピクシーが首を傾げながら言った。だが俺はこの名前に聞き覚えがあった。
「…こいつらか…面倒なことになったな」
　再びため息をついた。ナツオ班長が俺の方を見ながら言った。
「その様子じゃなんか知ってるみたいだな」
「ああ、ピクシーも昔の名で言えば分かるだろう。というかお前はここが作った機体に乗った経験があるだろ？」
　それを聞いてピクシーが合点がいった顔をした。
「『南ベルカ国営兵器産業廠』か」
「そうだ。…少し厄介なことになりそうだな」
　二人で納得しているとナツオ班長が聞いてきた。

「要するにお前らの世界の工廠がこっちに戦闘機を送ってるってことか？」
「そういうことになるな。そしてそいつらはこっちで自由博愛連合の過激派と組んで何かをしようとしている…」
　思わずため息が出た。あの戦争で多大な犠牲が出たというのにベルカはまだ懲りていないのか。そんなことを考えた時再びスピーカーから声が聞こえた。今度はレオナの声だ。
＜＜サイファー　ピクシー　娯楽室へ来てくれ＞＞
　時計を見ればミーティングを開始予定時間になっていた。レオナたちにもこのことを伝えなくてはいけない。
「班長、この残骸少し借りてっていいか？」
「構わねえぞ、どうせ残りは山ほどあるんだ」
「助かる。ピクシー行くぞ」
　残骸を持って俺とピクシーは娯楽室へ向かった。
　娯楽室に着くと大テーブルの周りにコトブキとマダムが立って待っていた。そのテーブルの上に先ほど借りたＢｆ１０９の残骸を置くとマダムが口を開いた。
「ここにこれを持ってきたということは何か手がかりがあったようね」
「ええ、とても厄介な手がかりですがね。みんなこれを見てほしい」

残骸を銘板が見やすいようにテーブルを囲むコトブキたちの方へ向けると。チカが真っ先に覗きこんだ。
「ん～？……これなんて書いてあんの？ケイト読める？」
読むことができなかったチカがケイトに振る。
「ケイトもこの文字は見たことがない。解読は不可能」
「ケイトにも読めないなんて。どこの文字ですの？」
エンマの問いに俺が答える。
「この文はノースオーシアグランダーＩＧって会社名を書いてる。……俺たちの世界の会社だよ」
「これがサイファー達の世界の文字なんだ～……あれ？ってことは…」
キリエの頭に浮かんだ疑問にピクシーが続ける。
「こいつらは自由博愛連合の過激派にパイロットと機体を与えてるってことだ。なんの為かは分からないがな」
それを聞いたマダムが眉を顰めながら口から紫煙を吐き出してから言った。
「この件は今回の会議でユーリア達にも伝えておくわ。詳しい対処が決まるまではこれまで通り。どんな空賊が来ようと羽衣丸を守って」
再びマダムがキセルに口をつける。次に口を開いたのはレオナだった。

「サイファー、空戦中にお前達が通信した相手もお前達の世界の人間なのか？」
「そうだ。そういえば本来ならあいつらの事についてのミーティングだったな」
「通信を聞く限り知ってるのはあの部隊の一番機と二番機よね？」
　ザラがレオナに続いて疑問を投げかけてくる。
「ああ、少なくとも俺とピクシーが昔戦ったことのあるのはあの二機だけだ。三番機以降は自由博愛連合のパイロットだろうな」
「そういえば空戦の後に言ってた『ラルド派』だかってどういう意味なの？」
　キリエが聞く内容にはピクシーが答えた。
「ラルド派ってのは俺達が戦ってた敵国の空軍内の派閥の一つだ。所謂タカ派の連中だな」
「ああ、だがラルド一派は俺がこの世界に来る直前に失脚して、ラルド本人は姿を消している。…なぜその派閥の連中がこの世界で暗躍してるかは見当がつかないが…」
　大きくため息が出た。本来なら穴を見つけて帰るのが最重要だった。しかしこの世界に奴らが現れたとなればそうは行かなくなってしまう。この世界にまで俺たちの世界の憎悪を持ち込ませるわけにはいかない。何があろうとも奴らを止めなくてはならない。
　その後レオナがまとめて今回のミーティングは解散になった。それにしてもこの世

界で再びかつての相棒と再会し、さらにはベルカの陰謀まで絡んでくるというのはなんと皮肉なのだろう。ベルカ戦争後に止まっていた俺の運命の歯車が再び動き出している気がした。

グラオヴェスペ隊との空戦から一夜明け羽衣丸はアレシマまであと少しというところまで来ていた。当初の予定ではユーリア議員の乗るガドール船籍の飛行船との合流を予定していたが、空戦と回収作業の影響で航路途中で合流せずアレシマに向かうことになっていた。

一方の俺は悩み事を抱えていた。グランダー社やグラオヴェスペ隊のやつらのことではなく、空戦前にピクシーから提案されたレオナを食事に誘うという件についてだ。今までの人生の中でそんな事は試したことがない。どうきっかけを作れば良いのかすら分からなかった。

「PJ…お前ならどうする…」

今は亡きかつての僚機の名前を呟く。この世界に来て何度も思っていたが彼が今ここにいればどれほど頼りになっただろう。

「よう、頭を抱えてるみたいだな」

船室のドア越しに顔を見せたのはこの件の発端になった憎たらしい妖精だった。前は見せなかったような顔でこちらを見ている。

「まだ誘うとは決めてないって言っただろう…」
「火付きの悪いヤツだな…そんな相棒にいい情報を持ってきた」
　そう言ってピクシーは胸ポケットから小さなメモを取り出し俺に渡した。見てみればアレシマの住所が書かれている。
「なんだよこれ」
　目の前に立つピクシーを見上げながらメモの内容を問いただす。
「前にアレシマに行った時に立ち寄ったバーの住所だ。なかなかいい雰囲気の店だったんでな。こういう時にはいいんじゃないかと思ってな」
「お前はからかってるのか応援してるのかわからないやつだな…」
　皮肉屋だが理想家でもあり、クールなようで熱い。そんなこの男の二面性は未だに理解しきれていなかった。
「まあもしなんかあったら使わせてもらうよ」
「しっかり決めてこいよ。『円卓の鬼神』」
「だから誘うかどうかは決めてないっての…」
「ああそうだ、もし行ったら『グッドフェローの知り合いだ』って言ってこの手紙をマスターに渡してみろ。少しはサービスしてくれるはずだ」
　ピクシーがメモとは別の紙を俺に渡した。それをジャケットの内ポケットにしまい

込み言った。

「…行ったらな」

そんな会話をしているうちに羽衣丸はアレシマへと近づいていた。

数時間後、西の空が赤く染まった頃に羽衣丸はアレシマへと到着した。飛行場の飛行船停泊場所には数隻の飛行船が停泊していた。ラハマでは見られない壮観な光景だ。

停泊した羽衣丸では積荷の岩塩の荷降ろし作業が順調に進んでいる。これで往路の目標は無事に終わった。

自由博愛連合過激派への会議自体は明日昼過ぎにアレシマの高級ホテル『オーシャンサンフィッシュホテル』で行われる予定だ。コトブキ飛行隊とガルム隊はその上空警備に当たることになり、荷下ろし作業の完了後にコトブキとガルムでガドールやポロッカ等の警備関係者と打ち合わせをすることになった。

会議を前に俺は一度羽衣丸を降りた。数日ぶりに気流で揺られることのない地面に降り立つ。やはりしっかりした地面は良い。自分が艦載機乗りであれば羽衣丸の方が気に入っていたかもしれないが、俺にとってはこの動かない地面の方がしっくりきた。

夕陽がアレシマの街を照らしている。イジツの荒野が夕陽でより紅く見えた。その紅さに照らされながら飛行場のクルーが忙しなく動いている。ついこの間ポロッカに行った時を思い出す。思えばたった一、二週間の間に随分と色々あった。

　そんなことを考えていると不意に横から誰かがこちらに向かって声を上げているのが聞こえた。その方向を見てみると若い男がこちらに手を振りながら走って近づいてくる。
「おーい！…はぁ…はぁ…ふぅ…あんた、もしかしてガルム隊のサイファーか？」
　男が息をつきながら話しかけてきた。近くで顔を見ても誰かは分からなかったが声はどこかで聞いたことがある気がした。
「…そうだけどそっちは？以前どこかで会ったか？」
　相手にそう尋ねると男が息を整えきって言った。
「ふぅ……突然声をかけてすまなかった。やっぱり分からないか。あの機体を見ればわかるかい？」
　男が指差す先に視線を向けるとウガデンの緑色の飛行船のそばに翼を赤く染めた九六式艦戦が駐機してあった。この機体には見覚えがあった。
「お前…もしかしてアカツバメ隊の？」
「当たり！前にラハマの近くで助けてもらったアカツバメ隊。隊長のデトだ」
　そう言って若い男、デトが右手を差し出してきた。その右手を掴んで軽い握手を交わす。
「よろしく。それにしてもよく俺が分かったな」

俺がそう言うとデトが笑みを浮かべながら自分の右上腕を指で指しながら言った。
「あんたのジャケットのそのワッペンさ。赤い犬のマーク。助けてくれた時に機体に書いてあったのと同じだったからな！俺は受けた恩は忘れないタイプなのさ！」
彼が言っていたのはレオナに違う世界の存在とバレてから再びジャケットに貼り付けていたガルム隊のマークのことだ。自慢気に言うその顔は自信と活力に満ちていた。さすが期待の若手といったところか。
「そういえばあんた羽衣丸から降りてきたってことはオウニ商会の用心棒なのか。明日は胸を借りるつもりで飛ばせてもらうよ」
「あそこに機体があって明日はってことは…お前も会議の護衛か？」
俺が聞いた内容に彼が答えようとした時今度は後ろから俺を呼ぶ声がした。振り向いてみればピクシーとコトブキ飛行隊がこちらへ歩いてきている。
「サイファー、そろそろポロッカの飛行船に…この若いのは？」
デトに目のついたピクシーが俺に聞くとそのデトが自分から自己紹介をした。
「アカツバメ隊のデトだ」
彼がピクシーに右手を出して握手を交わす。握手を終えて今度はレオナ達コトブキの方を向きながら言った。
「そちらの女性達はコトブキ飛行隊だろ。こうして直接会えるなんて光栄だよ」

デトがそう言って右手をレオナの前に差し出した。レオナが握手に応じて言った。
「コトブキ飛行隊隊長のレオナだ。あなた方アカツバメ隊の活躍はこちらの耳にも入ってる。会えて光栄だ」
その後ろでキリエとチカがボソボソと小声で話していた。
「なんか頼りなさそうな顔してるけど大丈夫なのかなこの兄ちゃん？」
「機体も九六式みたいだし…」
それを横で聞いていたエンマが肘でキリエを小突く。その声が聞こえていたのかデトが苦笑いしながら二人に言った。
「まあコトブキからは頼りないって言われても仕方ないよな。でもこう見えても今まで仕事でしくじったことはないんだ。少しは安心してくれてもいいよ」
それを聞いたレオナが後ろのキリエとチカをにらみながら謝罪した。
「すまない。あの二人には後できつく言っておく」
それを聞いたキリエとチカが『げっ』というような顔をしてしょぼくれる。そうしているうちに今度はデトの後ろの方から大きな声が聞こえた。
「おーい！デト！そろそろ時間だぞ！」
その声の聞こえる方に目を向けると男一人と女二人が見えた。アカツバメの隊員だろう。デトが振り向いてその声に応える。

「すぐに行くよー…それじゃあまた後で。といってもすぐ会うか」
そう言ってデトが隊員たちの待つ方へ走り出した。
「さて、我々も行こう」
レオナが歩き出しそれにコトブキと俺たちが続く。
「それで?あの若いのとはどういう関係なんだサイファー」
「ついこの間ラハマに向かって飛んでた時に護衛任務中に空賊に襲われてる彼らを見つけてな。援護したんだ」
「相棒も変わらないな。こっちでも空で人助けとは…」
ピクシーとそんな話をしながら歩いていると警備会議を行うポロッカの飛行船『ポロッカ四号』にたどり着いた。以前イケスカ動乱で撃墜されたポロッカ一号の後継となる飛行船らしい。羽衣丸より一回り以上大きく近くに来るとでかすぎて全貌が見えない。
感心しながら立ち止まって見上げているとピクシーから止まらず歩けというように背中を叩かれる。すでにコトブキ達は船内へと入っていた。この広い船内で逸れたらかなわないと思いながら俺たちも彼女たちを追って船内に入った。
予想していたより会議はスムーズに進んだ。こういう多くの組織が合同で行う作戦

というのは往々にしてお互い手柄を奪い合おうとしてごたつくものだが、今回はごたつくことはなかった。ごたつく間も無く勝手に話を決められていってという方が正しいかもしれないが。

会議の結果、目撃情報が多く空賊の接近してくる可能性の高い北東方面にアレシマ市立飛行警備隊の一部が、同じく可能性の高い南東方面にポロッカの飛行隊が配置されることになった。どちらも今回の会議の護衛にあたる部隊では数の多い隊だった。

一方の俺たちは北西から南西にかけての空域に配置されることになった。北西側の一番安全の確保されている空域にガルム、コトブキ、そしてガドールのユーリア親衛隊が。南西方面にデト達アカツバメ隊を含むウガデン飛行隊が、という具合だ。各方面に増援が必要になった時に備えてアレシマ市立飛行警備隊の一部が地上待機ということになった。

敵機侵入の可能性が一番低い方面に俺たちを配備したのは敵の裏をかいてのことだったのか、はたまた前のイケスカ動乱のようにガドールやオウニ商会に手柄を取られたくなかったのか。いずれにしろ全方面を合わせれば１００機を超える大所帯だった。流石にこの状況で攻撃をかけてくるということはあまり想像できない。会議中レオナなどはとりあえず一安心という様な様子だったがチカなどはつまんないと言いたげな表情をしていた。

警備の会議が終わり俺たちは羽衣丸へと戻ってきた。とりあえず今日の予定はひと段落といったところだ。……ある一点を除けば。俺は今羽衣丸の女性船室区画の入り口のところに立っていた。

「一言いっしょに飲みに行こうと誘うだけだ…」

そう小声で唱えながらおそらく１０分程度経っていた。誘ってみるだけ誘ってみようと決心はしたものの次の一歩が踏み出せなかった。

「サイファー！」

立ちすくんでいると後ろから大きな声で呼びかけられた思わず身体がビクリと跳ねる。振り返ってみると後ろにいたのはキリエとエンマだ。平静を装いつつ言った。

「……なんだ二人か」

「なんだとはなにさ。どいてよ入りたいんだから…ってこんなところで何してるの？」

キリエがムッとした顔をしてから聞いてきた。

「んあぁ…その…ちょっとレオナに…いやなんでもない…」

最後まで言おうとしたところで誤魔化した。

「何？レオナに用事？…レオナ～！サイファーがレオナに用事だって～！」

「ちょっ!?」

思わず普段出さないような声が出た。

「なんだか今のサイファーはサネアツ副船長みたいですわね」
「なんかそう言われると傷つくな…」
「それを聞いたらサネアツ副船長が傷つきますわよ」
　エンマがため息をつきながら言った。どうにも今回は自分のペースで行動できてないような気がした。少ししてからレオナがやって来てそれと入れ違いにキリエとエンマが廊下の奥に消えていく。
「すまない待たせた。用事というのはなんだ？」
　現れたレオナは普段着ているベストを脱いでシャツとスパッツだけの状態だった。
「あぁ…えぇっと…せっかくアレシマに来たんだし…行きたい店があるんだが俺はアレシマの土地勘ないし予定が空いてるなら一緒にどうかなって…」
「私とか？私は別にザラほど酒に強くはないぞ？」
「あ、いや…ええと、ほら明日の俺たちの方の打ち合わせも兼ねてな？」
「？　それならジョニーのところでザラ達も同席させた方がいいんじゃないか？」
「あーその…ほらお互い部下の愚痴とかもあるだろ？」
　すごいみっともない誘い方だと自分でも思った。ＰＪにこういう時の誘い方を聞いておくべきだったと再び感じた。
「……分かった。ただし明日は昼から警備だ。少しだけだぞ。２０時に搭乗口に集合で

いいか?」
「あ、ああ…それでいい」
レオナが自室へと戻っていく。なんとか一歩目を踏み出すことはできた。すぐに顔が熱くなる。よくよく考えればバーに行った後のことは何も考えていなかった。
「空戦より緊張するな…これ」
思わず口からそんな言葉がこぼれた。
２０時を回りピクシーから貰ったメモを片手に握りしめながら俺は搭乗口の近くに立ちながら外を眺めていた。陽はすでに沈みアレシマの飛行場を照らすのは照明の光のみになっていた。
「すまない、待たせた」
声の聞こえた先に目をやるといつもの格好をしたレオナが立っていた。
「いや、俺も今来たところだ。…行くか」
まさかこんなよくある言葉を自分が言うとは思っていなかった。ステップに足を踏み出して大地に足を下ろす。
「それで行きたい店というのはどこなんだ?」
レオナの問いかけに俺は手に持っていたメモを彼女に見せた。
「ここは…すぐ近くだな。飛行場から歩いて１０分程度の場所だ」

「行ったことあるのか？」
「いや行ったことはない。だが場所の検討はつく」
　彼女が街の方へ向かって歩き出し俺がその横に着いて行く。街の方にも明かりが煌めいている。
「そういえばレオナは何回くらいこの街に来たことがあるんだ？」
　なんて事のないありふれた質問を彼女に投げかけた。
「何回だろうな…数えられないくらいはここに来ているはずだ。土地勘がないと行ってたがサイファーは来た事ないのか？」
「アレシマにはないな。こっち方面に飛ぶことは少なかったし…そういえばタネガシの方で仕事したことはあったな。ちょうどラハマに来る少し前の話だ」
「タネガシか…ついこの間までマフィア同士の抗争があったようだが。…その抗争に参加したのか？」
「いや、俺が仕事をしたのはその後の話だ。俺みたいに雇われた二人組と荷物を運んだんだ」
　俺の脳裏には当時のことが思い出されていた。腕の良い隼と零戦の二機編隊。少し変なノリの奴らだったが腕は確かだった。ほんの少し前の話なのにもう随分昔のように思える。それだけ最近事情が一変したということかもしれない。

「…ここか？」

そんな話をしているうちに目的のバーに着いた。ドアを開けるとベルが鳴りそれに合わせてバーカウンターに立つ男がいらっしゃいと決して大きくない声で言った。店の中には男が数名。騒がしい感じはなくジャズのレコードのかかる静かな雰囲気の店だ。店内には階段があり、そこを上った中二階に個室があった。カウンターに近づいて男に言った。

「すまない、グッドフェローの知り合いなんだが…マスターはあんたか？」

「グッドフェローの？確かに俺が店主だが」

マスターだと確認が取れたところでジャケットの内ポケットにしまい込んでいたピクシーの手紙をマスターに渡した。

「彼がこれをあんたにと」

「あいつが…？どれ…」

マスターが手紙を受け取り中を見る。彼が少し微笑を浮かべてから言った。

「上を使ってくれ。何か適当に持っていく」

「ああ、ありがとう…」

例を言ってレオナと二人で階段の方へと歩いていく。あいつの手紙に何が書いてあったのだろうか。知り合いだ言ったとはいえいきなり上の個室を使わせてくれるの

が妙に思えた。そんな考え事をしながら中二階へと上がる。中二階の個室は二人が対面で座れるテーブルが置いてある小部屋だった。下の階がよく見渡せる。
「こじんまりしてるが静かで良い雰囲気の店だな」
「私もアレシマにこんな店があるとは知らなかった。さっきの店主との会話を聞く限りピクシーが知ってたのか？」
「そんなところだ。…そういえば頭の傷はどうだい？まだ痛むか？」
　見る限りは傷痕も残っていなかったがふと気になってレオナに聞いた。
「もう大丈夫だ。…あの時はありがとう。この借りはいつか…」
「借りだなんて…当然のことをしたまでだよ。傷が残らなくてよかった」
　ホッとしたところでドアがノックする音が聞こえた。マスターが入って来てツマミと酒を
　テーブルに置いた。肉料理とサラダ、それにビールといった具合だ。マスターが戻り側に俺に耳打ちした。
「…頑張って口説けよ」
　驚いて思わずマスターの方を向くと悪い笑みを浮かべながら彼が部屋を出て行った。なんとなくあのイタズラ妖精の手紙の中身が思い浮かんだ。
「どうしたんだ？何かマスターが言ってたようだが…」

「いやなんでもない…それよりせっかく来たんだ。温くなる前に一杯飲もう」
俺がそう言ってジョッキを持つとレオナが少し不思議そうな顔をしてもう一つのジョッキを持った。
「それじゃあ…ええと…レオナの快気を祝って」
この場でやるのはおかしかったかもしれないが乾杯の音頭がパッと浮かばなかった。それを聞いてまたレオナが眉をひそめながら言った。
「このぐらいの傷で快気もないだろう。ただその…気持ちは頂いておく」
二人のジョッキがコツンと音を立てる。そのまま口をつけてビールを流し込む。だが味なんか分からなかった。こうして彼女と二人きりでいることで緊張しているのだろう。いざ真正面で彼女と酒を飲むと全然酒が効いている気がしなかった。
しばらく二人で酒を飲んで過ごした。もっとも俺の方は酔いがまわるような余裕はなかったが色々と話が聞けたのは楽しかった。彼女の育ったホームのことや、ザラに初めて会ってコトブキを結成した時のことなどだ。早いものですでに来店してから二時間ほど経っていた。時刻は22時を過ぎたあたりだ。
「ん?…もうこんな時間か。そろそろ戻ろう。これ以上は明日に差し支える」
レオナが壁にかかっている時計を見て言った。たしかにもう良い時間だ。だが俺はまだここに来た本来の目的を果たしてはいなかった。このまま何もしないまま帰って

しまって良いものなのか。そう思う気持ちはあったがどうすればいいかが思いつかなかった。

「さあ行こう」

レオナがイスから立ち上がる。もう考えている暇はない。

「レオナ！」

そう大きく声を上げて俺はドアへ歩こうとしていたレオナの手を掴んだ。もうやぶれかぶれだ。

「サイファー？どうかしたのか？」

キョトンとした顔で彼女が俺の顔を見ている。俺はとっさに掴んだ彼女の腕を離せずにいた。俺とレオナの間に沈黙の時間が流れる。

「酔ってるのか？最後に水でも頼むか？」

レオナは相変わらずこちらの様子には気づいていないようだ。俺は掴んだ彼女の手を引きそのまま彼女の身体を抱きしめた。

「おい、悪酔いしすぎじゃ…」

こうして抱きしめられても動揺せずにそう言ってる彼女に向かって俺は言った。

「酔ってはいない…酔うわけがない」

「…？」

「あの日、あの廃墟で一晩過ごした時から…俺はお前が気になってしょうがないんだ」
「それは危なっかしいという意味か?…心配をかけてすまない。だが私は…」
俺の言ったことは伝わってないようだった。彼女には危なっかしい自分を心配しているという風にしか捉えられていない。……もう打つ手は一つしかない。
「違う、そういう意味で言ったんじゃない」「…?ならどういう意味なんだ?」
俺に抱きとめられたままのレオナが再び問う。最後の手だ。
「なあ、俺は口下手だから…行動で示してもいいか?」
「えっ?」
言葉をレオナが飲み込まないうちに俺は彼女の唇を塞いだ。
「んっ!?」
驚いたレオナが抵抗しようと俺の胸に両手を押し付ける。数秒後、互いの唇が離れレオナが俺を押し離す。レオナが驚いた顔でこちらを見ながら声を上げた。
「突然なんだ!酔った挙句の悪ふざけにも程が…!」
その声を遮って言う。既にとんでもないことをしているのだ。もう恐れることはない。できる限り落ち着いた静かな声で彼女に伝える。
「ふざけてなんかない。俺はお前が好きだ」
彼女の目を見て言い放つ。未だに彼女は状況を飲み込めていないようだ。彼女もこ

ういうことは初めてなのかもしれない。
「どういうことなんだ…!?」
「伝わるまで何度でも言う。……俺はお前が好きだ」
一度離れた距離を再び詰める。レオナが下がるかと思ったが彼女はその場を動かなかった。先程までまっすぐ俺を見ていたその視線は今は床に落ちている。
「サイファーが…私を…」
彼女が小さな声で呟く。
「もう一度言った方がいいか…?」
「い…いや少し待ってくれ…」
彼女が片方の手を胸の前でぎゅっと握りしめる。呼吸が荒く身体に相当力が入っているようだ。俺もやっと冷静さを取り戻し始める。改めて思えばやりすぎた行動だ。彼女に何をされても不思議ではない。
「ごめん…」
自然と口に出していた。
「……流石にやりすぎだ…突然こんな事」
「すまない」
レオナが大きく深呼吸する。思い切り息を吐き出して呼吸を整えたとこで彼女が

言った。
「普通こういうことはもっと親密な間柄の男女がやる事だろう…」
「本当にすまない」
冷静になった今はただひたすら謝る事しか出来なかった。
「だがまあ…サイファーの想いの強さは分かった。…本当に私でいいのか?」
彼女が紅潮した顔で俺の顔を見上げてくる。
「えっ…と、当然だろう! お前が好きなんだ。そうじゃなきゃこんな事やらないよ…」
同じように顔を赤くしながら答える。
「それなら…その…よろしく頼む」
レオナが右手を差し出す。俺はその右手を優しく握る。そして再び彼女を引き寄せて抱きしめ言った。
「ありがとう…強引なやり方してごめん…」
今度はレオナも手を俺の背に回してくれた。
「ああ…」
抱きしめた彼女の体はとても暖かい。
個室を後にしてカウンターにいるマスターに金を払うと彼が笑顔を浮かべながら言った。

「上手くいったみたいだな」
「ああ、おかげさまでな」
「またアレシマに来ることがあれば寄ってくれ。グッドフェローにもたまには寄れと伝えておいてくれ」
「分かったよ。気を利かせてくれてありがとうマスター」
挨拶を交わして店を後にしてレオナと来た道を戻っていく。まだお互いさっきの恥ずかしさが残っているのか来た時よりも二人の間隔は広がっていた。流石にこの状況で手を繋ぐなどという勇気は俺にはなかった。だが今はこの距離がなんだか心地いい感じがした。心は前よりも近づいた気がしていた。
羽衣丸に着いて男女の船室の分岐場所まで来た。
「それじゃあここで……今日はありがとうな」
俺の言葉にレオナが遅れて反応する。
「あ、ああ…その…改めて聞くが本当に私でいいのか？」
不安そうな顔をするレオナに微笑んでいう
「レオナが好きなんだよ。他の誰でもなくね」
レオナが顔を赤らめ視線を外しながら言った。
「ありがとう。それじゃあ…」

レオナが廊下の奥へ消えていく。彼女が部屋に入る音を聞いた後に俺も自分の船室へと戻った。

部屋に入るとピクシーが奥の小上がりで原稿用紙に向かっていた。俺に気づいたピクシーが言った。

「よう、どうだった。上手くいったか？」

「…ああ…なんとか上手くいった。すごい疲れた」

ジャケットを脱ぎ捨ててベッドに横になる。気疲れしたせいか眠気が襲ってきた。

「で、どこまで行ったんだ相棒、手を握るくらいはしたか？」

ピクシーが事情聴取のように聞こうとしてくるが今はとにかく眠気が勝っていた。まぶたを閉じて半分眠りに落ちながら言った。

「彼女にキスしながら告白した…」

「なっ!?おい相棒今なんて言った!?」

彼が再度聞いてくるのも御構い無しに俺は眠りに落ちる。瞼の裏にはあのバーでの事が浮かんでいた。

翌日の昼頃、俺たちはアレシマの飛行場で発進の準備をしていた。１００機近い戦闘機が順に離陸するとあってアレシマの飛行場も大忙しだ。

＜＜ポロッカ第三小隊　滑走路進入を許可！直ちに離陸せよ＞＞

＜＜こっちの離陸順はまだか？もう３０分も待ってるぞ！・＞＞
＜＜ウガデン第二飛行隊　その場で待機せよ　君たちはアレシマ警備隊の後に離陸だ＞＞
　無線がひっきりなしに流れている。どこの隊も早くこの混雑から抜けたくてしょうがないようだ。離陸は北東と南東へ向かうアレシマ飛行警備隊とポロッカの飛行隊が優先されていた。その部隊が上がった後にウガデンの飛行隊やコトブキは上がる手筈だった。
＜＜あーもう！　いつになったら飛べるのさ！全然列が動かないし！・＞＞
　キリエのボヤキが無線で響く。
＜＜もう少しの我慢よ　ね？レオナ？・＞＞
＜＜…えっ…ああそうだな＞＞
　ザラの問いかけへのレオナの返事が遅れた。
＜＜なんか今日のレオナは変ですわね＞＞
＜＜いや…なんでもない　私は大丈夫だ＞＞
　いつもより沈んだ声でレオナが取り繕う。…やはり昨日の事が原因なのだろうか。あのタイミングでやってしまった事が彼女への負担になってしまっているのかもしれない。なんだか申し訳ない気持ちになってくる。

＜＜集中力が欠如した状態での飛行はミスを起こしやすい　体調が優れないのであれば地上待機するべき＞＞

ケイトがいつもと変わらぬ口調で淡々と言った。

＜＜…本当になんでもない　私は平気だ＞＞

＜＜レオナがそんな風になるのって珍しいよね？何かあったの？＞＞

＜＜えっいや…＞＞

チカがレオナに質問を投げかける。レオナが回答に困っていると別な無線が飛び込んでくる。

＜＜こちらアレシマ警備隊第六小隊　エンジントラブルだ　離陸を断念する＞＞

どうやら滑走路に侵入して離陸しようとしていたアレシマ飛行警備隊の飛燕がトラブったようだった。本来であれば地上待機組の警備隊と交代するのだろうが滑走路までの誘導路は詰まりに詰まっていた。管制塔からの無線は意外なものだった。

＜＜こう詰まっていてはやむを得ん　第六小隊の次に離陸予定だった隊を臨時に北東方面部隊に編成する＞＞

その言葉を聞いてまた別の声が無線から響く。

＜＜こちらアカツバメ隊　次の離陸は俺たちだ　北東方面に飛べばいいのか？＞＞

＜＜その通りだアカツバメ隊　離陸後に北東で警備隊の第五小隊と哨戒飛行せよ　ど

うせ空賊など来やせん　滑走路への進入を許可する＞＞
管制塔からの声を聞いてアカツバメ隊の九六式艦戦４機が誘導路から動き出す。
＜＜了解した　やっぱりこう混んでると上手くいかないもんだな＞＞
アカツバメ隊の４機が編隊を組んだまま離陸滑走に移っていく。ふらつきは見えるが編隊を組んだまま彼らは大空へ飛び上がった。
さらに２０分程度の時間が経ったところでやっとコトブキと俺たちガルムの離陸順が回ってきた。先に上がるのはコトブキ飛行隊だ。
＜＜コトブキ飛行隊　滑走路への進入を許可　そのまま離陸せよ＞＞
＜＜こちらコトブキ飛行隊隊長レオナ　了解した＞＞
コトブキが滑走路へと進入し、一時停止をかけてから滑走していく。デト達もうまいもんだったがやはり彼女達の腕は別格だ。綺麗に編隊を組み離陸していく。
＜＜離陸を確認　ガルム隊　滑走路進入を許可する＞＞
＜＜こちらサイファー　了解＞＞
進入許可を得て俺たちも滑走路へと歩を進める。操縦桿をグリグリと動かし操縦翼面の最終チェックを行ってからラダートリムを右にセットしてフラップを離陸位置にする。スロットルを徐々に開けていくと回転が上がり２０００ｐｓのホマレエンジンが唸る。尾輪が浮き上がりその後すぐに主脚も地面を離れる。レバーを操作して脚を

しまい、フラップを上げる。上昇しながら右に旋回し北西に機首を向けて哨戒エリアまでの飛行を開始する。戦闘空中哨戒なんていつぶりだろうか。そんなことを考えながら哨戒エリアを目指した。

割り当てられた南西エリアに到着し哨戒を開始してから４０分ほど経った。今の所どのエリアでも会談を邪魔しようとするような敵性航空機は見えていなかった。コトブキ達も警戒はしっかりしているが無線で会話をして暇つぶしをしているような状況だ。その時管制塔から無線が入ってきた。

＜＜こちらアレシマ管制塔　レーダーが北東に大型の機影を捉えた　距離４５キロクーリル＞＞

それを聞いてチカが声を上げる。

＜＜ついに来た！待ちくたびれたよ！＞＞

＜＜待てチカ　来たのは北東だ　我々の区域じゃない＞＞

＜＜ちぇー　つまんないの＞＞

レオナがチカを諌めるとチカがブーブーと文句を言った。

＜＜ん…？レーダーがおかしいぞ　故障か？＞＞

管制官の声が再び聞こえる。レーダーの調子が悪いと言ったのが聞こえたがそれに違和感を覚えた。

<<なあピクシー　機影が見えた直後にレーダーの調子が悪くなるってのはなにか怪しくないか？>>
<<タイミングが良すぎる気がするな…>>
　ピクシーも同じ考えだった。
<<こちら管制塔　こちらのレーダー不調の機影を確認できない　アレシマ飛行隊直接目視で確認せよ>>
　管制塔がレーダーのことを言うたびに胸騒ぎがした。ちょうどその時北東方面のアレシマ警備隊から無線が入る。
<<こちらアレシマ第五小隊　確認に向かう　アカツバメ隊　援護を頼む>>
<<こちらアカツバメ隊　了解だ　そっちについていく　…ん？なんだあれは>>
　デトのその言葉が無線で聞こえた瞬間だった。大きな爆発音が空に響いた。
<<なに!?なんの音!?>>
<<なんだ！>>
<<何が起こりましたの!?>>
　コトブキのメンバーやピクシーが声を上げる。現在の飛行している場所から東、爆発音のした方向に目をやると惨状が見えた。空に大きな爆発が起き、バラバラになったモノが火を噴きながら大地へと墜ちていく光景だ。

<<一体何が起きているんだ…>>

そう呟くのが精一杯だった。

第八章　Ｄｅｅｐ　Ｓｔｒｉｋｅ

東に大きな爆発が見えた。あまりにイレギュラーな攻撃に頭が一瞬白くなる。だが戦争慣れした俺の脳は程なくして状況の処理を始める。直後に様々な無線が飛び交い始めた。

＜＜今のは一体なんだ!?どこから…＞＞

＜＜アレシマ警備隊第五小隊がやられた！全滅だ！クソなんだってんだ！＞＞

＜＜こちらアレシマ管制塔　こちらでも状況を確認中だ　しばらく待機せよ＞＞

＜＜おい　なんだあれ…＞＞

最後の無線が聞こえた直後に再び東の空に爆発の火球が発生する。

＜＜一体なんなの!?＞＞

チカが大声が無線に響く。

＜＜あんなもの見たことありませんわ！＞＞

エンマもそれに続いた。対してザラが落ち着いた声で言った。

＜＜戦闘機の攻撃とは思えないわね　ケイトは何か検討がつく？＞＞

＜＜おそらく大型の飛翔体　４００ミリ級の大型砲から発射されたものと推定＞＞

<<それっていつだったかのクロバチ一家が使ってた…高射砲？とかと同じ感じのやつ？>>

ケイトの推定にキリエが思いつく節があったようだ。だがケイトがその可能性を否定する。

<<もっと大きな砲　ユーハングが保有していたとされる『戦艦』の砲と類似している>>

<<戦艦って海に浮かぶ船っしょ？なんでそんなのがイジツにあんのさ！>>

チカの言うように最大の疑問はそれだった。海のないこの世界に戦艦なんてものがあるわけがない。仮に陸路を移動できる兵器があったとしても強力な地磁気や毒のせいでアレシマの周囲まで接近するのは無理だろう。残る手段は空しかない。そう思った時ケイトが言った。

<<飛行船に搭載している可能性がある>>

<<そんな大型の大砲が飛行船に積めますの？>>

エンマがもっともなことを言う。飛行船に大型砲を積むなんてことは普通はない。だが頭に一つの可能性が浮かんだ。

<<…グランダー社の技術力を使えば可能かもしれない>>

その推定にレオナが反応する。

<<あのＢｆ１０９を作った会社か？>>
<<ああ　あいつらなら資源さえあれば作れるかもしれない　そうまでして奴らが過激派に協力する理由は分からないが…>>
　そう答えた時また東の空が爆ぜた。爆炎の中から戦闘機の残骸が大地に墜ちていく。
<<また何機か落とされた！管制塔！どうすればいい>>
<<レーダーが使用不能だ　各自目視で対応しろ>>
　やはりまだレーダーは使えないようだ。
<<管制塔のレーダーも奴らが妨害してるようだな…　手の込んだことをしてくれる>>
　ピクシーがボソリとぼやいた。その時だった。ザラの声が無線に響いた。
<<あら？…みんな　１０時方向から何か来てる>>
　その言葉を聞いて１０時方向、西の方に目をやると俺たちより少し高い高度、大体１６０００ｆｔほどに一機の機影が見えた。距離はまだ３ｎｍほどある。
<<一機だけ？　妙だな…>>
<<アレシマ管制塔　こちらコトブキ飛行隊　未確認の機体を一機目視で発見した>>
　レオナが管制塔へ通報する。だが管制塔からの返事が返ってこなかった。あの攻撃

で混乱している以上そうなるのも無理はない。レオナが軽くため息をついてもう一度同じ内容を口に出そうとする。その時状況がかわった。一機だけです飛んでいた例の機体がバレルロールで高度を下げて加速しながらこちらへ向かってきたのだ。

<<!?　全機用心しろ！>>

　レオナが檄を飛ばす。コトブキが二機ずつの編隊に別れると同時に敵機は編隊の中央に機銃を放ちながら飛び込んできた。

<<一機でこの中に飛び込んでくるとかバカなの!?しかも隼だし！>>

　キリエが叫んだ。八機の編隊、その上この世界では名の知れたコトブキ飛行隊に単機で突っ込んでいくなんていうのはよほどの自信家か自殺願望持ちとしか思えない。ジェット機を使うなりして性能差があればまた別かも知れないが、敵機は型は違えどコトブキと同じ隼だった。

<<真っ赤な隼…エリート興業ですの？>>

<<あの隼は二型　エリート興業が使用するのは三型　エリートではない>>

　ケイトがこの状況下で淡々と分析をしていく。そうこうしているうちに飛び抜けていった紅い隼が降下で付いた速度を活かしてほぼ垂直に近い角度で上昇しこちらを向こうとし始めた。

<<数ではこちらが有利だ　囲んで狙うぞ>>

レオナが再度指示を出す。紅い隼がターンし終わった時にコトブキが散開を終える。二機ずつの編隊がコトブキと俺たちを含めて四つ。どれかにあの隼が襲いかかれば残りの編隊でカバーできる計算だ。紅い隼が再び降下を開始、機体が進む先はレオナとザラの編隊だ。

＜＜レオナ！そっちいったよ！＞＞

相手の機動を目視したキリエがレオナに呼びかける。ゆるく右にターンしている二人の編隊に紅い隼が右斜め上から接近する。射線がレオナの機体に合いそうになったところで彼女の機体がきついターンを始める。当たらないと悟ったのか紅い隼はレオナ達の編隊の左後下方へと飛び抜けた。その背後にエンマとケイトの機体が続く。機銃を放つのに適した距離に二機が着くと紅い隼が左右にスナップロールして射線から逃れようとする。

＜＜ええい　すばしっこい！＞＞

エンマが毒づく。紅い隼のスナップロールは無駄のない良いキレをしていた。彼女達の後ろを飛びながら見るだけでもよく分かる。何度かスナップロールを繰り返した後、エンマがようやくこのリズムを掴んできたところで敵が急にフラップを出しクイックループを繰り出した。紅い隼が軋む音が聞こえるようだ。人間業とは思えないようなクイックループだった。エンマとケイト、そして俺たちも目では追えたが着いていく

ことはできないループだ。一体何Gかかっているのか想像しただけでも恐ろしくなる。どんなパイロットか拝んでやりたかったがどういうわけかこの隼のキャノピーはスモークがかかって中が見えないようになっていた。

俺たちの背後に紅い隼が回り込む。そこにキリエとチカの編隊が機銃を放って相手の機動を牽制しながら割り込んでくる。

<<あんな機動　一番小回りのきくチカでも無理じゃない？>>

ザラが隼を見ながら呟く。一般的に小柄で脳と心臓が近い方がG耐性が強いと言われている。コトブキで言えばザラの言うとおりチカが一番耐性があるだろう。だがあの紅い隼はそんなこと関係ないと言わんばかりにハイGターンをこなしていた。

<<ピクシー　あの紅い隼どう見る？>>

<<どう見ると言われてもな　油断すれば墜とされるのはたしかだ>>

そう言った時また東に火球ができるのが見えた。

<<長距離攻撃に謎の手練れのパイロット…考えることが多すぎるな全く>>

この状況にボヤキが出る。さっきから入ってくる他の部隊の通信はアイツがやられたコイツがやられたどうすればいいと阿鼻叫喚と言った具合だ。

<<こんのぉ！>>

キリエが中々弾の当たらない相手にイライラし声を上げる。シザーズやバレルロー

ルを織り混ぜた機動が繰り返されていた。キリエ達も紅い隼もどちらもエネルギーを失い始めている。低速域の操縦性の良い隼とはいえエネルギーが少ない状態で最小限の動きでエネルギー損失を抑えつつキリエ達の攻撃を回避するあたりやはりこの紅い隼のパイロットは相当な腕を持ってると思えた。そんな相手をどう墜とすか、戦況を見つめながら俺は手を考えている。

キリエもエネルギーを向こう以上に損失しないように巧みに機体を操っていた。機体を扱うのがコトブキで一番上手いというだけのことはある。一方でキリエの僚機のチカはギリギリと言った様子だ。彼女の思い切りの良い、言い換えれば荒い操縦はチカの前を飛ぶ二機の隼よりも確実にエネルギーを消耗させていた。だんだんとキリエ達に着いて行けなくなっているのが見える。何度となくレオナ達が狙ってもその度にこの紅い隼は巧みに射線を回避し続けていた。

＜＜もうダメ！＞＞

エネルギーが足りなくなったチカが着いて行けずにキリエの援護位置から剥がれる。

＜＜チカ！…あっ！＞＞

キリエが落伍したチカに気を取られた瞬間に前を飛ぶ紅い隼が動きを変える。戦況が動くと踏んだ俺も行動を始める。

紅い隼が一気に１８０度ロールして急降下を始める。コイツの向かう先はキリエの

後ろから脱落し降下でエネルギー回復を図っていたチカだ。
<<チカ！後ろだ！>>
レオナがチカに警告する。チカの方が先に降下を始めてはいたが、より鋭い急降下と馬力の上なエンジンで紅い隼は一気にチカとの距離を詰めていた。俺は攻撃のタイミングを計り始める。降下速度で言えばこの中では俺たちの紫電改が一番優れている。距離を詰め仕留めるならコイツの機体がチカに照準を合わせようとする一瞬が狙い目だ。
機体をターンさせスロットルを押し込み降下してチカの後ろに近づいていく紅い隼の後ろにきりえを抜かして占位する。チカはチカでより降下角度を強めて速度を得ようとしていた。それでも同じ降下角度でついてくる後ろの敵機の方が速度の伸びがよく徐々に距離を詰められている。
<<あと少し…もう少し詰める>>
タイプの違う二機の隼より速度をつけた俺の機体がチカを追う紅い隼へと距離を詰めていく。まるで地面に向かってのチキンレースだ。
<<このぉ！離れろよ！>>
チカの機体がおよそ４５００ｆｔまで下がった時にチカが後ろの隼をオーバーシュートさせようと降下しながらのバレルロールを繰り出す。普通であれば速度の

優っていて距離を詰めていた後続機は追い越してしまうだろうといういいタイミングだった。チカを抜きターンをすれば俺はこの機体を撃てる。だがここで紅い隼は予想もつかない動きをした。

<<なっ!?>>

紅い隼が急激なピッチアップを行う。だが機体は上昇しない、その場で機体だけが鎌首を持ち上げた蛇のごとく上を向く。コブラだ。予想外の行動で俺も照準を定めることができない。

<<あれナオミの!!?>>

キリエが声を上げるのも気にせずにレティクルを覗かずに自機の射線の前にチカがいないことだけ確認して左右に軽くラダーを蹴りながらトリガーを引く。1秒にも満たない時間引いた後に右ラダーを蹴りながら右へと旋回して敵機の横を抜ける。機体に注視するとコクピット側面に白い円の中に何か白文字の入ったエンブレムが描かれていた。一瞬だった為中の文字がなんて書いてあったかは分からなかった。横を抜け切ったところで紅い隼の部品が散るのが見えた。致命傷にはなってないように見える。完全にラッキーヒットだ。

<<当たったみたいだな　にしてもなんて動きだ>>

ピクシーも流石に驚いた声でそう言った。あのタイミングでコブラを、それもレシプ

ロ機で繰り出すあたりやはり相当なパイロットだ。往年のベルカ空軍にも勝るとも劣らない。

視線の端では速度の確保ができたチカがキリエと編隊を組み直すのが見えた。ここから仕切り直しってところだろう。敵機もコブラで失った速度を水平飛行で確保しながらこちらを伺っているようだった。

<<なんでナオミがやった技をアイツがやってんの！>>

<<キリエ落ち着け　それを考えるのは帰ってからだ　今は目の前のことに集中しろ！>>

<<あの動き　やはり人間業とは思えませんわ>>

<<この隼の機動はケイトも予想ができない　長く戦うのは危険>>

コトブキが一連の空戦からさらに警戒を強めて攻撃の態勢を取ろうとする。だが事態は意外な結果で終わりを迎えた。敵機が俺たちのいる方向へは向かわず来た方向、西へ進路を取り撤退していったのだ。

<<あら？　どうやらもうやる気はないみたいね>>

<<鮮やかな…というより何を考えてるか分からない引き方だ>>

全くだと思った。あの紅い機体が一体なんの目的でこちらを、しかも一番腕の立つコトブキと俺たちの元に単機で飛び込んできたのか未だに計りかねていた。唯一分かる

のはアレもおそらく俺たちのいた世界から来たものだろうということだ。ただ飛び方に関しては全く想像がつかなかった。今まで戦ってきたどのベルカ人パイロットとも違う感じだ。色々な飛び方を混ぜている。そういう感じがした。

＜＜おそらくだがアレも俺達の世界のものの一つだと思う＞＞

＜＜え　アレもおっさん達の世界のモノなの？＞＞

チカが俺の言葉に反応する。こういう時に真っ先に反応するのは彼女だった。

＜＜多分な　詳しくは下に降りたら話す＞＞

また厄介ごとの種が増えたなと思うと少しため息が出た。だが休んでる暇は無い。再び空に轟音が走った。

＜＜この攻撃もなんとかしなければ　アレシマ管制塔　こちらコトブキ飛行隊＞＞

レオナがアレシマ管制塔へ呼びかける。しばらく反応がなかったが少しして返事が返ってきた。

＜＜こちらアレシマ管制塔　現在墜落機の捜索および負傷者の回収等で手が離せないそれぞれの判断で行動を取ってくれ＞＞

そう言い残して無線が切れる。混乱してるのは分かるが場慣れしてないあまりにも雑な指示に溜息が出た。

＜＜さてどうするレオナ？＞＞

レオナに聞くとこちらは直ぐに返事が返ってくる。
<<サイファーそっちの燃料はどうだ？>>
言われてすぐに燃料計をチェックする。針は半分より少し上のあたりを示している。どの辺りからの砲撃か分からないがここから発射元を探しに飛んで戻ってくることは出来るだろう量だ。
<<燃料は大丈夫そうだ　弾もほとんど減ってない　ピクシーそっちはどうだ？>>
<<残燃料は十分ある　大丈夫そうだ>>
<<よし　北東方面の部隊を援護する　全機用心して飛行するように！>>
レオナが号令をかけて編隊が北東方面へと機首を向ける。見えるだけでもすでに地上から戦闘機が落ちたであろう黒煙がいくつも上がっていた。
<<酷い　何機もあの火の玉みたいなのにやられちゃってる…でもなんでアレシマを直接狙わないんだろ？>>
キリエがぼそりと呟いた。
<<まだ届く距離じゃないってところかしらね　抵抗できないように戦力を減らしてから強力な武器を突きつけて交渉を飲ませるってところかしら>>
<<イサオ信奉者らしい手口ですわね>>
エンマが毒を吐いた時また空に爆発が起きる。こちらが狙われていないとはいえだ

んだんと砲撃エリアに近づいてきたのか機体を揺さぶる衝撃が大きくなり始める。
<<ねえ　あの砲撃って前にイケスカで戦ったうるさいヤツのキンセツシンカンと同じ感じなのかな？>>
　チカが言った。それにケイトが答える。
<<おそらくそう　ただし爆発の規模から想定される砲弾の大きさから考えて作動範囲は大幅に大きい>>
<<じゃあ狙われたら避けられないってこと？>>
<<回避は難しい>>
<<なら狙われなきゃいいわけだよな？　燃費は悪くなるが超低空で飛んで発見を遅らせたらどうだ？>>
　二人の会話に割り込んで言った。レオナが反応する。
<<それしかないか　よし　高度３０クーリルを維持して北東へ進む　攻撃できなかった場合はヤツらの情報を持ち帰ることを優先する！>>
　コトブキ飛行隊が機体を降下させて低空飛行に移る。渓谷でもあればもっと楽に近づけそうだが現状はこれができる最大限の作戦だ。
　前方を見上げると離陸前の混雑が嘘のように空いていた。本来ならば視界にもっと多くのシルエットが映るはずだった。

<<酷い有様だな…>>

ピクシーが呟く。大抵のことには動じないこいつもここまで大ごとだと流石にくるものがあるらしい。

<<こちらアカツバメ隊！　誰か聞こえるか！北東方面に飛行船らしき姿が見えた！>>

無線に若々しい声が入ってくる。デトの声だ。この攻撃で無事なあたりなかなか運と腕がいいらしい。

<<こちらガルム1　今援護に向かってる！デトどの辺りかわかるか？>>

<<アレシマ市街から東北東へ約35キロクーリル程度だ！おそらくこっちへ向かってきてる　これから向かって攻撃を開始する>>

<<待てデト　アカツバメだけじゃ無理だ　俺たちの到着を待て>>

<<先に攻撃を開始する　少しでも早い方が被害が減るはずだ！>>

そう言って彼からの通信がなくなった。流石に無謀すぎる。若さ故の思い切りの良さは良いがあいつらの経験の少なさでは万が一に対応できる手数が無さすぎる。

<<急ごうサイファー　彼らだけでは危険だ>>

レオナが言った。スティックを握る手に力が入る。全速力で北東へ向かう。方位と距離がわかるのならもうあとは行くのみだ。

低空飛行のままアレシマ市街の北側を抜け本来の北東方面の飛行隊の担当空域に入る。高度も相まってここまで近づくと黒煙の根元がよく見えた。バラバラになった機体の残骸や不時着している機体。そしてそれを回収しようとしてる部隊などが見える。

＜＜見る限り彼らは攻撃されてないわね　低空で接近するのは正解だったかしら＞＞

ザラが周りを眺めながら言う。ここまでは順調だ。ザラの言うように今のところこの高度に向けては砲弾は飛来していなかった。まとまって飛ぶ航空機が減ったからか砲弾の飛来回数自体も減っている。

そろそろ見えるかと目を凝らして索敵をする。予想とデトの目撃情報が正しければ少しは機影が見えても良さそうだ。

＜＜ねえあそこ！11時の方！＞＞

チカの声に反応してその方向を見ると空のライトブルーの中にうっすらと薄いグレーの何かが浮いているように見えた。さらによく見ると飛行船のようなシルエットをしてるのが分かる。

＜＜あれだな　なかなか見つからないわけだ　迷彩で空に溶け込んでやがる＞＞

派手な色をした飛行船の多いイジツではあまり見ない実用性を重視した塗装。その上かなり大きそうだ。

＜＜引き続き高度を下げたまま接近しよう＞＞

そう言った時に俺たちの前方１００００ｆｔほどの高さに四機の機影が見えた。飛び出たままの脚からデト達アカツバメ隊の九六式だと分かる。彼らはもう敵の飛行船までかなり近づいている。そして恐らく見つかってもいた。

＜＜アカツバメ隊！　そのまま行くのはまずい！一度下がれ！＞＞

＜＜いやこのまま行く！これ以上被害は出せない！　みんな行くぞ！＞＞

こちらの制止も聞かずに彼らが飛行船に向かって進んでいく。四機で先行するのはいくらなんでも無謀すぎる。

＜＜くそっ！　こちらサイファー　高度を上げてあいつらの援護に回る　コトブキ飛行隊はそのまま低空で奴らの背後まで回り込んでくれ！＞＞

＜＜了解　無茶はするなよ＞＞

＜＜無茶しないで済むならな　ピクシー行くぞ！＞＞

スティックを引いて上昇を開始する。相手の兵装が詳しくわからない以上ぶっつけ本番でこなすしかない。

俺たちが上昇を開始して少ししたところで飛行船の様子が変わる。今までライトグレーの迷彩塗装だった船体に黒鉄色のものが見え

始める。船体の上部には単装ではあったが戦艦の主砲の様なものまで見えてきた。

＜＜おい　変形しやがったぞ＞＞

<<こいつはすごいな…>>

俺もピクシーも驚きの言葉しか出てこなかった。

上部に砲が出たあと少しして砲がわずかに向きを変え始める。角度的に俺たちの方を向いたわけではなさそうだ。そうなれば自ずと誰を狙っているか分かる。俺たちの他に接近してくる存在、デト達だ。まだ彼らは出現した砲塔が自分達を狙っていることに気づいていない。

<<デト！散開しろ！奴ら狙ってるぞ！>>

叫んで彼らに警告をする。

<<りょ　了解！>>

急に叫んだ俺の声に驚きつつも前を行くアカツバメ隊が左右にブレイクする。彼らの機影が別れたのを確認した直後にその付近に砲弾が炸裂する。北東方面の飛行隊を吹き飛ばしたあの爆発より遥かに小さく高射砲の炸裂よりは大きいと言った程度だ。

<<こいつが近接防空用というわけか>>

<<船体上部に砲塔が四機　躱すのはそこまで難しくなさそうだ>>

俺がそう言った瞬間再びアカツバメ隊の近くで砲弾が炸裂する。

<<うおっ！>>

<<ムート　大丈夫か！>>

<<大丈夫だ　ふぅ…少しちびりそうになったけど>>
　爆発の近くにいたアカツバメのメンバーがぼやく。あの調子なら損害はなさそうだ。
<<再装填まで大体5秒程度か>>
　機体の速度差と彼らがブレイクして蛇行しながら接近している事が重なって前を行く彼らとの距離がだいぶ近づいてきた。そろそろこっちもあの単装砲の攻撃範囲に入りそうだ。やはりでかい。確認できるだけでもエンジンは羽衣丸より6つは多い。胴体の太さも4割増しといったところか。
<<距離感が狂いそうな大きさだな>>
<<サイファー　測り間違えてぶつかるなよ>>
　そんなことを言ってるとアカツバメを狙っていた上部の砲塔のうち二基がこちらに砲口を向けた。
<<ピクシー来るぞ！>>
<<分かってる>>
　一直線に進むのをやめ緩く左右へ蛇行を始める。まだ小さく見える砲身の動きに睨みを効かせる。こちらを追うような動きをした後に砲身がピタリと動きを止める。
<<ハードレフト！>>
　スナップロールで左に素早くバンクさせてからスティックを手前に強く引く。直後

に機体の下あたりで砲弾が二発炸裂した。爆風で機体が軽く揺られる。爆風に煽られる機体の挙動を抑えた後に見える範囲で自機の外装をチェックする。損傷はない。

<<よし　この調子でもっと近づくぞ>>

再び緩く旋回を繰り返しながら接近する。旋回した砲身が止まるのを確認してブレイク。砲弾が炸裂するが被害はない。アカツバメ隊の方は躱すのに手こずっているようだが今の所被害はない。

だんだんと距離が近くなってくる。やはりでかい。今まで見た飛行船の中で一番大きかったのは昨日見たポロッカの船だったがそれよりもさらにワンサイズ大きい。戦闘機と比べると小魚と大鯨といった具合だ。だが大きさにビビってる時間はない。距離が詰まり単装砲に変わって敵の対空機銃が火を噴き始めた。図体がデカイだけあって羽衣丸クラスの飛行船よりもはるかに火線の数が多い。

<<この弾幕に飛び込むのは骨が折れるな>>

<<だが飛び込まなきゃな　これ以上近づけたらアレシマ市街にあの砲弾が飛び込みそうだ>>

覚悟を決めて操縦桿を握りしめる。現在の高度は奴らより３０００ｆｔ高いくらいだ。

<<行くぞピクシー>>

敵船を見据えて飛行船の斜め前方から降下を始める。目標は敵船側面に付くエンジンだ。

思っていた以上に激しい弾幕に飛び込んだことを後悔しかけたが重力を受け加速する機体を止めることはできない。下手にここで旋回すれば投影面積が増えて余計に危険だ。ラダーペダルを踏み込み機体を滑らせ少しでも被弾率を下げようと試みる。

サイトを覗きレティクルをエンジンに合わせ、いつも戦闘機を狙う時よりも遠い３００ｙｄでトリガーを引く。翼のから飛び出た銃身が火を噴き飛んでくるのとは違う色の曳光弾が目標めがけて飛んでいく。船体スレスレを通り敵船下方に抜ける。

振り返ってみたがエンジンにほとんどダメージは無くエンジンと船体を繋ぐ支柱に少し穴が開いてるのが見えた。初撃は満足のいくものでは無かったが幸いなことにこちらの機体もほとんどダメージはなかった。水平飛行に戻り弾幕の届かない安全圏でピクシーと編隊を組み直す。どうやらピクシーの方も有効打は与えられなかったようだ。

＜＜こちらピクシー　有効打ならず　…にしてもなんて大きさだ＞＞

＜＜距離感が狂って狙いづらいな＞＞

＜＜彼らに続け！＞＞

ボヤいているとデトの声が無線から聞こえる。なんとか単装砲の攻撃を抜けたよう

だがその勇ましい声に比べて機体の操作には若干の疲労が見られる。赤い翼を持つ四機が俺たちの飛び方を真似て飛行船の弾幕の中に飛び込む。だが完全な模倣とは言えなかった。彼らは弾幕の一番濃い側面からの降下を選んでしまっていた。弾幕に飛び込んですぐに一機の九六式の翼から炎が上がった。

<<くそ！翼が！>>

<<離脱してから脱出しろゲン！>>

<<すまない　後で回収頼む！>>

火を噴いた九六式が僚機のそばを離れて弾幕から抜けていく。飛行船から離れたところで機体の上下が反転しパイロットが外へと飛び出るのが見えた。

ピクシーと編隊を組みながら俺はアカツバメ隊を狙う火線を睨みつける。

<<相棒　何かいい策は思いついたか？>>

<<もう少しでひねり出せそうだ　ただ確信を得るためにはもう一度あの弾幕に飛び込まないとな>>

俺はこの弾幕の中で少しでも薄いところを探し出そうとしていた。俺たちの一撃目とアカツバメ隊の攻撃で概ねの予想は出来た。

近くで見る限りこの飛行船の武装は船体左右側面に十基程度の対空機銃が五列ずつ、上部に先程撃ってきた単装砲が四基、そして船首には飛行隊を吹き飛ばした大型砲が一

門といった具合だ。
<<俺の飛んでみた感触じゃ船体後部の弾幕が一番マシそうだ>>
<<了解　敵の7時方向から仕掛けてみる>>
　敵船の上部に出たところで再びピクシーとの編隊を崩す。ピクシーと反対側に当たる敵船5時方向から仕掛ける。大まかに攻撃目標の当たりをつけて降下の準備に入る。機体を反転させ降下し再びあの弾幕へと飛び込む。
　今度は狙いやすくするためにラダーの踏み込みを浅くした。先ほどよりも滑りは緩やかだが機体が致命傷を負うこともなく目標まで４００ｙｄほどのところまで接近できた。レティクルに対してまだ小さく狙いづらいエンジンポッドの進行方向側にリードを取ってトリガーを引く。トリガーを握っている間左右のラダーペダルを交互に踏み込んで弾を左右に散らせる。曳光弾が左右に帯のように広がりながら飛んでいく。距離感の掴みづらい巨体を再び掠めながら船体下部へと通り抜けた。振り向いてみると狙ったエンジンポッドから黒煙が上がっている。どうやら今回は有効打を与えられたようだ。噴き出した煙が炎に変わりプロペラが一基停止した。
<<こちらガルム1　　エンジン一基破壊>>
<<こちら2　こちらも黒煙を確認　だがエンジン停止まではいかなかった>>
　船体から離れた位置で再びピクシーと合流する。左右から黒煙が上がってる姿は見

えているがやはりエンジン二基を壊した程度では速力はほとんど落ちなかった。
<<弾幕の薄いところは分かったがそれにしても狙う的が多すぎるな…まったく>>
<<ああ……サイファー　燃料は後どのくらいだ？>>
　ピクシーにそう言われて燃料計を見る。かなり消費していた。おそらく後２回程度の攻撃でビンゴになりそうな量だ。
<<後二回が限界ってとこだな　>>
<<了解　かなり厳しいな…>>
　その時だった。オープンチャンネルで聞きなれない声が聞こえてきた。
<<こちらは自由博愛連合所属　飛行船オオトリ　本船は現在アレシマ北東２５キロクーリルに位置し間も無くアレシマ市街を射程圏内に捉える　我々はアレシマ市に次の三つを要求する　アレシマ市の自由博愛連合への加盟　自由博愛連合の戦力の駐屯　アレシマ滞在中のオウニ商会社長ルゥルゥ　ガドール市議員ユーリア　ポロッカ市長ゴドロウの身柄引き渡し　以上の要求が受け入れられない場合　アレシマ市街地への攻撃を開始する>>
　この惨事を引き起こした者からの事実上の降伏勧告だった。
<<街を人質にとって恐喝とはな…>>
　ピクシーが呆れたように言った。直後に彼らが次いで言った。

<<また３０分以内に返答しなかった場合も要求を拒否したと見なし攻撃を開始する>>

その言葉を聞いていたアレシマ管制塔が思わず声をあげた。

<<３０分!?　無茶苦茶だ!そんな時間で協議できるわけないだろう!>>

あまりにも無茶な要求だ。

<<せいぜい政治家共が早く集まることを祈ることだ>>

そう言ったのを最後に通信が途切れる。

<<くそっ!>>

デトが機体を翻して飛行船へと飛び込んでいく。

<<よせ!デト!>>

アカツバメの隊員達が止めるのも聞かずに弾幕に突っ込む。だが怒りに任せた操縦では近くことも叶わない。圧倒的な弾幕が彼の機体を傷つけ最後にはエンジンに被弾し火を噴いた。

<<くそっ!くそっ!!>>

彼が声を荒げながら機体をコントロールする。その時再びあの声が無線から聞こえた。

<<このオオトリの前では何をしようとも無駄な努力だ　諦めて逃げるがいい>>

<<ちくしょう！>>

そう言い残しデトが火の上がる機体から空へと転げ出る。頭に血が登ってはいたがなんとか脱出という冷静さは残っていたようだ。だが残った二機はあまり冷静とは言えない状態だ。疲労と二人墜とされた焦りでふらついている。

<<アカツバメの残った奴ら聞こえるか？　お前らはデトともう一人を救助しに行け　こっちは俺たちでやる>>

<<すまない…頼む>>

アカツバメの残存した二機にそう言うと彼らは素直に従った。

<<さて…どうするサイファー>>

ピクシーが俺に尋ねる。現状の残燃料と弾薬ではこの船を墜とす算段は思いつかなかった。

<<やれるだけやろう　少しでもダメージを食らわせてやる>>

再び上昇して船体後部に回り込む。三度目の降下だ。アカツバメがいなくなったことで全ての機銃が俺たちへと牙を剥く。薄い後方を選んだとは言え二割程度多く弾が飛んで来ている気がした。フルスロットルで弾幕に飛び込む。今度はラダーを踏まずに真っ直ぐに突っ込んだ。あまり多くない弾数でできる限り仕留めなくてはいけない。弾が何発か機体を掠める音がするが無視して飛び込む。

２００ｙｄを切ったあたりでエンジンに一斉射を叩き込む。撃ち込んだエンジンの前を通り抜ける直前に爆発が起きる。やっと二つ目だ。だが残弾と残燃料はもう残り少ない。船体下部を通り抜けて安全圏へ抜け、次の攻撃の準備のために敵船前方側から上昇する。

<<この残弾数でどこまでやれるか…>>

計器盤を見ながら呟いた次の瞬間、耳元に美声が聞こえた。

<<待たせたな！>>

上を見ると太陽を背にした六機の編隊が見える。迷彩塗装の隙間に見えるジュラルミンのシルバーが光を反射して眩しい。

<<レオナ！>>

<<分かってる！後ろからだな！>>

六機の隼が船尾側に降下して三機ずつ左右に別れた。後部から前方に向けてエンジンを撃ち抜きながら側面スレスレを駆け抜けていく。ケイトなどはエンジン取り付け支柱の隙間を飛び抜けて行った。

<<イヤッホー!!>>

俺たちに注視していた対空機銃は太陽を背に現れたコトブキに対応が出来ていなかった。エンジンを攻撃したコトブキが側面を通り抜け飛行船前下方へと降下して行

く。彼女達の攻撃でかなりの数のエンジンがダメージを受けていた。
<<なっ!?コトブキだと!どこから現れたのだ!>>
　オープンチャンネルで先ほどの脅迫めいた勧告を伝えたのと同じ声が聞こえる。声からするとかなり動揺しているようだ。
<<船長　エンジン損傷多数　推力低下このままでは主砲発射の反動で墜落する恐れがあります>>
<<くそっ　ここまで来て……>>
　焦りからだだ漏れになっている通信を聞いて俺は無線機のダイヤルをオープンチャンネルに合わせた。ハッタリを効かせるなら今だと思った。
<<デカブツの船長　帰るなら今のうちだ　こっちの姫達はまだやる気があるようだぜ>>
　アレシマの管制塔も俺に続いた。
<<こちらアレシマ管制塔　残存飛行隊に告ぐ　北東のコトブキ飛行隊と合流し敵飛行船を攻撃せよ>>
<<……船長　レーダーで南西より接近する複数の編隊を確認しました>>
　どうやったかは分からないが管制塔が満身創痍の防空隊の残存戦力をまとめてこちらへ寄越してくれたようだ。だがコトブキが派手にダメージを与えてくれたとはいえ

低空飛行で燃料を消耗し長くは飛べないオレ達と満身創痍の味方が幾ら合わさってもこの船を墜とすのは厳しいだろう。この挑発で向こうが折れてくれるのが最善だった。

＜＜……＞＞

無線がブツッと音を立てて途切れてすぐに飛行船がその巨体を転回させる。船首を北東に向けると武装を格納してアレシマから離れていった。

＜＜こちらガルム1　敵飛行船の撤退を確認＞＞

暑さでフライトスーツの襟元を緩めながら言った。

＜＜なんとか下がってくれたわね＞＞

＜＜疲れた～…あの紅い隼といい飛行船といい今日は色々ありすぎだよ…＞＞

キリエが息を吐きながら言った。

＜＜キリエ…あの紅い隼　ナオミの動きに似てましたの？＞＞

＜＜そのまんまって感じ…前にオフコウ山で墜とされた時の動きに　でもそれ以外の動きはナオミのじゃなかった＞＞

キリエが少し戸惑った声で言った。あの紅い隼にも俺たちの世界が関係しているのかもしれないとふと思った。だが何故その機体のパイロットがイジツのパイロットそっくりに飛ぶのか、それが疑問だった。

＜＜ねえそろそろ戻らないと　もう燃料があんまりないよ＞＞

＜＜よし　帰還する　詳しい話はまた降りてからにしよう　＞＞

レオナの号令で編隊を組み直し機首を南西に向ける。西の空の向こうに消えた紅い隼に疑問を感じている俺にピクシーが言った

＜＜よう相棒　まだ生きてるか？＞＞

ベルカ戦争中に何度も聞いた言葉だがこの言葉を聞くと少し安心できた。受けた被害は酷いものだったが俺たちは生き延びた。生きている限り反撃のチャンスはある。そう信じて帰路についた。

第九章　Ｃｈａｉｎ　Ｒｅａｃｔｉｏｎ

「包帯が足りねえぞ！」
「こっちに担架回せ！」
　そんな怒号が飛び交っている。アレシマ飛行場は戦時のような状態になっていた。あの巨大飛行船のもたらした被害は甚大だ。特にアレシマの飛行隊は大多数があの爆発で吹き飛ばされている。あれだけの数がいたアレシマの飛燕は離陸した半数程度しか帰って来ていなかった。戻ってこれた機体も無事なのはごく僅かでほとんどは何処かしら損傷している。救助者を乗せた機体を着陸させては次の救助機を離陸させ、合間合間で余裕のない防空隊を降ろす。管制塔にとっては悪夢の様な忙しさだろう。
　残燃料の少なかった俺とピクシーは隙を見て着陸させて貰えていた。羽衣丸の側までタキシングして待機していたナツオ班長に引渡し今は担架の搬送を手伝っていた。
「重傷者は担架に乗せて救護班テントへ！軽傷者はその場で手当てを待て！無傷の者は担架を運ぶのを手伝ってくれ！遺体はＡ格納庫へ!!」
　アレシマ警備隊の空港警備班がエンジン音にかき消されない様大声で指示を叫ぶ。救護班テントにピクシーと担架を運び終わりシートの上で救護を受ける者たち眺めた。

「酷いもんだ…キャンプに迫撃砲弾が降ってきたときの事を思い出すよ」
　俺の呟きにピクシーが反応する。
「ヴァレーに来る前の話か？」
「もっと前だ。孤児院を出て傭兵になりたて…18の頃だったか」
　昔話を語りながらテントを出て空を見上げると見知った塗装の機体が二機滑走路に降りてくるのが見えた。主翼を赤く染めた九六式艦戦、アカツバメ隊の機体だ。左右にフラつき彼らの機体が片輪ずつ接地する。あの戦いの後ではああなるのも無理はないだろう。
　誘導路を移動して救護班の邪魔にならない位置に彼らが機体を駐機させた。パイロットが降りると胴体のハッチを開けてそこに乗っていた奴に肩を貸しながら機体から降ろした。隊長のデトが隊員の肩に支えられながら脚を引きずって歩いている。
「生きてたか、着地の時に脚でも折ったか？」
　彼らに近づいて尋ねるとデトが脚の痛みに顔を顰めながら言った。
「サイファー。折れてはないよ、少し捻っただけさ…っ…つう…」
「痛そうなことに変わりは無さそうだ。救護テントはあっちだぞ」
　テントの場所を聞くとデトは分かったと言うように片手を上げて仲間に寄りかかりながら救護班の元へと歩いて行った。

デトをテントへ見送ってすぐに俺の上を6機の隼が通過した。
「お、降りてくるな」
コトブキ飛行隊の隼が綺麗に編隊を組んだままトラフィックパターンに入っていく。ぐるりと滑走路上空を周り滑走路に正対しゆっくりと隼が滑走路に降りてくる。デト達とは違いあの激戦の後でも姿勢の乱れない綺麗な三点着陸で大地に機体を接地させた。こればっかりは経験の差が大きく出る。
俺たちがアカツバメ隊の機体を止めた場所から戻ってくると彼女達も俺たちと同じように羽衣丸の元へと機体を移動させて整備班へと引き渡してる最中だった。少し近づいたところでレオナが歩いてくる俺たちに気づいた。
「二人とも怪我はないか?」
「俺たちは無事だ。さっきは助かったよ、俺たちだけじゃアレを止めきれなかった」
「そちらが敵の気を引いてくれてたおかげだ。それにチカが世話になった」
「良いんだ、それにしてもあの紅い隼なんだったんだろうな」
俺が隼の話題を出すとキリエが会話に混ざってきた。珍しく神妙そうな顔で俯きながらキリエが言った。
「あの技、ナオミそっくりだった。前に受けた時とタイミングも殆ど同じだったし…」
「そのナオミって奴は隼乗りなのか?」

ピクシーがキリエに尋ねると彼女が顔を上げて言った。
「違うよ。ナオミは零戦乗り、しかも三二型」
「キリエは何度もコテンパンにやられてるから飛び方身にしみてるもんね～」
「そんなにコテンパンにはされてないし!!」
キリエの後ろからチカがやってきていつものようにキリエを揶揄った。当然のようにキリエが食ってかかり、チカの頬をつねろうと手を上げる。いつもの光景だ。そしてその姿をレオナが呟払いしながら睨みつけ制止する。これまたいつもの光景だ。彼女ら二人が喧嘩を止めるとレオナが改めて言った。
「詳しい話はまた後にしよう。今は彼らに手を貸すのが先決だ」
「だな。じゃあ俺たちは先行ってる」
「ああ、また後で」
振り返りピクシーと共に再び救護テントの方に向かう。空を見ればだいぶ空が静かになっているのが見えた。
数時間後、すっかり陽は落ち、あれだけ人と飛行機のひしめき合っていた飛行場は普段通り、いや何時も以上に静かだった。重傷患者は順次病院へ送られて治療を受けている。そんな飛行場の格納庫だけは未だに人気が多かった。並べられているのは袋に包まれ動かなくなった骸だった。その側には妻、子供あるいは親が立ち尽くすなり泣き崩

れるなりしていた。
　死んでしまった以上は幸運も何もないだろうが、朝出て行ってそのまま帰らず亡骸も見つからないという事の多いこの世界では亡骸の近くでああやって家族が泣くというのはまだ多少運のある方なのだろう。
「やっぱりつらいな…ああいうのを見るのは」
　羽衣丸の外でタバコを咥え格納庫を眺めながら俺は一人ボヤいた。途中まで俺に付き合っていたピクシーは疲れたから寝ると言って部屋へ戻っていた。ドライな奴を気取ってるが本心は感傷的なのでこれ以上見ていられなかったのだろう。
「……」
　紫煙を浴びながら頭の中ではあの巨大飛行船、『オオトリ』の事を考えていた。船体自体はこの世界でも作れるかもしれないが、あの船首の巨大な砲とそこから撃ち出される砲弾は艦砲に関する知識のほとんどないこの世界の技術のみでは作り上げるのは無理だろう。この世界でそんな事をできるとすればグラオヴェスペ隊が乗っていたＢｆ１０９を作った『グランダーＩＧ』くらいしかない。だがなぜベルカ人と元ベルカの兵器製造会社がこの世界に関わりを持ち自白連を支援しているのかが分からない。この世界で暗躍して奴らにはなんの得があるのだろうか。一体何を企んでいるのだろうか。
「……ふぅ」

考え込んでいるうちに燃え進んだタバコの灰が重みで落下した。落ちる灰を目で追うと視線の端に人影が見えた。近くの木箱に置いた灰皿に短くなったタバコを押しつけて消した瞬間、人影が俺の名を呼んだ。

「サイファー、ここにいたのか」

いつもどおりの凛とした声。レオナだった。

「レオナか。どうした?何か用事か?」

彼女の名を呼び尋ねると彼女はすぐに答えた。

「ああ、マダムから連絡だ。明日の朝9時に社長室まで来て欲しいとのことだ」

「了解。ありがとうよ」

彼女の方に顔を向け短く礼を言う。だがそこからが問題だった。今までと違いまるで会話が続かなかった。昨晩の一件のせいか今までできていたレオナとの会話が進まない。わずかな時間でぎこちない空気になってしまっていた。

「…」

「…」

何かを話すことを待ったまま沈黙が続く。なんでもいいから会話を続けようととりあえず彼女の体調を聞いてみることにした。

「ところでレオナは怪我はないか?」

「え、ああ…」
「…頭の傷はもうだいぶ良いのか？」
「ああ、塞がってる…」
　なんとか会話を続けようとするが二往復で精一杯だった。頭の中から今日の敵の事はすっかり消えて今は彼女とどう会話をつなげるかということばかりを考えている。
「…」
「…」
　再び二人で無言で佇む時間が続く。意を決して俺はレオナに向き直した。
「レオナ、昨日は……その…すまなかった。急にあんな方法で告白をしてしまって…」
「……」
　謝る俺を見たままレオナは黙っていた。俺が言葉を続ける。
「自分の勇気の無さを言い訳にしてあんな事を…」
　その言葉を聞いて少ししてレオナが微笑んで俺を見て言った。
「良いんだ。……ただアレは流石に突然すぎて驚かされた」
「本当にすまない…」
　謝る俺から目を逸らして顔を赤くしながらレオナが言った。
「だが私もその…驚きはしたが悪い気はしなかった。あの砂嵐の中で助けられた時から

…私も似た気持ちだったのかもしれない」
「レオナ……」
「だから私もサイファーと……そういう関係になる事は……嫌ではない…」
最後の最後にこちらを向き俺の目を見つめるレオナはとても素敵だった。見惚れて声も出ず瞳に吸い込まれそうだ。
「…ありがとう」
「まあお互いこういう事には不慣れなんだ。ゆっくり進めて行こう」
彼女の言葉を聞き嬉しくなり急にあんな事をしたのを謝ったばかりだというのに身体が動き彼女を抱きしめてしまった。抱きしめた彼女は動かずにまた驚いたように言った。
「ゆ、ゆっくり進めようと言ったばかりだろう」
「俺の世界じゃハグくらいは普通なんだ」
「はぁ……郷に入れば郷に従えというユーハングの諺もあるぞ」
そう言いつつもレオナは自分に抱きつく俺の背に手を回し抱き返してくれた。髪から香る彼女の匂いが鼻をくすぐる。とても幸せだった。
その時、羽衣丸の方から物音が聞こえた。抱き合ったまま二人で物音の方向を見ると羽衣丸のゴンドラの窓からキリエとチカが口を開けて見ていた。それを見たレオナが

咄嗟に俺の胸を突き飛ばし身体を離す。抱き合う姿を見られたからかその顔が余計赤くなっていた。先ほどまで唖然と見ていたキリエとチカがニヤニヤと悪い笑みを浮かべている。そして誰かにこの事を伝えんとばかりに奥へと移動し始めた。たまらずレオナもその後を追おうと羽衣丸の方へと向かった。向かいながらレオナが顔をこちらに向け言った。

「明日朝9時だ！忘れるなよ！キリエ！チカ！待て！」

用件をもう一度言いレオナが二人を追って行く。俺は一人で佇み手に残った彼女の感触の余韻に浸っていた。

「ＰＪ…こういうのっていいもんだな」

夜空を見上げ空に散ったもう一人の僚機の名前を呼んだ。今こそまさにあいつと語り合いたかった。

色々あった日から一夜明けた。流石に疲労が抜けきらず溜息が出る。サルーンで軽い朝食を済ませマダムの元へ行く準備を整える。

朝食を食べてる間キリエとチカが昨日と同じようにうっすら笑みを浮かべながらこちらを見ていた。エンマやケイトが無反応なところを見るとレオナはなんとかあの二人の口止めに成功したらしい。レオナの相棒であるザラ昨晩何かあったことに気づいてるような視線でこちらを見ていた。

羽衣丸の社長室前で一度深呼吸をし扉をノックすると中から入ってという声が聞こえた。
「失礼します」
扉を開けると中でマダムが煙管を片手に自分のデスクに着いていた。口から煙を吐き出し残ったタバコの灰を落として煙管を置くと俺の目を見てマダムが言った。
「早速だけど本題に入るわね。あなたと相方に仕事の依頼が入ってるわ」
「私とピクシーにですか?」
「ええ、アレシマ市からイヅルマ方面への調査の依頼よ」
「市からの依頼でイヅルマへの調査?」
行ったことはないが名前は聞いたことのある都市だ。この世界でもかなり裕福な都市で飛行船建造で発展していった都市だ。だがアレシマが俺達二人にイヅルマ行きを依頼する理由は分からなかった。
「昨日の襲撃でアレシマ飛行警備隊は大きな損害を受けたわ。その損害の復旧が済むまでの間、飛行隊の手を貸してほしいという話、報酬も相場の倍出すそうよ」
「その間コトブキと羽衣丸は?」
「彼女達にも依頼が来てるわ。どちらも引き受けた場合その間停泊する羽衣丸の費用も市が負担する」

報酬を倍出した上に停泊中の費用も持つ。大都市だけあってやる事は派手だ。俺は依頼の中身についてマダムに尋ねた。
「調査という事ですが何を調べるんですか?」
「あなた達が対峙した飛行船の行方よ」
「アレを探せと…」
骨が折れそうな依頼だ。そう思ったときマダムが続けて言った。
「コトブキとあなた達の攻撃でアレは撤退に踏み切った。損傷はかなりの筈よ。アレシマ側はその修復前に確保もしくは破壊したいそうよ」
「それでわざわざ人を借りてまで探すと」
確かにあの化け物を潰すのであれば叩けるうちに叩いておいた方がいいだろう。地上にあるうちに確保できればそれだけでも被害は減る。
「場合によっては危険な状況になるわ。無理に受けろとは向こうも言ってないし私も言う気はない。しっかり考えて決めなさい」
マダムはそう言って再び煙管に葉を詰めて火をつけた。考えて決めろと言われたが俺の腹は決まっている。俺たちの世界の技術が使われているであろう兵器の調査を他人に任せるつもりは無かった。
「引き受けます」

アレシマ側からマダムが預かっていた契約書類にサインをして社長室を後にした。今回の仕事でグランダーＩＧやらベルカ人パイロットやらの情報も掴めればなおいいのだが。

ピクシーにこの事を伝えようと自室に戻ると彼はベッドに寝転がりながら本を読んでいた。彼が戻ってきた俺に気づき本を閉じる。

「よう戻ったか。何処行ってたんだ。……あの隊長と密会か？」

「今日は朝飯食ったとき以外会ってない」

「ほう、『今日は』ね。昨日の晩、俺が戻った後何かあったか？」

悪そうな笑みを浮かべながらベッドから彼が起き上がった。俺はそれを無視して仕事の事を話し始める。

「仕事を受けた。イヅルマ方面へあの化け物飛行船を探しに行くぞ。発進は一時間後だ」

「了解、準備しておく」

特に文句を言うこともなくピクシーが持ち物をまとめ始める。仕事に関しては相変わらずきっちりしてるやつだ。ここまでプライベートの事を茶化してくるのだけは予想外だったが。向こうで使うものを一通りバッグに準備しピクシーと外に駐機してある機体へと向かう。

外ではすでにナツオ班長と整備班たちの手で機体の始動前準備が行われていた。機体に近づくとこちらに気づいたナツオ班長が近づいて来て機体の注意点を教えてくれた。
「お前らはイヅルマ行きらしいな。結構な距離を飛ぶから増槽を着けておいた。いつもより重いから注意しろよ」
「了解、ありがとう班長」
一通り機体の外見チェックをした後、翼の上へと上がりシートの後ろにバッグを放り込み座ろうと機体の中に入ると俺の機体の側にレオナが近づいてきた。
「あの飛行船を探すそうだな。分かってるとは思うがあれは相当危険だ」
機上にいる俺の方を向きながらレオナが言った。
「ああ分かってるよ。ちゃんと生きて帰ってくるからそっちも気を付けてな」
そう返すと彼女は機体の側から離れて行った。それを確認して機体のシートに座る。こうして女性に心配されるというのはなんだか悪い気分ではなかった。緩む顔とベルトを締めて機体の動翼チェックをしエンジンを始動する。レシプロ戦闘機のエンジン音にももうだいぶ慣れてきたが同時にF―15のターボファンの音も恋しくなってきていた。
＜＜各部異常なし　ピクシーそっちはどうだ？＞＞

<<こちらも異常なし　いつでも上がれる>>

整備班へとチョークを払う様に手で指示を出す。チョークが払われ滑走路へ向けてタキシングを始める。班長の側で見ていたレオナに手で『じゃあな』と合図を送ると彼女も少し恥ずかしそうにしながら同じように手で合図をしてくれた。

誘導路を移動していくと所々に使えなくなった機体の残骸の山ができているのが見えた。まだあの戦いから２４時間経過していないと考えるととてつもなく密度の濃い１日だったと改めて思う。

管制塔から滑走路進入許可を得て滑走路へと進入し機体を停止させる。動翼のチェックをしフラップを展開を確認して管制塔から離陸許可をもらう。

<<よし　ピクシー行くぞ>>

<<了解>>

スロットルを徐々に上げ機体を加速させていく。尾輪が上がり水平になった機体がしばらくして空へと浮かび上がる。ナツオ班長が言ったようにドロップタンクを抱えてるからか少々動きが重い。

脚とフラップを格納し飛行場上空を旋回してイヅルマの方角へ機首を向ける。上から見ると残骸の山が一目瞭然だ。正面を向き直し一人でぼやく。

<<さて　イヅルマまで何も無ければいいんだが…>>

しばらくの間飛行を続けて俺とピクシーは航路のほぼ終わりに当たる空の駅を通過していた。ここを越えればイヅルマまでは後少しだ。そして案の定問題が発生していた。

<<相棒　気づいてるか？>>

ピクシーが俺に尋ねた。

<<後ろの２機のことだろう？　３つ目のウェイポイントを過ぎたあたりからずっと着いてきてるよな>>

後ろを振り返りその機影を再確認する。ここはイヅルマへの主要航路なので近くに別の機がいてもおかしくはない。だが加減速を加えたり何度か意味のない旋回をしても殆ど距離を変えず着いてきているのが怪しいところだった。

<<流石に仕掛ける訳にもいかないしな>>

<<ん？　…サイファー　その心配はしなくてよさそうだ　１０時と１時　二機ずつこちらにきてる>>

ピクシーが言った方向を向き直す。たしかにこちらに向かって飛んできている二機編隊が見えた。高度は向こうの方が若干上だ。

<<合計六機か　ピクシー　ドロップタンクの残燃料は？>>

<<ほぼ空だ　全力戦闘をしてもイヅルマまでは機内燃料で余裕で届く>>

＜＜班長に感謝だな＞＞

スティックとスロットルを握り直しいつ攻撃されてもいいように構える。

＜＜青い翼と片翼の赤い紫電改　あいつらか＞＞

＜＜あれを墜とせば金ががっぽりだ　仕留めるぞ！＞＞

俺たちの１時方向にいた二機が機首を下げてこちらへ降下を始める。５００ｙｄの距離で二機が発砲した。

＜＜　ブレイク！ブレイク！＞＞

無線で叫びピクシーと左右にブレイクする。それと同時にシートの横にあるドロップタンクの投棄レバーを押し込んでドロップタンクを落とす。ガコンという音と共に機体が少し浮き上がる。攻撃してきた機体がこちらの後方へと飛び抜けていった。

＜＜ガルム１から２へ　分散して墜とすぞ＞＞

＜＜ウィルコ＞＞

ブレイクしピクシーと別れたまま交戦状態に入る。周囲を見回し飛び抜けていった二機以外の位置を確認する。先程まで後ろにいた奴らはもうすぐこちらに追いついてくるが１０時方向にいた奴らはまだこちらに近づくまで時間がかかりそうだった。

スティックを引きスロットルを押し込んで少し機体を右に旋回降下させて加速しながら先程飛び抜けていった二機の後ろに回り込むように機体を操る。この二機は五式

戦のようだ。

<<こっちの後ろに青いのが着いた　そっちで狙えるか？>>

<<無理だ　まだ距離がある>>

周囲を再び確認する。ピクシーはどうやら俺たちを尾行していた二機へと向かったようだ。まだ接近途中の機体への注意は払ったまま目の前の五式戦を狙う。

先ほどの降下で稼いだ速度を使い前を飛ぶ敵機との距離を詰める。５００ｙｄ程の距離で牽制のために機銃を発射する。ラダーを使い二機に当たるように弾を左右に散らす。曳光弾が何発か敵の横を通り抜けるのが見えた。被弾を警戒した片方の敵機が右に旋回を始めるのを確認し最短ルートで近づくように進路を向ける。距離２５０ｙｄ。多めのリードアングルを取り旋回する敵機の進路へ向け機銃を放つ。曳光弾の軌跡が伸び敵機へと吸い込まれていった。

<<こちらガルム１　敵機撃墜>>

<<くそ！操縦が効かない!!>>

翼から火を吹いた五式戦が荒野へと墜ち始めるのを確認してもう一機へと意識を向ける。

残った五式戦は一度俺から離れるように旋回していた。もちろん逃す気はない。左に機体をロールさせて敵機の背後を追う。向こうは狙いを定めさせないように左右に

旋回を繰り返していた。だが焦りからくる荒い操作で速度の低下が著しい。俺は向こうよりは緩い左右の旋回を行い速度を落とさないように照準を合わせつつ接近していく。距離２２０ｙｄ、完全に射程に入った。

＜＜くそっ!!＞＞

　左への切り返しで敵機がブレイクする。ベルカ戦争の時から何度も見たパターンだ。見飽きている。あらかじめとっておいたリードアングルからさらに角度をつけて敵機の行き先に向けて機銃を放つ。２０ｍｍ弾が進んだ先で敵機とぶつかり炸裂する。

＜＜チクショウ!!＞＞

　エンジンと翼から火と煙を上げながら五式戦が大地へと墜ちて行き地面に叩きつけられる。

　周囲を確認して次の敵グループを探す。１０時方向にいた奴らがｌｎｍのところまで接近してきていた。

＜＜こちらピクシー　敵機を撃墜＞＞

　その言葉を聞き、ピクシーがいる方角へ目を向けると黒煙が大地へ向かうのが見えた。向こうの一機をピクシーに任せたままもう二機を迎撃する準備を整える。

＜＜奴らは保たなかったか＞＞

＜＜所詮は雇われの空賊だ　我々で仕留める＞＞

二機の機影がこちらに向けて降下して接近してくる。スロットルを奥まで押し込み先程失った速度を交戦までにできるだけ回復させる。

距離５００ｙｄで敵機が編隊を崩さないまま牽制の弾を撃ち込んできた。ラダーとエルロンで横滑りの姿勢を取り、敵の射撃を難しくしながら横滑りの状態からトリガーを引いて機銃を放つ。当たらずとも編隊を崩せればいいと思った一撃だが練度が高いのか奴らは編隊を崩さず向かってきた。そのままお互い被弾することなく敵機とすれ違う。敵の機体は翼に帯状のエンブレムの描かれた茶色い迷彩の疾風だった。このエンブレムの奴がいるなら間違いなく俺たちを狙っての戦闘だろう。

編隊を崩さず降下しながら抜けていった疾風二機を目視しつつ策を練る。再び疾風が機首をこちらに向けて接近する。同じようにこちらも機首を向けて二度目のヘッドオンだ。急速に距離が縮まっていき、レティクル越しに見える疾風の像が大きく映る。再び横滑りさせ降下していく。距離３００ｙｄで疾風が機銃を発射し横滑りするこちらの側を曳光弾が掠めていく。距離１５０ｙｄで横滑りを脱して機体を安定させレティクルに捉えた敵機に向けてトリガーを引いた。黒煙を吹く敵機と交差した時、コクピットの中のパイロットと目が合った。

＜＜くそっ！ダメだ！＞＞

交差した黒煙を吹く疾風からパイロットが脱出し、白いパラシュートが開いた。

＜＜こちらピクシー　敵機撃墜　後はそいつだけのようだな＞＞

ピクシーが敵機撃墜を報じて俺の方へと戻ってくる。残る一機の疾風からはあまり戦意が感じられなくなっていた。

逃がすべきか仕留めるべきが考えていると北東方向に何かが見えた。目を凝らしてよく見ると戦闘機の編隊だと分かる。

＜＜……待て　方位０４５から何機か向かってくる＞＞

＜＜６機か　増援だとすれば面倒だな＞＞

北東方面に注意を向けつつ疾風に目を向ける。接近中の編隊が敵だった場合、合流されると厄介なので墜とす事に決めた。お互い速度を殺さないような旋回をしていた状態から俺が切り込み始める。旋回しつつ降下して加速し敵機と距離を詰めていく。牽制のために敵の進路へ向け一斉射、敵機が逆方向へとロールし切り返す。少し距離を詰めてまた一斉射、次にどう来るかはもう理解できていた。

左へ切り返すロールを途中で止めずに敵がフェイントをかけてそのまま右旋回に入る。予めそれを予測し機首はそこへと向けていた。三度目の斉射で敵機に機銃弾が吸い込まれ、疾風の翼が真っ二つに折れる。制御を失った機体が広い荒野へと墜ちていく。

＜＜撃墜確認　ガルム１が１機キル＞＞

＜＜さて　あの６機は敵か味方か＞＞

北東方面から向かってくる編隊に目を向ける。まともに編隊の組めない空賊も多いこのイジツで綺麗に揃った編隊はかなりの手練れであることの表れだ。スティックを握る手に力が入る。

６機がかなり近づき俺が身構え始めたところでオープンチャンネルに合わせていた無線機から女性の声が聞こえた。

＜＜こちらはカナリア自警団です　速やかに戦闘を停止してください＞＞

編隊を組む俺たちの側を白地にカラフルな翼端の紫電が通り抜ける。垂直尾翼には女性横顔のシルエットのパーソナルマークが書かれていた。旋回してこちらの後ろに着こうとする自警団機にバンクを振って敵意がないことを合図する。

＜＜こちらはオウニ商会所属ガルム隊　イヅルマへの飛行中に空賊の襲撃を受け撃退した　そちらとの戦闘の意思はない＞＞

＜＜オウニ商会…　コトブキ飛行隊の…？＞＞

声が聞こえたオープンチャンネルで事情を説明しそのまま水平飛行を続ける。自警団の機体が俺とピクシーの横へと並び、こちらを確認している。同じようにこちらも自警団の機体を眺めてみるとパイロットは全て女性だった。全員が白い制服に身を包んでいる。極めて驚いたことに自警団ながら一人、緑の髪のパイロットは居眠り操縦のよ

うだった。
　俺たちの機体のチェックが終わったのか再びオープンチャンネルで女性の声が聞こえてきた。
＜＜事情は分かりました　詳しい調書を取りますのでご同行願います＞＞
＜＜了解した　ところで自警団は居眠り操縦もありなのか？＞＞
＜＜…！すみません失礼します！……＞＞
　雑音と共に声が途切れそれからすぐに居眠りをしていたパイロットがハッとして目を覚ました。
＜＜……失礼しました　それでは着いてきてください＞＞
　俺とピクシーの周りを囲むように自警団機が着く。もし俺たちが撃ち始める様な事があっても対応できる体勢だ。
＜＜しかし女だけで構成された自警団か　こっちでも珍しいんじゃないか？＞＞
　周囲を囲む白い紫電を見ながら俺はピクシーに尋ねた。
＜＜元々は広報や宣伝を担当する部隊だった様だからな　色々あって最近はイヅルマ屈指のエース自警団として名が売れてるようだ＞＞
＜＜なるほど　腕前通りお飾りって訳じゃないんだな＞＞
　そのまま少し飛び自警団に連れられた俺たちはイヅルマへとたどり着いた。以前ピ

クシーの書いた旅行記で読んだだけだが彼の本に書いていたとおり裕福そうな都市だ。ビルの立ち並ぶ経済都市だったアレシマと比べると大型ビルは数えるほどしか無いが、大きな家が多く建っていた。富裕層の住宅街という感じか。

何事もなく無事に着陸し駐機場に機体を止めて待っていると先ほどの自警団の紫電も降りてきた。着陸も手慣れている。いい腕をしていた。

駐機した紫電を眺めていると若い女性達が降りてきてこちらに近づいてくるのが見えた。全員コトブキと同じくらいの若さだ。そして美人揃いだった。

「カナリア自警団団長のアコです。ご協力ありがとうございます」

赤い髪に白いベレー帽を被った少女が紫電改の横で並ぶ俺たちに言った。

「ガルム隊のサイファーだ。こっちはピクシー。面倒を起こしてすまないな……自分で言うのもアレだがあまり俺たちを警戒してないように見えるが…」

街の近くで空賊とやり合ったパイロットを連れてきたにしては彼女達は落ち着きすぎていると感じた。本来なら他の自警団員が来てもおかしくない状況だろう。

「オウニ商会が紫電改に乗るパイロットを雇ったと言う話はこちらにも聞こえてきていましたから。自警団の詰所はこちらになりますので着いてきてください」

「……随分有名になったもんだな」

改めてオウニ商会とコトブキのネームバリューには驚かされる。段々と名前が知ら

れ始めるというのはベルカ戦争の時以来の体験だ。
詰所へと案内され歩いているとアコが俺に尋ねた。
「そういえばお二人はコトブキ飛行隊の方々と仕事されてるんですよね？」
「ああ、一緒に働かせてもらってる」
「ザラさんはお元気ですか？」
「元気にしてるよ。今は仕事でアレシマにいる」
俺がそういうとアコの近くを歩いていた銀髪の女性が言った。
「そういえば昨日のアレシマは相当酷かったようね」
「かなり酷い状況だったよ。アレシマ飛行警備隊はかなりやられてしまった。幸い俺達やコトブキに被害は出なかったが…」
「あなた達がイヅルマへ飛んできたのもその事件が理由？」
「まあそんなところだな」
彼女達とそんな話しながら自警団の詰所内を移動していった。俺は普段の状態を詳しく知っている訳ではないがどことなく慌ただしい雰囲気が漂っている。こちらでも何かあったのだろうか。
彼女達に詰所の一室に通され調書を取られたが思いの外時間はかからなかった。どうやら俺たちを襲ったうちの二隊は自警団にも名前が知られていた空賊だったらしく

正当防衛ということで処理された。

「これで事情聴取は終わりよ。外まで案内するわね」

書類をまとめて部屋を出ようとする先程の銀髪の女性、シノに俺は外の慌ただしさの理由を聞いた。彼女は答えるかどうか少し考えてから口を開いた。

「最近イヅルマの北から南東にかけて空賊がよく現れるのよ。不思議なことに現れても移動するだけで何もしてこないのよね」

「襲ってこないのか？たしかに変わってるな」

「警戒のためにパトロールを増やしてるわ。色々と慌ただしく見えるのはそのせいかもね」

彼女に案内されて自警団の詰所の外へと出た。陽が輝き晴れ渡る空を見上げると自警団の紫電が真上を飛んでゆくのが見える。先程のシノの言っていた空賊のことが頭から離れず、何故か妙な胸騒ぎがした。